

学部

2014（H26）年度
「学科教育点検・評価（FD）報告」及び
「卒業生満足度調査結果の検討」

大学院及び事務部門

2014（H26）年度
「修了生満足度調査結果の検討」

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

Center for Educational Development (CED)

目次

学部

2014 (H26) 年度	
「学科教育点検・評価 (FD) 報告」及び「卒業生満足度調査結果の検討」	
工学部	
人間科学研究センター	2
英語教育センター	27
数理科学研究センター	29
電気電子工学科	46
環境科学科	50
電子機械工学科	52
機械工学科	60
基礎理工学科	61
情報通信工学部	
情報工学科	95
通信工学科	97
金融経済学部	
資産運用学科	100
医療福祉工学部	
医療福祉工学科	101
理学療法学科	103
健康スポーツ科学科	104
総合情報学部	
デジタルアート・アニメーション学科	106
デジタルゲーム学科	110
情報学科	118

大学院及び事務部門

2014 (H26) 年度	
「修了生満足度調査結果の検討」	
大学院 工学研究科	
先端理工学専攻	122
電子通信工学専攻	123
制御機械工学専攻	125
情報工学専攻	126
大学院 医療福祉工学研究科	
医療福祉工学学専攻	127
大学院 総合情報学研究科	
デジタルアート・アニメーション学専攻	128
デジタルゲーム学専攻	129
コンピュータサイエンス専攻	130
大学 事務部門	131

学部

2014（H26）年度

「学科教育点検・評価（FD）報告」及び
「卒業生満足度調査結果の検討」

2014 年度

学科教育点検・評価（FD）報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015 年 7 月 6 日

工学部 人間科学研究センター

2014 年度主任 足立 英郎

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

工学部人間科学研究センター（以下、AH センター）は、総合科目群の担当部署として、全学的な教育目標に依拠して総合科目群を編成し、前年度の総括を踏まえて必要な改善を毎年度行なっている。

2014 年度においても、新入生オリエンテーションにおいて、「総合科目ガイダンス」資料（添付資料1-1 & 2）を作成して学生に配布し、教養教育の意味、その目標を人文・社会・自然群（A 群）、外国語群（英語を除く B 群）、健康・スポーツ群（C 群）、キャリア形成群（D 群）、および教職課程についてそれぞれの課題とともに説明した。

また、新学期開始直前には、非常勤講師とともに講師懇談会を開催し、本学の教育目標・教育方針、大学の現状と前年度からの変更点などについて説明するとともに、専任・非専任を問わず教育の内容・方法について教員相互の経験交流と意見交換を毎年行なってきた。これは非常勤講師の方からの本学への要望などを聞く機会ともなっている。その詳細については添付資料2を参照のこと。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

中国語・韓国語・ドイツ語・フランス語の語学科目、総合ゼミナールと日本語上達法は受講生の人数制限を設け、効果的な学習が推進できるよう計っている。中・韓・独・仏の外国語科目は、初修の1年前期には短期集中で基礎が修められるように、それぞれの外国語の1と2を同時開講している。しかしその狙い通りの受講状況とはなっていない。クォーター制が求められるゆえんである。

複数のクラスを複数の教員が担当する語学やスポーツ科目については、担当者同士の情報共有、経験交流などを図る検討会を適宜開催し、日常的に連絡を密にして、教育改善に資している。座学においても、可能な限り授業中のレポートを学生に課して、教員がチェックしたうえで学生に戻すことにより、教育効果の向上を図っている。

前年度は各教員が自己の教育実践及び学生の現状について報告し、それを基に意見交換をするという試みを初めて行なった。今年度は開催しなかったが、今後も数年に一度は行なっていきたい。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

学生相談委員5名中3名がAH センターの教員であり、学生支援の観点から学生の授業参加、キャンパス生活を見守り、必要な協議を学生相談室カンファレンスの場で行なっている。教職課程についても多数のAH センター教員が教育実習指導等の中核として指導に当たっている。

4. 卒業研究指導について

学科専門以外のテーマで卒業研究を希望する学生について、学生の希望によりAH センター教員も卒業研究に当たってきた。しかし近年ではS 学科の学生がAH センターの体育教員を希望する場合以外の卒研希望はほとんどなくなっている。本年度の卒業研究担当教員は2名、卒研究生は3名であった。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

AH センターは人間の文化や社会に対する幅広い知識の習得と思考力・考察力の向上、英語以外の外国語に関する知識と能力の習得、健康・スポーツ教育に責任を負っているほか、教職課程および寝屋川のキャリア形成群にも事実上大きく関与している。しかも全学部全学科の学生を対象として教育を行っている。ところが昨年までは集計結果は学科毎と学部毎に分かれたものしかつくられていなかった。今年度はその点が改善されたので、検討が行ないやすくなった。

卒業生アンケートの集計結果のうちわれわれが目にしたのは、昨年と同様[A]の1、3～5、7b、8、10、[B]の1、3、さらに7の教職科目の獲得度である。大学全体では従来とほとんど変化はないが、B1の総合科目は0.1ポイント下がり、逆に教職科目は0.1ポイント上がっているB1については3.5の寝屋川キャンパスよりも3.4の曙キャンパスが0.1ポイント低いのだが、その曙では医療福祉工学部では下がっているが総合情報学部は上がっていて全体で昨年と同じとなっている。ところがB1が上がった総合情報学部はA1の「幅広い教養」は下がっているのである。こうした点を踏まえて上下した原因・理由について考えてみたが、特に思い当たる点は見当たらないし、納得できる説明もできないから、誤差の範囲だととらえておきたい。アセット・マネジメント学科だけが3.9から3.5へと大きく下がっているのだが、ここはAH開講の総合科目も少ないし受講生も少ないので下がった理由については判断できない。

アセット・マネジメント学科を含めて、現行のカリキュラムが「幅広い分野の教養」をきちんと提供し得ているのか、今後も引き続き検討し続けていくことが求められるが、さしあたり学生諸君からの大きな不満は出ていないことを確認しておきたい。

一番気になるのは、従来と同様に[A]7「国際的な視野」が全体として2点台と低い値になっていることである。AHが関わっている7bについてはB1とは逆に寝屋川で上がり、曙で下がり、全体で昨年と同じ2.7である。いずれにしても7abc全体を通じて評価が低いのは、カリキュラム上の開講科目メニューの問題が大きいだらう。しかし新規科目の開設が難しい状況では、7aの専門分野も含むすべての教員が、それぞれの講義等の内容において、国際的視野で物事を捉えたり、諸外国との比較の視点を充実させたりすることが求められるであろう。

集計結果でも、次にとりあげる自由記述でも、卒研やゼミ、専門科目の評価が高いのに比べて、総合科目(教養教育)の評価は全体にわずかながら低めとなっている。自由記述における総合科目に関する記述の比率は格段に小さい。ひとつの理由としては、1・2年生の時に受けた講義等の記憶は卒業生には遠のいている、ということが考えられるが、それだけではないであろう。自由記述の内容を検討したうえで改めて考えることにする

総合科目(教養教育。ただし英語を除く)に関する自由記述は、寝屋川キャンパスの場合もそれほど多くないとはいえ50件を超えているが、四條曙キャンパスでは十数件しかなく、アセット・マネジメント学科においてはゼロである。

「総合科目が全般によい」(U)との好評価もあるし、「総合科目の教員の場所がわからず訪問しづらい」(Q)という曙の意見は期待の現れともとれるが、「総合科目が高校の内容の復習になっている」(Z)、「一般教養があまり勉強にならない」(Y)、「総合科目は役に立たなかった」(Y)、「A群科目の内容がわかりづら

かった」(W)との低い評価が、「一般教養を減らして専門教育をもっと」(N)という意見にもつながるのである。 「物事を論理的に考える力がついた」(N)ことは総合科目の教育目標の重要な一つではあるのだが、実際に総合科目がどこまで寄与できたかは、この記述だけではわからない。

前期の講師懇談会を通じて教員各自の教育内容を把握している限りでは、高校の復習的な授業を行っている教員は思い浮かばない。「わかりにくかった」というのが学生の理解不足や内容の高度さによるものでなく、教員の教育能力に由来するとすれば改善されなければならない。「役に立たなかった」、「勉強にならない」とはいかなる意味かが重要であろう。教養教育が理学療法士試験に直ちに役立つものではないことは明らかであり、もしもそうした観点からの評価であるならば、「一般教養を減らして専門教育をもっと」という意見と同様に、後述するように学生に考えを改めてもらうしかない。

なお、「書くだけで単位が取れる」(J)とか、「授業をあまり聞いていなくても単位が取れた」(W)、「出席点を下げる」(F)、「もっと考えさせるようにすべき」(U)、「コミュニケーション能力を上げる授業を」(H)については、総合科目がどれだけ関わっているかはわからないが、もったもな指摘である。出席点についてはAHセンターの教員の多くは重視していないのだが、その他の指摘については非常勤講師を含めて情報を共有し、きちんと受けとめていきたい。ただし、「内容の重複」については、場合によってはやむを得ないし必要でもあると考えている。

個別の群・教科・科目で名前が挙がっているのは、最も高評価が多いのがスポーツ実習の13件で、次いで教職課程・教育実習の9件だが、これにはマイナス評価も2件ある。キャリア形成が3件、中国語・ドイツ語・情報科教育法・現代社会と青年の心理が各2件、文学の世界・哲学の世界・日本語上達法が各1件である。体育・スポーツ関係の実習科目の高評価の理由は、体力の維持やリフレッシュという点である。この科目は、友達作りあるいはコミュニケーションの向上なども同時に重要な役割・目的としているが、体育の授業の評価としては表われていない。寝屋川キャンパスにおいては体育館の不存在を問題視し建設を望む意見が例年通り多く9件あった。

「パンキョウ」などと呼んで学生が教養教育を軽視したり低く評価したりする傾向が多くの大学で見られるようである。その理由として以下のようなことが考えられる。

Y学科に顕著であったが、ある特定の専門分野の勉強を希望し、あるいは資格取得のため大学に入学したのに、自分の興味・関心と関係がない「興味もなくやりたくもない分野を勉強させられている」という意識が根底にあるようにと思われる。大学教育は専門教育だけではなく、人間形成・社会人の育成も重要な構成要素であることを、入学時から折に触れ、くり返し伝えていくことが必要であろう。

「高校の復習」という意見があったが、易しさを意識して「広く浅い」講義内容を追求した場合には、「大学の講義らしくない」、「高校の授業と変わらない」と考えられることもあるだろう。教養教育とは何か、その内容・構成はいかにあるべきか、を不断に考えていくことが求められる。専任教員の間でも、非常勤講師との懇談においても、引き続き話題・課題としていきたい。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など なし

7. 添付資料

総合科目 ガイダンス (寝屋川版)

人間科学研究センター (略称: AH センター)

I. 大阪電気通信大学と総合科目

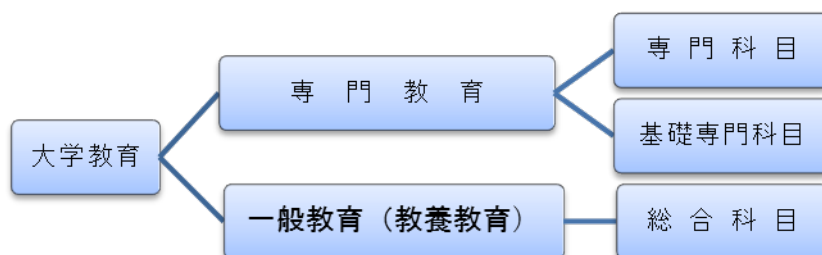
みなさん、入学おめでとう。

早速ですが、本学の教育課程には、その大きな柱の一つとして「総合科目」と総称される科目群があります。ここではこの総合科目について案内をします。『学修必携』とあわせて見てください。

■総合科目とは

(1) 本学の総合科目と一般教育(教養教育)

大学の教育は一般教育と専門教育に分けられます(学校教育法第83条)。一般教育は“教養教育”ともとらえられています。本学では、一般教育すなわち教養教育を、総合科目として実施しているわけです。



(2) 一般教育とは、そして教養教育とは

それでは、一般教育とか教養教育とはなんでしょうか。

一般教育とは英語で **General education** となります。ゼネラルとは「統合する」という意味です。人間の社会にしても自然界にしても、全体は一見無秩序で複雑な動きを見せていますが、根本的なもの、基本的な動きというのは必ずあります。そうした基本的な方向性を正しく見抜き、誤りなく全体をそれに統合させて、総合的に理解し、判断を下す力をつける教育という意味です。

次に教養のことを英語では **Liberal arts** (リベラル・アーツ) といいます。liberal には、「自由主義の、進歩的な」という意味があります。arts は、単数形では art ですが、よく使われる「芸術」という意味の他に「技術」「技芸」という意味もあります。リベラル・アーツは、「自由な生き方の技術」、すなわち「人を自由にする学問」という意味です。

General education も Liberal arts も広く物事を見、そしてその中で最も基本的で根本的なものを見抜く力を養成する教育であるというところを見落とさないようにしましょう。もちろん、教養を身につけるとは、単に「箔をつける」とか「物知りになる」ということではありません。いわば、しっかりした大人、そして社会人になるための教育です。

■現代社会と一般教育＝教養教育

本学で「総合科目」として開講する一般教育あるいは教養教育とは、上記のような、ものの見方・考え方・行動の仕方の基本を皆さんに学んでもらおうとするねらいに基づいて開講されているものです。そしてこの「広く物事を見、そしてその中で最も基本的で根本的なものを見抜く力」が、今まさに重要だと言われているのです。

たとえば、今日、IT 革命という言葉に見られるように、科学技術の進展には目覚ましいものがあります。インターネットを通じて情報は瞬時に世界を駆け巡ります。IT だけではありません。バイオテクノロジー、ゲノム研究、再生医療、脳科学、ナノテクノロジー、宇宙探査…等々。様々な分野において、速いスピードで、しかも持続的に、大きな進歩が生まれています。

しかし、これらを「進歩」という面だけで見ていいのでしょうか。実は、そうした科学技術の「進歩」自体が、同時に地球環境の急激な変化、生態系の破壊など、人類の将来にとって深刻で重大な問題の発生とも強く結びついていることは皆さんも気が付かれています。戦争の脅威も科学技術の発展と深く結びついていることは明らかです。

つまり、目の前の事象に目をくらまされないこと、全体に目を通し、根本を見誤らないことが大事になって来るのです。地域紛争、テロ、金融危機、経済的格差の増大等々の問題でも同じように、その根本を理解しなければ目の前の事象に翻弄されるばかりとなります。福島県における原発事故もこうした観点からよく考えてみるのが大事です。また、身近な地域の問題、家族の問題、男女間の平等の問題等々も同じことが言えます。

時代をつくり、進歩をになうのは私たち一人ひとりの力です。全体を見る力＝「人を自由にする学問」としての教養を身につけていなければ、人々にとって本当の自由は手に入りません。

総合科目は、みなさんの視野を広め、考え方を練り、生き方の奥深いところに関わり、人類の進歩と発展に寄与していく、最も基本的な科目なのです。

■一般教育と専門教育

歴史を振り返ってみると、人間社会は分業化と専門化、そして相互交流を進めることによって発展を加速させてきました。一方、学問は、そうした人間社会の発展の中で、自然と人間および人間社会に関する真理を究明しようとする人間本来の要求に基づいてその認識を深めて来ました。こうして、学問は一つ一つの分野において必要とされる専門知識を深め、またもう一方では、それらを総合する一般的知識も進歩させ、両者が相俟って人間の認識力を全体として進歩させてきたのです。

専門的知識と一般的知識、それらは学問の発展にとっていわば車の両輪です。例えば専門知識である工学を進歩させるためには、基礎的な数学や物理学などの理解が求められます。また、そ

の工学の進歩を求める社会全体や人間についての深い理解も本当に必要なことなのです。反対に、日々進歩させられている様々な分野の専門知識を踏まえなければ、教養も一般的知識も具体的に根本的な問題に対処しえず、発展させられることなく、無意味な存在になってしまいます。

本学は、電子、機械、情報、通信、環境、数理科学などの工学、理学、あるいはそれらを基礎としたアート、医療、健康、スポーツあるいは金融などの専門分野の教育を目指していますが、一般教育＝教養教育もまたそれらと深く連携し、それを通して内容を豊富にしていく努力を重ねています。

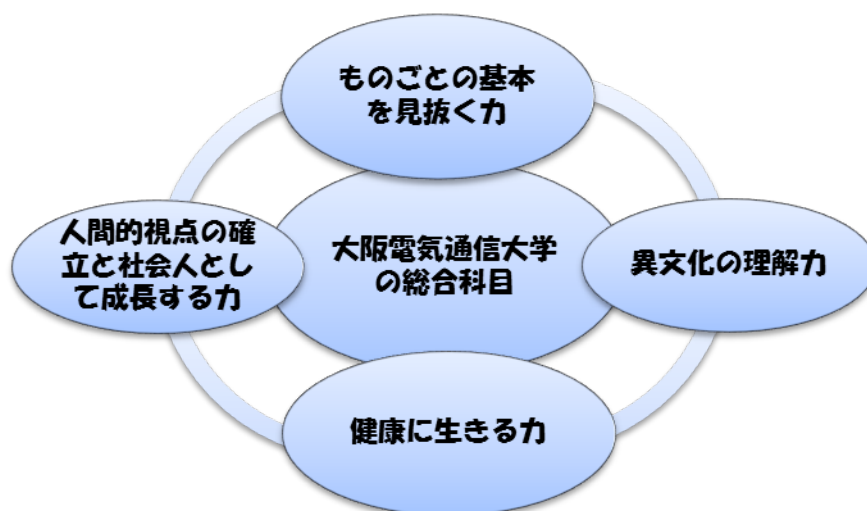
皆さんもまた、こうした努力を日々重ねて行ってください。

■総合科目は、全学共通科目

本学における総合科目は、よりよい暮らしを願い、よりよい社会を築いていこうとするすべての人々の願いに応えることのできる基本的知識（人間・社会そして自然に関する基本的知識）を、皆さんが現代の学問水準に対応させつつ理解し、また現代の問題への関心を常に持ちながら取得されることを理想としています。

一方、本学の総合科目においては、人間の尊厳性を基本とした人と人、人と自然とのよりよい関係、さらには国と国との平和な関係をそれぞれ大切にしていこうという、いわば社会人としての成長、人間的視点の確立とも結びつくことを期待しています。また、異なった文化を持つ地域の人々と交流し、相互理解できる力、さらには健康で生涯を力強く生きていくことのできる方法を皆さんが会得できるようになることも期待しています。もちろん、これらは「大阪電気通信大学人としての人間像」（本学基本理念）の骨格ともなるものです。

だから、本学における総合科目は、全学生に広く開かれた全学共通科目になっているのです。ただ、各学部・学科の特性に応じ、多少の柔軟性を以て科目配置等を行っています。以下、それぞれのキャンパスに対応する総合科目の実際について説明します。



II. 総合科目の履修の要点

■総合科目の4つの領域

本学における総合科目は、次の4つの領域に区分されています。

A群	人文・社会・自然群
B群	外国語群
C群	健康・スポーツ群
D群	キャリア形成群

A～D群の各科目は、選択科目（ただし英語を除く）ですが、それぞれの群ごとに卒業要件単位が定められています。これは、みなさんに「人を自由にする学問」としての一般教育＝教養教育をバランスよく履修してもらうためです。各群の卒業要件単位数を満たしたうえで、総合科目全体の卒業要件単位数を満たしていなければ卒業することはできません。

卒業要件単位数は、学科により多少違いがありますから、『学修必携』などで確認してください。

■A群（人文・社会・自然群）

A群（人文・社会・自然群）は、さらに次のように区分されています。本学では優れた研究実績と豊かな教育経験を持つ先生がそれぞれ分担して担当し、これらの知識を皆さん自らの暮らしの経験に引き寄せて学習できるよう工夫しています。卒業要件単位は、これらの小区分ごとには定められてはいませんが、教養科目としてバランスのとれた履修に心がけてください。

人間の探求

ものの見方・考え方・行動の仕方の軸となる哲学をはじめ、人間の心理や人としての発達、また教育、宗教など人間理解のカギを学びます。

文化の理解

人類の築いてきた文化を歴史・文学・芸術を通して学びます。さらに異文化の存在を知りその理解をどう深めるかを学びます。

社会の認識と人権

人間社会のルールである法律や生活の原動力である経済、そして社会発展の舵取りともいえる政治、それらの基本にある人権について理解を深めます。

自然の認識と科学の方法

人間を大事にしていこうという考えから、環境と生命をとりあげ、自然科学と科学の方法についての理解を深めます。

社会とコンピュータ

情報社会の中で生活を営んでいる私たちは、コンピュータを思い通りに使えることや、インターネットの特性をうまく利用できるようになっておかなければなりません。また、他

の人たちとトラブルを起こさないようにするためのルールを知っておく必要もあります。

ここでは、これらについての基本とすべき事柄について理解を深めます。

【重要】A 群科目には、教職課程の必修科目や選択必修科目となるものも含まれていますから、教職をめざすみなさんは、教職課程と照らし合わせ履修してください。

■ B 群（外国語群）

国際化した現代社会において外国語の知識とスキルを学ぶことは不可欠です。世界中の各地で通用する英語はもちろんですが、それ以外の言語もそれぞれの国々の文化であり、国際理解と相互の交流を進める上で大きな役割を果たします。

B 群（外国語群）は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語に区分されます。1 科目の単位数は 1 単位で、卒業要件単位数は 6 単位以上（うち、選択必修科目である英語の 4 単位を含みます）です。英語については、別にガイダンスが行われますので、ここではドイツ語、フランス語、中国語、韓国語について取り上げます。

本学では、初修外国語のカリキュラムは大変充実しています。各言語の配置は次のようになっています。（表では「〇〇語」で表記しています。ここに「ドイツ語」「フランス語」「中国語」「韓国語」と入れてください。）

1 年前期	「〇〇語 1」・「〇〇語 2」
1 年後期	「〇〇語 3」
2 年前期	「〇〇語 4」
2 年後期	「〇〇語特別ゼミナール 1」
3 年前期	「〇〇語特別ゼミナール 2」

入門段階の一年目は前期の「〇〇語 1」と「〇〇語 2」を同時に履修すると、週二回授業があることで大変効果的な学習ができます。このように本学では初修外国語に関しても独自のカリキュラムとなっており、着実に勉強すれば、英語以外にも一つの外国語をマスターすることが十分可能になります。なお、各言語の開講時間も異なっており、多言語同時学習することも可能です。

ドイツ語・フランス語

現代世界における中心の一つはユーロ圏域であり、フランスとドイツはユーロの中心国です。音楽や文学、思想といった文化面での伝統も世界有数のものです。ですから、ドイツ語やフランス語を学ぶことは、大きな意義を持っています。

フランス語やドイツ語を学ぶなかで、ヨーロッパの歴史と伝統、社会を理解してください。またそれはきっとみなさんの視野を広げ、皆さんが生きる日本という国をより深く理解させてくれるでしょう。

1 年生の皆さんは前期に「ドイツ語 1」と「ドイツ語 2」を合わせて履修すると 1 週間 2 回の授業となり、よりわかりやすくなります。また、後期分として「ドイツ語 3」もさらに履修すれば、ドイツ語とドイツの文化になじみ、最も基本的な読み、書きの力がつきます。

なお、「ドイツ語 1」「ドイツ語 2」（以上 1 年前期）「ドイツ語 3」（1 年後期）「ドイツ語 4」（2

年前期)は同じ一冊の教科書を使用します。フランス語も同様です。

中国語・韓国語

東アジアの隣国として、日本と中国や韓国は古から交流を深めてきましたが、最近の日中関係も日韓関係も良い状況とは言い難いものがあります。お互い平和に共存するには相互理解を深めるしか道がありません。言語や文化を学ぶことが相互理解への第一歩であるという視点から、この時期こそ隣国の言語を学習すべきです。

なお、日・韓・中三国は漢字文化圏であり、漢字の語彙が共通しているため、漢字を習得した経験が学習には大変大きな利点となります。

「韓国語 1」と「韓国語 2」は、ネイティブ講師と日本生まれの韓国人講師がペアになって同じテキストを使用しリレー形式で行います。それぞれの特長を活かしたペアティーチングにより総合的な韓国語力を身につけることができます。

中国語については、前期の「中国語 1」と「中国語 2」及び後期の「中国語 3」の授業を通して、中国語検定試験の準 4 級レベルに達します。

本学は中国語検定協会の準会場として、毎年 11 月に中国語検定試験を実施しています。受講生の多数が一年目に準 4 級に合格しており、さらに継続的な学習によって準 1 級に合格した者もいます。

「中国語特別ゼミナール 1, 2」では、語学力を高める以外に中国語で IT 用語を学習し、実践力を身につけるために、中国語を用いて Web ページの検索、メールを受発信するなどの力も養成しています。

■ C 群 (健康・スポーツ群)

健康・スポーツ群 (以下、C 群) では、「健康の科学」として実技と講義が提供されています。その目的は、生涯にわたって自らの健康を維持していくための基礎知識や技術を身につけてもらうことです。同時に、学生生活の中でのリクリエーションや気分転換の機会、ひとつの事をみんなで協調・共同して行う機会、他人とのコミュニケーションの機会を提供することにもなります。

講義では、自分のからだについて学び、健康に生きていくためには、スポーツとどのように関わってゆけばよいのか、探ってもらいます。

スポーツ実習では、授業科目の中でリフレッシュできる数少ない時間です。「楽しくなければスポーツじゃない！」をモットーに、健康・スポーツについて学んでいきましょう。

【重要】C 群のスポーツ実習科目については、第 1 回目の授業でガイダンスを行います。その際、グラウンド、卓球場、ボウリング場のクラスへと振り分けを行います。各クラスには定員があり、第 1 回目の授業に欠席すると、クラス配置ができずに受講できなくなることがあります。万が一欠席した場合は、高橋保則先生へ早急に申し出ること。なお、受講に先立って『履修登録の手引き』を熟読しておいてください。

■ D群（キャリア形成群）

キャリア形成とは、一口に言えば、働くことを軸に、自らの人生を切り開いていく力をつけるということです。自己のキャリアや将来の生活設計については大学におけるすべての授業、すべての生活を通して常に意識していくことが大事ですが、D群は、学生諸君がそれをよく意識するために配置した科目群です。D群は自分自身で自分自身を成長させる科目です。

D群では、人生の目的をしっかりと定め、その目的を達成するために、これまで学んできた力やこれから獲得していく力をまとめあげ、見通しと段取りをつけていくことをねらいとしています。見通しと段取りのなかには、卒業後の進路や生活とともに、大学生活をどのように送るのかも含まれています。

1年次には「キャリア入門」と「〇〇学入門」（学科によって名称が変わります）を配置しています。ここでは大学生活に慣れることと、これからの大学生活の過ごし方などを考えていきます。

2年次には「キャリア概論」（前期）と「キャリアデザイン演習」（後期）を配置しています。ここでは、卒業後の就職や生活について、その方向性を定め、卒業までに何を学び、何をしなければならないかを考えていきます。

3年次前期には「キャリア設計」を配置しています。ここでは、卒業後自分が就こうとする職業をしぼり、エントリーシート の書き方など実際のテクニックも学びます。3年次後期には、「インターンシップ」を配置しています。ここでは、働くことの意義や実際に体験的に学びます。

そのほか、D群には、日本語能力を基礎から高め、表現力や論理的思考力などを身につけていく「日本語上達法」と、小集団で課題意識をもって問題解決に取り組む「総合ゼミナール」が開講されています。

D群の卒業要件単位数は、4単位ですが、自己の性格や能力もよく考えて受講して下さい。「キャリア概論」「キャリアデザイン演習」と「キャリア設計」「インターンシップ」は、一連の科目ですから、続けて履修することが望ましいでしょう。

【重要】「日本語上達法」および「総合ゼミナール」は、定員35名で履修制限があります。定員を上回った場合、第1回目の授業で抽選などにより受講許可者が決められますので、第1回目の授業に欠席しないこと。

Ⅲ. 教職課程の履修の要点

本学で取得できる教員免許状は、下の表の通りです。取得できる免許状の種類は、学科により異なります。

技術／中学一種	機械工学科 環境科学科
工業／高校一種	電気電子工学科 電子機械工学科 機械工学科 環境科学科 情報工学科 通信工学科
数学／中学一種	電気電子工学科 電子機械工学科

／高校一種	機械工学科 基礎理工学科 情報工学科 通信工学科
理科／中学一種 ／高校一種	基礎理工学科 環境科学科
情報／高校一種	電気電子工学科 情報工学科 通信工学科

教員免許状を取得するには、教職課程を履修し、定められた教職関係科目の単位を取らなければなりません。

詳しくは、『学修必携』の「教職課程」に、教職課程履修についての重要な内容が書いてありますので、履修希望者はよく読んでおいてください。

教職課程科目は、2年次から履修することが出来ます。ただし、毎年後期に実施する「**教職課程履修事前説明会**」に出席し、教職課程の申込みをしなければ履修出来ません。つまり、1年次後期に実施する事前説明会に出席した上で、所定の期間に教職課程の申込みをしなければ2年次になっても教職課程科目の履修は出来ないことになります。2年次に実施する事前説明会に出席し、3年次から教職課程科目を履修する方法も考えられますが、教職課程は科目数が多いので、**なるべく1年次のうちに出席し、2年次から履修できるようにしてください。**

なお、「くらしと日本国憲法」、「発達心理学」、「現代社会と青年の心理」、「人間形成と教育」などは、1年次に総合科目の人文・社会・自然群として開講されますので、教職を希望する人はあらかじめ履修しておくことが望ましいでしょう。また、各学科で1年次に担当している基礎専門科目などの中にも、教職に関係する科目を開講していますので、合わせて履修しておくことが望ましいでしょう。

総合科目 ガイダンス

(四条畷版)

2014年4月

人間科学研究センター（略称：AHセンター）

I. 大阪電気通信大学と総合科目

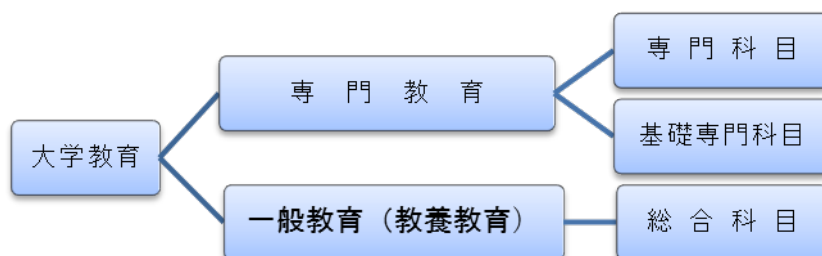
みなさん、入学おめでとう。

早速ですが、本学の教育課程には、その大きな柱の一つとして「総合科目」と総称される科目群があります。ここではこの総合科目について案内をします。『学修必携』とあわせて見てください。

■総合科目とは

(1) 本学の総合科目と一般教育（教養教育）

大学の教育は一般教育と専門教育に分けられます（学校教育法第 83 条）。一般教育は“教養教育”ともとらえられています。本学では、一般教育すなわち教養教育を、総合科目として実施しているわけです。



(2) 一般教育とは、そして教養教育とは

それでは、一般教育とか教養教育とはなんのでしょうか。

一般教育とは英語で **General education** となります。ゼネラルとは「統合する」という意味です。人間の社会にしても自然界にしても、全体は一見無秩序で複雑な動きを見せていますが、根本的なもの、基本的な動きというのは必ずあります。そうした基本的な方向性を正しく見抜き、誤りなく全体をそれに統合させて、総合的に理解し、判断を下す力をつける教育という意味です。

次に教養のことを英語では **Liberal arts** (リベラル・アーツ) といいます。liberal には、「自由主義の、進歩的な」という意味があります。arts は、単数形では art ですが、よく使われる「芸術」という意味の他に「技術」「技芸」という意味もあります。リベラル・アーツは、「自由な生き方の技術」、すなわち「人を自由にする学問」という意味です。

General education も Liberal arts も広く物事を見、そしてその中で最も基本的で根本的なものを見抜く力を養成する教育であるというところを見落とさないようにしましょう。もちろん、教養を身につけるとは、単に「箔をつける」とか「物知りになる」ということではありません。いわば、しっかりした大人、そして社会人になるための教育です。

■現代社会と一般教育＝教養教育

本学で「総合科目」として開講する一般教育あるいは教養教育とは、上記のような、ものの見方・考え方・行動の仕方の基本を皆さんに学んでもらおうとするねらいに基づいて開講されています。

るものです。そしてこの「広く物事を見、そしてその中で最も基本的で根本的なものを見抜く力」が、今まさに重要だと言われているのです。

たとえば、今日、IT革命という言葉に見られるように、科学技術の進展には目覚ましいものがあります。インターネットを通じて情報は瞬時に世界を駆け巡ります。IT だけではありません。バイオテクノロジー、ゲノム研究、再生医療、脳科学、ナノテクノロジー、宇宙探査…等々。様々な分野において、速いスピードで、しかも持続的に、大きな進歩が生まれています。

しかし、これらを「進歩」という面だけで見ていていいのでしょうか。実は、そうした科学技術の「進歩」自体が、同時に地球環境の急激な変化、生態系の破壊など、人類の将来にとって深刻で重大な問題の発生とも強く結びついていることは皆さんも気が付かれています。戦争の脅威も科学技術の発展と深く結びついていることは明らかです。

つまり、目の前の事象に目をくらまされないこと、全体に目を通し、根本を見誤らないことが大事になって来るのです。地域紛争、テロ、金融危機、経済的格差の増大等々の問題でも同じように、その根本を理解しなければ目の前の事象に翻弄されるばかりとなります。福島県における原発事故もこうした観点からよく考えてみるのが大事です。また、身近な地域の問題、家族の問題、男女間の平等の問題等々も同じことが言えます。

時代をつくり、進歩をになうのは私たち一人ひとりの力です。全体を見る力＝「人を自由にする学問」としての教養を身につけていなければ、人々にとって本当の自由は手に入りません。

総合科目は、みなさんの視野を広め、考え方を練り、生き方の奥深いところに関わり、人類の進歩と発展に寄与していく、最も基本的な科目なのです。

■一般教育と専門教育

歴史を振り返ってみると、人間社会は分業化と専門化、そして相互交流を進めることによって発展を加速させてきました。一方、学問は、そうした人間社会の発展の中で、自然と人間および人間社会に関する真理を究明しようとする人間本来の要求に基づいてその認識を深めて来ました。こうして、学問は一つ一つの分野において必要とされる専門知識を深め、またもう一方では、それらを総合する一般的知識も進歩させ、両者が相俟って人間の認識力を全体として進歩させてきたのです。

専門的知識と一般的知識、それらは学問の発展にとっていわば車の両輪です。例えば専門知識である工学を進歩させるためには、基礎的な数学や物理学などの理解が求められます。また、その工学の進歩を求める社会全体や人間についての深い理解も本当に必要なことなのです。反対に、日々進歩させられている様々な分野の専門知識を踏まえなければ、教養も一般的知識も具体的に根本的な問題に対処しえず、発展させられることなく、無意味な存在になってしまいます。

本学は、電子、機械、情報、通信、環境、数理科学などの工学、理学、あるいはそれらを基礎としたアート、医療、健康、スポーツあるいは金融などの専門分野の教育を目指していますが、一般教育＝教養教育もまたそれらと深く連携し、それを通して内容を豊富にしていく努力を重ねています。

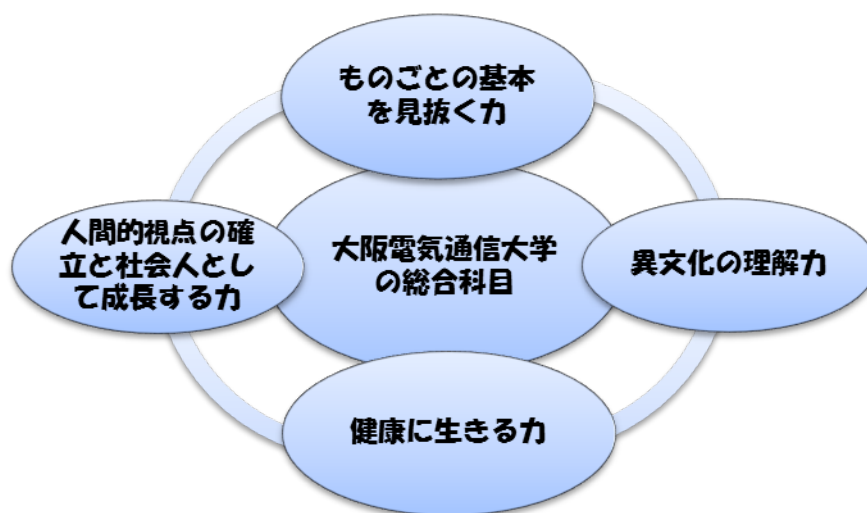
皆さんもまた、こうした努力を日々重ねて行ってください。

■総合科目は、全学共通科目

本学における総合科目は、よりよい暮らしを願い、よりよい社会を築いていこうとするすべての人々の願いに応えることのできる基本的知識（人間・社会そして自然に関する基本的知識）を、皆さんが現代の学問水準に対応させつつ理解し、また現代の問題への関心を常に持ちながら取得されることを理想としています。

一方、本学の総合科目においては、人間の尊厳性を基本とした人と人、人と自然とのよりよい関係、さらには国と国との平和な関係をそれぞれ大切にしていこうという、いわば社会人としての成長、人間的視点の確立とも結びつくことを期待しています。また、異なった文化を持つ地域の人々と交流し、相互理解できる力、さらには健康で生涯を力強く生きていくことのできる方法を皆さんが会得できるようになることも期待しています。もちろん、これらは「大阪電気通信大学人としての人間像」（本学基本理念）の骨格ともなるものです。

だから、本学における総合科目は、全学生に広く開かれた全学共通科目になっているのです。ただ、各学部・学科の特性に応じ、多少の柔軟性を以て科目配置等を行っています。以下、それぞれのキャンパスに対応する総合科目の実際について説明します。



II. 総合科目の履修の要点

■総合科目の3つの領域

本学における総合科目は、次の4つの領域に区分されています。

A 群	人文・社会・自然群
B 群	外国語群
C 群	健康・スポーツ群

A～C 群の各科目は、選択科目（ただし英語を除く）ですが、それぞれの群ごとに卒業要件単位が定められています。これは、みなさんに「人を自由にする学問」としての一般教育＝教養教育をバランスよく履修してもらうためです。各群の卒業要件単位数を満たしたうえで、総合科目全体の卒業要件単位数を満たしていなければ卒業することはできません。

卒業要件単位数は、学科により多少違いがありますから、『学修必携』などで確認してください。

■A 群（人文・社会・自然群）

A 群（人文・社会・自然群）は、さらに次のように区分されています。本学では優れた研究実績と豊かな教育経験を持つ先生がそれぞれ分担して担当し、これらの知識を皆さん自らの暮らしの経験に引き寄せて学習できるよう工夫しています。卒業要件単位は、これらの小区分ごとには定められてはいませんが、教養科目としてバランスのとれた履修に心がけてください。

人間の探求

ものの見方・考え方・行動の仕方の軸となる哲学をはじめ、人間の心理や人としての発達、また教育、宗教など人間理解のカギを学びます。

文化の理解

人類の築いてきた文化を歴史・文学・芸術を通して学びます。さらに異文化の存在を知りその理解をどう深めるかを学びます。

社会の認識と人権

人間社会のルールである法律や生活の原動力である経済、そして社会発展の舵取りともいえる政治、それらの基本にある人権について理解を深めます。

自然の認識と科学の方法

人間を大事にしていこうという考えから、環境と生命をとりあげ、自然科学と科学の方法についての理解を深めます。

社会とコンピュータ

情報社会の中で生活を営んでいる私たちは、コンピュータを思い通りに使えることや、インターネットの特性をうまく利用できるようになっておかなければなりません。また、他の人たちとトラブルを起こさないようにするためのルールを知っておく必要もあります。

ここでは、これらについての基本とすべき事柄について理解を深めます。

そのほか、A群には、日本語能力を基礎から高め、表現力や論理的思考力などを身につけていく「日本語上達法」と、小集団で課題意識をもって問題解決に取り組む「総合ゼミナール」が開講されています。

【重要1】A群科目には、教職課程の必修科目や選択必修科目となるものも含まれていますから、教職をめざすみなさんは、教職課程と照らし合わせ履修してください。

【重要2】「日本語上達法」および「総合ゼミナール」は、定員35名で履修制限があります。定員を上回った場合、第1回目の授業で抽選などにより受講許可者が決められますので、第1回目の授業に欠席しないこと。

■B群（外国語群）

国際化した現代社会において外国語の知識とスキルを学ぶことは不可欠です。世界中の各地で通用する英語はもちろんですが、それ以外の言語もそれぞれの国々の文化であり、国際理解と相互の交流を進める上で大きな役割を果たします。

外国語群（以下B群）は、英語、ドイツ語、中国語、韓国語に区分されます。1科目の単位数は2単位で、卒業要件単位数は12単位以上です。英語については、別にガイダンスが行われますので、ここではドイツ語、中国語、韓国語について説明します。

ドイツ語

現代世界における中心の一つはユーロ圏域であり、エコ先進国にして技術大国でもあるドイツはユーロの中でも最も有力な国です。音楽や文学、思想といった文化面での伝統も世界有数のものです。ですから、ドイツ語を学ぶことは、大きな意義を持っています。

ドイツ語は今年度、次のように配置されています。

1年前期	「ドイツ語初級1」
1年後期	「ドイツ語初級2」

中国語・韓国語

東アジアの隣国として、日本と中国・韓国は古くから交流を深めてきましたが、最近の日中関係も日韓関係も良い状況とは言い難い状況です。お互い平和に共存するには相互理解を深めるしか道がありません。言語や文化を学ぶ事が相互理解への第一歩です。この時期こそ隣国の言語を学習するいい機会としましょう。

日・韓・中三国は漢字文化圏であり、漢字語語彙が共通しています。だから、漢字を習得した経験が中国語・韓国語の学習には大変大きな利点となります。

本学は中国語検定協会の準会場として、毎年11月に寝屋川キャンパスで中国語検定試験を実施しています。受講生の多数が一年目に準4級に合格しており、さらに継続的な学習によって準1級に合格した者もおります。

【重要】中国語・韓国語は、授業で使用する教科書が先生ごとに異なりますので、間違っ
て別の教科書を買わないためにも、第1回目の授業に必ず出て、各先生の指示に従って
ください。

■ C群（健康・スポーツ群）

健康・スポーツ群（以下、C群）は、「健康の科学」として実技と座学が提供されています。その目的は、生涯にわたって自ら健康を維持していくことができるための素養を身につけてもらうことです。

スポーツでは‘うまい’、‘へた’という評価の観点が一般的ですが、自らの健康を維持するためには‘うまい’、‘へた’という評価はあまり意味がありません。生涯にわたってスポーツに取り組むためには、自分に適した種目・関わり方を見つけること、ケガをしない技術を身につけることが重要です。さらに、実践のためには三つの間が必要になります。この三つの間とは‘時間’、‘空間’そして‘仲間’です。スポーツ実習では、ひとつの事をみんなで協調・共同して行う機会、他人とのコミュニケーションの時間を重視して展開されます。

座学では、健康に関する情報が氾濫する現代社会において、科学の観点から健康に関する基礎知識を学び、自身で健康を守るための素養を身につけることを目的としています。さらに発展科目として「スポーツ文化」について考える講義科目が提供されています。

【重要】C群のスポーツ実習科目については、第1回目の授業の際にガイダンスを行いますので必ず出席してください。なお、受講に先立って、『履修登録の手引き』を熟読しておいてください。

※健康スポーツ科学科は、専門科目と重複するためC群は設定されていません。

Ⅲ. 教職課程の履修の要点

本学で取得できる教員免許状は、下の表の通りです。取得できる免許状の種類は、学科により異なります。

工業／高校一種	医療福祉工学科
数学／中学一種 ／高校一種	医療福祉工学科 情報学科
情報／高校一種	医療福祉工学科 デジタルアート・アニメーション学科 デジタルゲーム学科 情報学科
保健体育／中学一種 ／高校一種	健康スポーツ科学科

教員免許状を取得するには、教職課程を履修し、定められた教職関係科目の単位を取らなければなりません。

詳しくは、『学修必携』の「教職課程」に、教職課程履修についての重要な内容が書いてありますので、履修希望者はよく読んでおいてください。

教職課程科目は、2年次から履修することが出来ます。ただし、毎年後期に実施する「**教職課程履修事前説明会**」に出席し、教職課程の申込みをしなければ履修出来ません。つまり、1年次後期に実施する事前説明会に出席した上で、所定の期間に教職課程の申込みをしなければ2年次になっても教職課程科目の履修は出来ないこととなります。2年次に実施する事前説明会に出席し、3年次から教職課程科目を履修する方法も考えられますが、教職課程は科目数が多いので、**なるべく1年次のうちに出席し、2年次から履修できるようにしてください。**

なお、「くらしと日本国憲法」、「発達心理学」、「現代社会と青年の心理」、「人間形成と教育」などは、1年次に総合科目の人文・社会・自然群として開講されますので、教職を希望する人はあらかじめ履修しておくことが望ましいでしょう。また、各学科で1年次に担当している基礎専門科目などの中にも、教職に関係する科目を開講していますので、合わせて履修しておくことが望ましいでしょう。

■講師懇談会報告書

- ・日時：2014 年 4 月 5 日（土）15:00～16:25
- ・場所：J 号館 4 階講義室他

人文・社会・自然群（A群）

- ・司会：坂井 書記：平沼
- ・出席者 非常勤：江尻、玉井、小田、大谷、牧野、木村、中村
専任：佐野、森石、坂井、足立、平沼

（1）授業中の学生の態度など

- ・受講者数が多く（約 230 名）大変だったが、私語はそれほど多くなかった（江尻）。
- ・「日本語上達法」で、授業には毎回出ているが、添削指導しても一向に上達しない学生がいた。漢字はほとんど書けないし、どう指導したらよいか困った（江尻）。
- ・文章がそもそも書けない学生がいる（足立）。
- ・四條畷キャンパスではS学科の学生がたくさんいると騒がしくなる（足立）。
- ・うるさい学生を指名して「10 点引くから学生証を見せろ」と言ったこともある（江尻）。
- ・本学の学生は千差万別。私の授業では出席を取らないので、しゃべりたければ外に行ってしゃべりなさいと指導している。そうすると人数も減ってきてやりやすくなる（森石）。
- ・昨年度から出席を取るようになったが、携帯での出欠確認が義務になると携帯を持っていない学生にとってはどうか（玉井）。
- ・本学はまじめな学生もたくさんいるが、ノートをただ取っているだけの学生としっかり学習している学生に分かれる（森石）。
- ・他大学と比べて、素直で真面目な学生がほとんどだが、一部に言うことを聞かない学生がいる。親に経済的な負担を掛けていることを背負っている学生も多い。受け身の（態度の）学生には、「高校までの授業と違って、主体的に勉強しないとイケない」と言っている。他大学ではグループの中で要領よくやっていく学生が増えているが、本学には少ない。ここ 2 年くらいで真面目な学生が増えている印象がある。「キャリア概論」（E 学科）で、「（受講生の中に）携帯依存症の学生がいるが大目に見てやってほしい」との連絡があった（玉井）。
- ・文字も図も書かない（＝書けない）学生もいる。もし気になる学生がいれば学生相談室に相談してほしい（坂井）。
- ・高校から理系だったので、国語の授業は国語の勉強をしていなかったという学生もいる。深いところまで考えている学生もいるが、そのことをレポートに書くことができない。発達障害だと思われる学生がたくさんいる印象がある。（授業内容と関係して）自分はアスペルガーなんだ、とかLD（読字障害）なんだと気付く学生もいる。ただ申し出てこない学生もいるので、なかなかサポートできない（大谷）。
- ・授業は120名の登録で100名くらいが受講している（もう一つの授業は90名登録で60名受講）。ものすごく興味をもつ学生と全く興味をもたない学生がいる。アルバイトや就活に関連した話や

ホワイトカラーエグゼクションの話などもしている。

・大人数の授業なので、後ろの方でカードバトルや携帯ゲームをしている学生がいる。授業感想カードを紹介する際に、授業中に騒がしい学生などを「ねらって」紹介するようにしている。先生に構ってもらえていると分かると食いついてくる学生も入る。教員が学生一人ひとりを認識して指導するために「顔写真付きの名簿」があればよいと思う（大谷）。

・これまで学校生活で構ってもらえなかった学生が多いのではないかと。感想やコメントを読んで返してあげるとすごく喜ぶ。メンバーシップ（帰属意識）をもたせてやると学生が変わってくる。学生に自身のアルバイト経験（エピソード）を話してもらったりすると授業への食いつきが変わってくる（玉井）。

・「本学の学生は書けない」という話がでていますが、工業高校では文章を書く練習はしていないのが実情。大学に入学して、「書け！」「漢字知らないのか！」と言われるのは苦痛だと思う。大学で一から文章を書く練習をすることが大切。

・理工系科目の場合、教科書をきちんと板書されることが多いので、高校までの延長で対応できるのではないかと（木村）。

・四條畷キャンパスと寝屋川キャンパスで学生に違いはあるか？（中村）

・寝屋川は典型的な工学部系の学部があるキャンパス。四條畷は医療福祉工学科、健康スポーツ科学科、デジタルゲーム学科など。駅前キャンパスには金融経済学部がある（足立）。

・デジタルゲームやデジタルアニメーション学科はいわゆるオタク系の学生が多い。四條畷キャンパスは全然違うタイプの学生が混在していると思う（佐野）。

・10年くらい前からカードを配って、授業の内容、感想・意見をA5用紙に書かせている。出席代わりになる（70～80%の出席率）。1限目は遅刻が多いので、遅刻した学生には一部に赤い線を引いた用紙を渡している。評価はA～Dで行っており、Dは授業を聞いていない（と思われる）のでマイナス点。だんだんA、Bが増えていって、Cは減ってくる。Dはなくなる。全然書けずに悩みを相談に来る学生もいる。この方法は教員の負担も大きい。採点に3時間くらいかかるし、返却できる状態にする作業、評価を書き写す作業などを入れると5時間くらいかかる。学生は喜んでるように思う（小田）。

・添削はすごく時間がかかる。コメント書くととなると時間がかかる（江尻）。

・昨年度の「総合ゼミナール」は、発表する前に配るレジュメを持ってこさせ、その場で加筆修正させた。授業では1回質問すると2点、いい質問は4点。報告で50点、質問等で50点評価した。後半で発表する学生はテキストを要約するだけではダメだということが分かってくるので大変になってくる。関連質問を予想して調べてくるようになる。授業に積極的な学生を見つけることが大事だと思う（小田）。

（2）授業の工夫について

・これまでは、大学の授業は先生が蕩々としゃべって…と思っていたが、最近では大学の教育実践が紹介・交流されてきており、昨年度はいろいろと試してみた。うまくこちらの意図が伝わらない場合もあるが、内容を伝えていくというより、本音で語りあってもよいという雰囲気をつくるのが大事だと実感した。エンカウンターグループなど誰でもできるような教育技術があるので、FD等で共有していくことを本気でしていかないといかない。本学の学生は、二極化ではな

く、複雑な層をなしていると思われるので、それぞれが光ることができるような取り組みが必要。授業の工夫は失敗も多いが、教員間で交流しあえればよいと思う（佐野）。

- ・15回の授業の積み上げが大事だと思う。繰り返し話すことで分かってもらえるようにする。本学の学生は集団をつくるのが下手。群れにはなるのだが、集団のダイナミクスにはならない（小田）。

- ・「グループ対抗」という方法をキャリア教育の授業で使っている。例えばグループ対抗で自分の学科のことを紹介させる。競争意識を持つと、他のグループに負けたくないという意識が働くようになる。ただグループの中で落ちこぼれがでてしまうのが困る。メンタルな部分で人と話したくないという学生をどうフォローするのか。本学の学生は切り捨ててしまう傾向にある（玉井）。

- ・50人の授業で10グループを作らせているが、うちのグループにおいてと誘ってくれる学生も出てくる。授業中に10分間の「なごみの時間」をとっている。ブレインストーミングでは他人の意見を否定しないということを徹底している（森石）。

- ・（グループ作りについて）他大学でも学生から「強制的に分けてくれ」と言われる。組織行動を取っていく上でどうなのか？と指摘すると、そう思うという学生もいれば、やっぱり「強制的に分けて欲しい」という学生もいる。

（3） 期末試験について

- ・カンニングなどの不正行為の処分について、本学は厳しくしている。評価の方法についても、蓄積していく必要がある。私の試験では、白い紙に手書きで書き込んで持ち込んでもよいということにしている。レポート課題を出すときには（授業で学生に議論させてから）書かせている。自己肯定感が低い学生も多いので、励ましてやるのが大切。そういった視点から「評価」を考える必要がある（佐野）。

（4） 非常勤講師からの要望

- ・（シラバスについて）事前学習、事後学習のところが書きにくかった（江尻）。

- ・他大学に比べてもより細かことを要求されているような気がする（玉井）。

- ・文科省がシラバスと予算を関連づけてきている。そうしたやむを得ない事情もあるが、積極的に考えて、学生に自分で事前学習・事後学習をさせる習慣もつけていかななくてはならない（佐野）。

- ・岡山理科大では以前から（シラバスに細かな記述を）している（江尻）。

- ・教育内容に関わることなので、（いつも予習させるという）画一的な書式はどうかと思った（坂井）。

- ・（事務職員に対しての不満）初回の授業で学生が教室に入りきれなかったのに、翌週（2回目）の授業でも入りきらない。更に3回目の授業の教室には黒板もなかった（江尻）。

- ・キャリア教育は全学的な取り組みにしてもらいたい。「キャリア入門」の授業で使っているOECU-Eノート等、大学で学ぶ動機づけ、自分を磨く最後の機会だということを持ってもらうために全学的に取り組んでもらいたい（玉井）。

- ・（キャリア教育の全学的な取り組みは）自分の授業にも直結することなので、何らかの形で具現化してほしい（牧野）

- ・（今年から非常勤講師になるので）事務関係で何か問題があれば、小田まで言ってもらえれば対

応する。

・私たちの頃は、「これからは生徒ではなく、自分で学んでいくんだ」という意識が強かったが、今の大学生はむしろ「生徒」であることを望んでいる。自分ではなく他人に決めて欲しいと願っている（足立）。

・今年度は全体の話し合いの前に各群の話し合いを行ったが、やはり時間が足りなかった（足立）。

（文責：平沼博将）

B群（ドイツ語・フランス語）

出席者

非常勤講師：（独語）河合良三、北川尚、横田一哉、湯浅美希、加藤智也 （仏語）本多雄一郎

専任教員：（独語・仏語）坂本知宏

1 昨年度についての反省、意見交換、自由討論

【英語以外の外国語のクラス数減少】

寝屋川キャンパスにおいて、ドイツ語とフランス語の授業はこの2～3年の間に大幅に減少した。

【カリキュラム、統一教科書、「～～語2】

1年前期に「～～語1」と「～～語2」の週2回授業を行っているが、「～～語1」と「～～語2」の両方を履修していない学生が少なからず存在したのは、現行カリキュラムになって以来の問題であった。一昨年度と昨年度、独仏語では「2」のクラスでは統一教科書を参照するが、本文や文法解説や練習問題その他の教科書の記述を使わずに教授することによって、その問題に対処した。今年度ドイツ語、フランス語に関しては、「ドイツ語1」と「ドイツ語2」、「フランス語1」と「フランス語2」の受講生の重なり具合を調べ、今後の方針を定めることになった。

【シラバス】

昨年度からシラバスを担当教員が執筆することとなった。今年度は、授業一回一回の授業内容を書くことになったが、語学の授業の進度は受講生次第のところがあり、シラバスに一回一回の授業内容を書いても、そのとおりにできないという意見が多かった。ただし、だからといって授業一回一回のシラバス執筆が全くの無駄になるかということ、そうでもなくて、授業を進めていくにあたっての目安にはなるとの話に落ち着いた。

【カリキュラム改訂について】

2年次後期開講のクラスはカリキュラムから消えるという見通しを述べ、理由として、受講生が少ないと科目名はあっても不開講とすることになるが、そのようなことをなくすためであると、説明した。

2 語学ごとに打ち合わせ

各語学で、一回の授業の進度、電通大のカリキュラム全体における授業計画（教科書をどう使用するか、どの授業で何課まで進むか）などを話し合った。

（文責 坂本知宏）

B群（中国語・韓国語）

出席者 非常勤講師：（韓国語）金洪仙、金泰虎、尹郁子 専任教員：王 少鋒

1. キャンパス案内（13時～15時15分）

今年は韓国語が二人の新任を迎えるので、まず、スクールバスを利用して寝屋川と四条畷の両キャンパスを案内した。事務職員に挨拶し、講師控室と教室の使用法について説明した。最後に学内生協や食堂を案内しながらキャンパスごとの学科や学生の特徴などを紹介した。

2. カリキュラムの説明（15時15分～15時45分）

キャンパスツアー後に寝屋川 J413 教室で金洪仙先生と合流し、語学のカリキュラムについて説明を行った。特にペアーで行われている「韓国語 1」、「韓国語 2」の狙いや授業目標を説明した。そして、次年度カリキュラムの改定によって韓国語の開講数が減らされることも説明した。

3. 教科書などの打ち合わせ（15時45分～16時15分）

韓国語はこれまで統一教科書を使用しておらず、今後クラス分割と合併の可能性を考えて、事前に統一教科書を使用するように新任の先生に依頼し、ご了承頂いたので、この日は、事前選定した教科書の進め方や評価の仕方などについて意見交換し、共通認識を得た。

4. 非常勤講師からのご意見

新任の先生をキャンパス案内した時に、教室の設備が大変後れていると指摘された。

懇談の時に、カリキュラムがキャンパスによって異なり、整合性がなく、共通した教育目標は達成できるのか、と指摘された。

（文責 王 少鋒）

健康・スポーツ群（寝屋川キャンパス）

出席者 非常勤：黒住、出井、林、森脇 専任：高橋、村木

健康・スポーツ群の非常勤講師について、今年度からは、四條畷キャンパスのスポーツ実習担当者に富永先生（新任）を、寝屋川キャンパスのスポーツ実習担当者に山井先生（増担）を迎えることとなった。懇談会では、健康・スポーツ群（寝屋川キャンパス）で毎年作成している「しおり」を元に進めた。

まずは人間科学研究センターと総合科目の概要について、健康・スポーツ群の目的について、健康・スポーツ群における開講科目の概要について確認した。

続いて、健康・スポーツ群の各科目（実習および講義）の内容について、説明を行った。スポーツ実習 1、2、3、4 については、それぞれの目的と関係について、以下の通り説明を行った。

- ・1年次前期では、スポーツを通して人間関係と集団について考察することに重点を置いている。
- ・1年次後期では、生涯スポーツの導入として、自己とスポーツとの関わりについて考察していく。
- ・2年次では、講義を通して、健康に関する情報が氾濫している現代において、自身の健康についてどのように考え、実践していったらよいのか考察していく。
- ・3年次では、「競技スポーツ」や「健康活動」について、より具体的に考え、そして実践していく機会とする。
- ・4年次では、いよいよ社会に出るその前に、自身の身体を見つめなおし、生涯にわたってスポーツと関わり、健康に生きていくためにはどうしたらよいのか考察していく。

最後に、スポーツ実習に関して、具体的に実施する際の注意点について伝達した。

- (1) 各クラスの授業内容、施設、用具について
- (2) 学生の服装、更衣室、掲示板上について
- (3) 授業中の負傷事故時の対応や補償について
- (4) 出勤簿、学生の出欠管理、休講届、成績評価について
- (5) 交通機関のスト・台風時の授業の取り扱いについて

寝屋川でのスポーツ実習の担当が初めての先生（出井先生）がいたものの、いずれの方も本学での授業経験があり、懇談会はスムーズに進行した。一点、成績評価について、特に4年次生の受講生に対しては、就職活動や教育実習などの理由によって欠席が増えてしまう点を考慮していただくようお願いした。昨年度との変更点として、スポーツ実習ボウリングクラスにおけるレンタルシューズの利用方法の変更があったこと、卓球クラスにおいて卓球場の一部改装を行い、卓球台を1台増やし、定員を4名増やしたことなどを補足した。

また、質問が2点あった。1点目は、非常勤の先生方が持ち込むノートパソコンによる無線LANの利用方法について、2点目は、休講時の手続きの手順について。休講時は、補講日を教務課と調整していただく必要がある点を追加した。補講日については、センター内でも問題視されていたが、本学では補講日が少なく、曜日も限定されている点について、非常勤の方から不満の声が挙げられた。

(文責：村木有也)

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

平成 27 (2015)年 6 月 24 日

工学部 英語教育センター

平成 26(2014)年度主任 上垣公明

1. 教育目標やカリキュラムの位置づけ、シラバスについて

寝屋川キャンパスの全学科において、平成23年度以降、新カリキュラムが採用されている。英語力の低い学生が年々増加してきている状況において、一年次の科目として「基礎英語」や「基礎英語文法」など配置し、基礎学力の向上に重点をおいている。四條畷キャンパスにおいても、平成24年度以降、T学科を除く全学科で新カリキュラムが始まっており、寝屋川キャンパス同様、1年次対象の基礎科目を充実させることによって基礎学力の向上に取り組んでいる。

シラバス作成に関しては、平成24年度以降、非常勤講師の担当科目についても科目担当者がシラバスを作成している。シラバスの具体的な記述内容については、できるだけ具体的で明瞭なものになるように心がけた。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

4月のオリエンテーションの際に新入生を対象にプレイズメント・テストを実施し、その結果に基づいて、習熟度別にクラスを編成し、さらにレベルに応じた統一教科書を使用することで、より効果的なクラス運営を実施することができた。

英語科目の授業の一部に多読活動（本学名称リーディングシャワー）を導入し、15分～30分程度の授業内多読を実施し、学生の読解力の向上に役立てた。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

入学時のオリエンテーションにおいて、新入生に対し英語学習に関するガイダンスを実施し、本学の英語科目、科目の選択方法、履修方法を含め英語学習の概要について説明した。それにより、1年から4年までの英語科目を体系的に理解したうえで、個々の学生に適した英語科目が履修できるようになった。

4. 卒業研究指導について

電子機械工学科の学生一名を受け入れた。その学生に対して、卒研研究の指導にくわえて、就職に関することも含めてきめ細やかな指導を行った。

5. その他、特記事項（アクティブ・ラーニングへの取組、離学者対策など）

(1) 課外活動の一環として、個別指導を目的とした英語学習支援を行ない、個々の学生のニーズにあった指導を行った。

(2) 本学に備えられているe-Learning 英語学習教材「アルクネットアカデミー2」を積極的に活用してもらうため、その紹介を兼ねたオリエンテーションを6月、7月に実施した。

(3)「グローバル人材育成のための英語教育プログラム」を実施した。ネイティブ教員が研究室ごとの申し出に応じるかたちで、英会話や英語論文の書き方の指導など様々な要請に対して指導を行った。

(4)「OECU 技術英語教育－TOEICスコアアップ講座」を実施した。入学時に実施した英語プレースメント・テストの成績に基づいて選抜した学生を対象として、TOEIC の受験指導および学内受験を実施した。

(5)「UBC 海外教育研修事前英語特別プログラム」を実施した。この海外教育研修に参加する学生がより有意義な語学研修にできることを目指し、カナダに関する情報提供と実践的な英会話の訓練をした。

2014(平成26)年度

学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

平成 27 年 6 月 30 日

数理科学研究センター

平成26年度主任 山原 英男

数理科学研究センター(ASセンター)は理工系の学部・学科において、学部・学科に共通な基礎専門科目のうち、数学科目と物理・力学科目を担当している。数学関係科目としては、基礎解析・演習、基礎微積分1・演習、微分積分1・演習、基礎微積分2・演習、微分積分2・演習、線形代数1、線形代数2、線形代数学、微分方程式、確率・統計がある。また、物理・力学関係科目としては、物理学1・演習、力学1・演習、基礎力学、物理学2、力学2、基礎物理学、物理学・実験、熱学、現代物理学入門、医用物理学、物理学入門・演習である。

このうち、数学関係科目は学部・学科によらないほぼ統一的な科目配置を行っているが、物理関係科目は学部・学科の特色に応じた科目配置になっている。これは、理工系の学部・学科に共通な基礎数学の習得を目指していることと、専門科目とのつながりを考慮した物理・力学の学習を目指していることによる。

これらの科目群は、本来的には、工学部・情報通信工学部など工学系学部の共通の科目として設置されているものであるが、四条畷の学部・学科に対しても個々の学科の要望により上記科目の内その一部を提供している。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

A. 数学関係科目

本学数学教育科目における第1の目的は、専門科目を修得するために必要な数学的表現を理解し定理や公式を運用出来るようにすることである。特に理工系の学生が学ぶべき数学の基礎的事項である微積分学や線形代数学は完成度の高い、整備されたものであるから、これらを習得させることは、各学科の専門における物理学および工学系科目の履修・修得に供することにつながり、重要な目標となる。さらに、2年次で開講している「微分方程式」「確率・統計」などはより直接的に専門科目と関わっていることは言うまでもない。

第2の目的は、数学教員免許取得希望者や卒業研究において数学を希望する学生、あるいはより高度な数学を必要とする大学院進学希望者に対し、それぞれの目的に応じて数学の諸分野の知識を身に付けさせることである。

第3の目的は、間接的なものであるが、数学が本来的にもっている論理的整合性や合理性に慣れ親しませることである。このことは、単に手段としての数学知識を習得するためだけでなく、数学的なものの考え方を身に付けることにより、広くこの世界を理解し、社会生活を送るための重要な糧につながる。

上記の目標に従い、初年次生に提供される微積分関係科目(基礎解析・演習、基礎微積分1・演習、微分積分1・演習、基礎微積分2・演習、微分積分2・演習)と線形代数関係科目(線形代数1、線形代数2、線形代数学)を特に重要度の高い科目と位置づけている。すなわち、いきなり微積分から始めるのではなく、入学してくる学生に応じて、三角関数や指数・対数関数の理解を十分に行ってから微積分の修得を目指すシ

システムを取り入れている(基礎解析・演習)。さらに、基礎微積分1・演習、微分積分1・演習においても上記基本関数の復習を行ってから、関数の極限計算、導関数の計算へと進む。また、基礎微積分2・演習、微分積分2・演習では、1変数の微積分を復習しながら多変数の微積分に入ることになっている。(注:後述するように、3年前から新しく基礎微積分1・演習と基礎微積分2・演習を配置した。)

また、線形代数においては、いきなり概念的な項目から始めるのではなく、線形代数1や線形代数学では(行列の基本変形や行列式の計算など)計算方法の習得をメインにしたシラバスになっている。これにより、線形代数の基本的な目標である線形変換や固有値・固有ベクトル・行列の対角化(線形代数2)の習得にスムーズに入れるよう工夫している。(資料1:2014年度AS数学科目フローチャート)

B. 物理・力学関係科目

力学・物理学関連の基礎専門科目の目標は、物理学の基礎について正確な知識を授け、日常の現象に対して物理的な見方を養い、関連する専門科目の学習への意欲と能力を育てることである。近年、ますます顕著になってきている新入生の学力レベルの格差への対策として、「力学」「物理学」において導入されている習熟度別クラスによる講義・演習は今年度で14年目を迎えている。この間、学力レベルに格差のある学生に対する教育の実践に努め、ある程度の教育効果を得ることができた。現在のカリキュラムは2011年度から新たに導入され、新カリによる講義が定着してきた。現行のカリキュラムの特徴は、(1)学科の特徴を生かしたコースを設定し、学生が基礎専門科目から専門科目にスムーズに学ぶことができるようにする、(2)2年次以降に進んだ内容(アドバンス)の講義を用意する、ことである。開講科目は以下の表の通りである。

表 2014年度カリキュラム

学科	1年前期	1年後期	2年前期(後期)
EF	★物理学1・演習[2コマ連続]	★物理学2 物理学・実験	★EN 現代物理学入門
JH	★力学1・演習[2コマ連続] 物理学・実験	力学2、★基礎物理学	
UN	★物理学1・演習[2コマ連続]	★物理学2 物理学・実験	★EN 現代物理学入門 (N 熱学)
P	基礎力学	基礎物理学	
L	★LS 物理学入門・演習[2コマ連続] ★LS 力学1・演習[2コマ連続]	★LS 力学1・演習[2コマ連続] 力学2、基礎物理学	医用物理学
S	★LS 物理学入門・演習[2コマ連続] ★LS 力学・演習[2コマ連続]	★LS 力学・演習[2コマ連続]	

★印は習熟度別クラス編成科目

「物理学・実験」

「物理学・実験」は、物理現象との接触を通して原理の理解を深めながら、工学諸分野を専攻するのに不可欠な基本的実験操作や測定値処理法の習得を目的としており、工学部(EUHJN)および情報通信工学

部の通信工学科(F)では必修科目である。また、誰が読んでもわかるレポートの作成も重要な課題の一つである。

物理学・実験では、力学、物性、熱学、光学に関する実験課題が10テーマ以上用意されていて、学科にあわせて、講義科目との連携を図りながら、この中から8~9テーマを課している。授業時間の最初の3~4週はアクティブラーニング形式の講義に当て、誤差論の講義や、基本的測定器の使用法、グラフの書き方の実習をしている。一方的に教員が指導するのではなく、学生の自主的な取り組みを促すような実習形態としている。レポートは毎回全員が提出することを義務づけているが、文章を書くことを苦手とする学生が増加したことにより提出しない学生がいる。そこで、レポートの書き方の指導を徹底するために、実際に実験が始まってからの3テーマはレポート指導日をその実験テーマの次週に配置している。これにより、レポートの不提出による単位の不認定が大幅に減少した。レポート作成に苦手意識を持つ学生には、学生が独力でレポート作成ができるように特に丁寧に指導を行い、成果を挙げている。

学生が受動的に指導書に沿って実験手順を進めるということがないように、指導書に考察課題を充実させて、考えて手を動かすことができるように工夫している。また、学生が興味を持って能動的に実験に取り組めるよう、教員やサポート課職員が適時助言と指導を行っている。

近年では、教職科目として科目履修を希望する外部の社会人受講者が増加傾向にあるため、正規の受講生だけでなく、外部の受講生に合わせたレベルでの指導も随時行っている。

「習熟度別クラス編成」

工学部・通信情報工学部では、2006年度以降、習熟度別クラス編成の強化を図り、現行のカリキュラムでもこれを継承して実施している。習熟度の判定は、入学時の新入生全員を対象にした「数学プレースメントテスト」の結果と、高等学校における物理学の履修状況アンケートに基づいている。クラスは初歩クラス、基礎クラス、標準クラスに分けている。現状での新入生の状況を考えると物理を高校で履修していない学生が半分程度の学科もあり、物理学の問題による「プレースメントテスト」は実施していない。しかしながら、「数学プレースメントテスト」+「高等学校における物理履修状況アンケート」による習熟度別クラス分けは、現時点まで順調に機能している。習熟度別に3クラス(初歩、基礎、標準)に編成して実施しているが、初歩クラスの学生にはもちろん、標準クラスの学生にも適応した授業が展開できていることは注目に値する。将来的に初歩クラスを必要とする学生の割合を減らし、物理学の効果的な教育を実現させるためには、まず数学に対する習熟度を向上させることが不可欠である。

医療福祉工学部では、「物理学・入門」から始まる初歩コースを導入し、L学科では、a)基礎コース:1年前期「L物理学入門・演習」→1年後期「LS力学1・演習」とb)標準コース:1年前期「LS力学1・演習」→1年後期「L力学2」「L基礎物理学」を開講し、S学科では a)基礎コース:1年前期「S物理学入門・演習」→1年後期「LS力学・演習」とb)標準コース:1年前期「LS力学・演習」を実施している。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

A. 数学関係科目

現在、入学してくる学生の基礎学力の不足と多様化が問題になっている。最近の指導要領の改訂により益々この傾向が強くなっている。このことは本学に限らず全国的な現象として知られているところである。この問題に対応するため、当センターにおいても2000年度から基礎教育の重点化、習熟度別授業に取り組んできた。数学においては、微積分関係科目と線形代数の科目を1年次の重要科目ととらえ、特に多くの学生が苦手とする解析関係科目についてコース制を導入した。従来からの微積分関係科目に加え、新たに基礎解析・演習を1年次の前期に設け後期から微積分の科目を修得するコースを設けた。これにより、高校生の段階で、特に指数・対数関数、三角関数の理解や運用が不十分な学生に対応できることになった。

さらに2011年度からは、新カリキュラムの施行に伴い新しく基礎微積分1・演習、基礎微積分2・演習が開講され、初年次学生に対してよりきめ細かく対応することが出来るようになった。これらの科目は、それぞれ微積分1・演習、微積分2・演習と同様の内容であるが、よりテーマを絞り、取り扱う関数も出来るだけ単純なものに限ったシラバスになっている。また、教科書もこれに対応出来るように改訂された。

4月はじめに行うプレイメントテストによって、いくつかの学科をグルーピングしてクラス分けを行い、上記の基礎解析・演習からスタートするクラス、基礎微積分1・演習からスタートするクラス、微積分1・演習からスタートするクラスの3コースが平行して走るようになった。（資料2:2014年度クラス分け結果(数学)）

複数学科を4～5のクラスに分けて、学生の習熟度に応じて基礎解析・演習クラス、基礎微積分1・演習クラス、微積分1・演習クラスの3段階のクラスが複数平行に置かれている。各クラスの教授陣は連絡を密にして、授業の進度、講義や演習の工夫などの情報交換を行っている。さらに、クラス分けによる不公平感をもたせないため、同一科目の合格率に大きな差が生じないように努めている。2014年度における、1年次前期科目の基礎解析・演習や基礎微積分1・演習、微積分1・演習の合格率は80%前後で、線形代数1の合格率はこれより若干高くなっている。1年次後期科目については、授業内容が難しくなることと受講生の授業への取り組む姿勢に差異がみとめられ、合格率は(前期と比較して)若干低くなる。この点については、受講生のモチベーションを常に持たせるよう授業における更なる工夫を心掛けねばならない。

さらに1年次の後期には基礎解析・演習および線形代数1の再履修クラスを設けて初年次生に手厚く対応している。この再履修クラスにおいてはテーマを絞り、演習をより多く取り入れて学生の達成感を重視している。また、少人数クラスの特典を活かして出来る限り個別対応に努めている。一方、たとえば前期の微積分1・演習が不合格となった学生は後期に基礎微積分1・演習を履修し直すことができるなど手厚い対応になっている(履修科目の乗り換え)。

数学関係科目の教授陣(教職科目を含む)は専任教員9名、非常勤講師17名の大所帯である。日常的には、授業の進捗状況や学生の習得状況について、電子メールで情報交換を行っている。また、学期末には全員が集まり当該年度の授業についての意見交換や、翌年度の授業についての申し合わせ事項(資料3:2015年度数学関係科目担当の先生方へ)の確認を行っている。さらに評価の統一性も図っている。

B. 物理・力学関係科目

(1) 習熟度別クラスによる「力学1・演習」「物理学1・演習」

機械系学科(HJ)の「力学1・演習」(標準クラス)では、高校時代に物理学をある程度学んできている学生が多いため、従来のスタイルで講義を行うことが可能である。しかし、「円運動」や「単振動」の理解は、標準

クラスの学生においても困難で、ほとんどのクラスでは「単振動」は後期の「基礎物理学」に委ねている。さらに、「力学 1・演習」(初歩クラス)では、物理を学ぶ以前に、数学的な取り扱いができない学生が少なくない。文字式の扱い、1 次方程式、連立方程式、関数とグラフ(1 次関数、2 次関数)など、質点の運動を理解するために必要な数学的な知識を復習しながら進めているのが現状である。

物質・電気通信系学科(EF)では、「物理学 1・演習」(力学)、「物理学 2」(振動・波動・光)は従来通りのレベルを保ちつつ振動・波動も演習を取り入れられるように習熟度別クラスを開講している。力学・物理学関連の全時間数を減らして学生の負担を軽減するとともに、専門分野で必要になる基礎的な内容に重点を置いて教授することが狙いである。必修化としているE学科に対してはグループ担任との連携した修学指導を必要とすることも想定している。

サイエンス系学科(UN)に対して「物理学 1・演習」(力学)、「物理学 2」(振動・波動・光)のコースとして開講を行っている。理科教職を志望する学生が多く受講するため講義内容とそのレベルを考慮した実施が要望される場所であるが、現時点では習熟度別クラス分けの運用によって、受講学生の要望に対応できているように思われる。

このように習熟度別によるクラス編成では、クラス内の学力レベルの格差が抑えられているので、少なくとも学生の状況に合わせた授業運営が可能であり、授業に対する学生の満足度を高めるとともに、講義を進めやすい環境を教員側に提供して精神的な負担を軽減させていると言える。「高校 1 年の数学」がある程度マスターできていれば、2 コマ連続の授業でゆっくと演習を進める現在の授業で、力学の基礎を習得することは可能であると判断して良いであろう。まだ到達できない学生に対しては再履修クラスの充実を図るなど、時間をかけて学生がじっくり学べる環境を提供していくことが望まれる。

一方で、受講した学生の授業に対する理解度の現状から判断すると、進級するごとに学力レベルの格差が拡大していくことはやはり避けられない。また新入生の学力格差は全学的に広がり、一方でUN学科では理科教職を志望する学生が増加している。習熟度別クラスの編成方法、TAやSAの効果的な活用、実習・演習科目の充実、学生の理解度に合わせた細やかなフォローができる教育システムを構築し、多様で柔軟な教育観を持って質の向上を図る努力が望まれる。

(2) 「物理学・実験」

「物理学・実験」については、2006 年度から、工学部各学科の定員が 10~20 名減少した関係で、定員の大きい学科も 2 クラスに分けず 1 クラスで指導する体制に変更した。指導する教員の数も学科の定員に合わせて減らし、5 名ないし 4 名体制にした。この年は、実験は終了したがレポートを出さない学生が急増した年でもあった。このため、レポートをより書きやすくする必要に迫られ、実施する実験テーマを変更し、実験指導書の全面書き換えを行った。2006 年度は最初の 1 テーマだけ実験日の翌週をレポート指導日に当て、さらに、最後の実験日を実験予備日としてレポート未提出者の救済に当てた。レポート指導日の有効性が認められることから、2007 年度以降はレポート指導日を最初の 3 回の実験テーマについて実施することにした。(1)レポートに対する負担の軽減とレポート指導の徹底、(2)これまで、他の講義時間中に実験レポートを書く学生が多くて授業に差し障りがあるという批判があったが、これらに答えるものであることが期待された。レポート指導の充実、測定器の実習、グラフの書き方など特別な時間を設け十分時間をかけて指導することができるようになった。

実験指導書にも毎年改定を加えている。今年度は、学生が自宅学習しやすくなるように、予備知識の項目

を大幅に加筆した。

近年は何度も再履修する学生が増加傾向にあるため、再履修生の単位取得率向上を目指して、再履修生に対しては、前年度までの取り組み状況や習熟度などの経歴を個々の学生について把握し、再履修時にはこの点に配慮して指導を行っている。

(3) 再履修クラス

教員及び受講する学生の努力にもかかわらず、合格ラインに達しない学生が出ることはやむを得ない。高校時代に物理学をほとんど学んだことのない学生にとって、繰り返し時間をかけて勉強することは必要であろう。すなわち、1年次前期に開講されており、基礎的で重要な科目である「力学1・演習」「物理学1・演習」においては、1年次後期に「(再)力学1・演習」「(再)物理学1・演習」を配置し、前期に単位が取得できなかった学生でも後期の再履修クラスに履修登録をして再度学習できるようにしている。前期に単位が取得できなかった学生でも後期の再履修クラスに履修登録をして再度学習できるようにしている。再履修クラスを充実させることで、学生が何度でも再履修することができる環境を整え、合格ラインを下げることなく教育できることを目指している。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

1年次前期に「基礎解析・演習」「基礎微積分1・演習」「微分積分1・演習」や「力学1・演習」「物理学1・演習」において、単位取得ができなかった学生に対して、1年次後期に適切なクラスに履修登録を変更して再履修するよう指導している。各学科のグループ担任が対象となる学生に対して1年次前期の成績配布時に適切な指導を行っていただくように、ASセンターでは主任会や教授会で働きかけをしている。

現カリキュラムの実施以降、数学や物理の基礎専門科目への履修登録者数が少ない学科も見受けられている。キャップ制との関係も考慮し、1年次学生には基礎専門科目を履修するよう、各学科のグループ担任を通じて指導を行っている。

A. 数学関係科目

全学的に各教員はオフィスアワーを設けているが、さらに数学教員の多くは寝屋川学舎R号館1階に研究室をもっているため、質問等はそこに行くよう学生に周知している。また、教員は時間の許す限り学生の質問に応じるよう、お互いに申し合わせている。実際に、ほぼ毎日どこかの研究室で学生が質問している光景が見られている。別に、毎週開かれているコラボカフェをアナウンスして、教員に質問しにくいときは、こちらを利用するよう促している。

B. 物理・力学関係科目

単位取得ができなかった学生や2年次以降の履修登録を行う学生に対しても、学習効果をあげるためには到達度を考慮したクラス分けを行うことが望まれる。再履修生は「初歩クラス」を受講するように履修指導を徹底する必要がある。また2年次のEN合併2クラスで開講している「現代物理学入門」では、目的に合わせた習熟度別クラス編成を実施するなどの工夫を行っている。

4. 卒業研究指導について

基礎理工学科の卒研指導が行われるようになったので、ASセンターとしての卒研はそちらに組み込まれることになった。詳細は基礎理工学科の該当する項を参照されたい。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

設問[A]について、ASセンターが関係する項目は2～4であるが、昨年度以上の3.6～3.9の結果を得ている。このことは、我々が採用している習熟度別の授業が一定の成果を挙げていることと受け止められる。今後さらに、これらの項目についてポイントを上げることができるよう、シラバスや授業の現場における工夫を重ねてゆく方針である。

設問[B]について、ASセンターが関係する項目は4と5であるが、それぞれ昨年度と同じ3.7、3.9の結果を得ている。[B]の平均が3.6であることを考慮するとき、悪くない結果と思われる。今後も上記同様の考え方で対応してゆくつもりである。

自由記述については、ASセンターに関係する部分は余り多くないが、基礎専門科目が役に立ったとする声が見られる。授業における教員への直接的な注文、評価に関する注文、他の学生がうるさいなど授業環境に対する注文等は我々も留意しなければならないことである。ASセンターにおけるほとんどの専任教員・非常勤教員は長年1～2年次生の授業を受け持っており、今までに培ってきた授業におけるさまざまな工夫を共有している。特に、習熟度別授業の採用により、それまでの「わからない」、「難しすぎる」といった学生の反応に対しては一定の改善がなされたと考えている。一方、このことによって「易しすぎる」、「わからない学生にはかまわず、もっと難しい授業を」という声も一部に存在する。これに対しては、アドバンス科目の設置や学生へのオリエンテーションを強化することで対応してゆきたい。

ASセンターでは非常勤講師を含めて多くの教員が所属していることもあり、数学・物理それぞれにまとめ役の専任教員をおき、時折発生する学生からの注文や意見に対して迅速に対処できる体制が整えられている。これまでも迅速な対応には実績がある。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

ASセンター(数学)は、工学系の学生が身に付けておくべきミニマムスタンダードを統一的に教授するためにさまざまな工夫を行っているが、ここ数年は各学科の独自性が優先されつつあり、たとえば線形代数1を配置しながらそれにつづく線形代数2は配置されないなど当センターの意図が十分に活かされないカリキュラムが見受けられる。学部・学科に共通な基礎専門科目の位置付けや中身について、および修得困難な学生に対するケア等について議論を深めてゆきたい。

7. 添付資料

1. 資料1:2014年度AS数学科目フローチャート.xlsx
2. 資料2:2014年度クラス分け結果(数学).xlsx
3. 資料3:2015年度数学関係科目担当の先生方へ.pdf

数学系科目フローチャート

群	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期
EHJNFP	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎解析・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎微積分1・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分1・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">線形代数1</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎微積分1・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎微積分2・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分2・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">線形代数2</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎微積分2・演習 (EH/J/NF)++</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">確率・統計(EHJF), 微分方程式(EHF)</div>	
U	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎解析・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分1・演習(基礎)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分1・演習</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分1・演習(基礎)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分2・演習(基礎)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分2・演習</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">[微分積分2・演習(基礎)]+</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">線形代数学</div>	実際の科目名に (基礎)はない
再履修 EHJNFP		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">(再)基礎解析・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">(再)線形代数1</div>		
再履修 U		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">(再)基礎解析・演習</div>		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">(再)線形代数学</div>

++Pは他学科履修
+他学科の「基礎微積分2・演習」を履修

*N学科専門科目: 微分方程式, 確率・統計

*U学科3年前期: 確率・統計

群	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期
L	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">数学入門・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎解析・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分1・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">線形代数1</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎解析・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分1・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">微分積分2・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">線形代数2</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">[微分積分1・演習]*</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">微分方程式</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">[微分積分2・演習]*</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">[微分積分2・演習]*</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">確率・統計</div>
S	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">数学入門・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎解析・演習</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">基礎解析・演習</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">線形代数学</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 10px;">(基礎生体数学)</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">確率・統計</div>
再履修 L		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">(再)線形代数1</div>		

*希望者は1年向け科目を履修

2014年度クラスわけ結果(数学)

EHNJU PF LS 合計

解析系 線形代数
 総計 900 724

基礎解析・微分積分

		E		H		N		Aコースの学生数	Bコースの学生数	Cコースの学生数
EHN 月12		277		99		108				
EHN-A-1 山室	49		39		10					
EHN-A-2 西村-山原	49		0		36					
EHN-B-1 上田	55		33		22					
EHN-B-2 大久保	55		0		23					
EHN-C 田中(秀典)	69		27		17		98	110	69	
	277		99		108					
JU 木12		201	J	92	U	109				
JU-A-1 門田-山原	34		34		0					
JU-A-2 松田	41		0		41					
JU-B 田中(清喜)	65		29		36					
JU-C 中根	61		29		32		75	65	61	
	201		92		109					
PF 水12		266	F	95	P	171				
PF-A-1 和田	51		40		11					
PF-A-2 柳田	51		0		51					
PF-B-1 岡井	50		40		10					
PF-B-2 植田	51		0		51		102	101	63	
PF-C 反田<=西本	63		15		48					
	266		95		171					
LS 金12		156	L	89	S	67				
LS-A 南部・中村-松田	42		5		37					
LS-B-1 山室	40		40		0					
LS-B-2 松田-山室	30		0		30					
L-C 大須賀	44		44		0					
	156		89		67					
寝屋川計							275	276	193	
							744			
暇計							42	70	44	
							156			

線形代数

単純に名簿順に分割. 人数は過年度生の履修状況も考慮.

EJ 水4		191	E	99	J	92
EJ-S-1 浅倉	64		64		0	
EJ-S-2 木村	63		35		28	
EJ-S-3 和田	64		0		64	
	191		99		92	
HF 木3		203	H	108	F	95
HF-S-1 坂田-門田	68		68		0	
HF-S-2 田中(清喜)	67		40		27	
HF-S-3 岡崎	68		0		68	
	203		108		95	
N 火1		70				
N-S-1 西村	70					
	70					
P 火2		171				
P-S-1 村井	57					
P-S-2 門田-坂田	57					
P-S-3 山原	57					
	171					
L 水3		89				
L-S 坂田-門田	89					
	89					

2015年度 数学関係科目 担当の先生方へ (Ver.0311)

日頃より本学教育にご協力くださり、ありがとうございます。授業に関しては以下の点についてご理解いただき、適切な対応をお願いする次第です。

到達目標など 1年次前期の科目は、**最低限のことをきっちり分らせる**という方針
でお願い致します。

特に、微分積分1・演習および基礎微積分1・演習については、

数学 III や微分積分の知識を仮定せずにやる

ということを徹底していただくようお願いします。

(実際、微積は全然やっていない学生がクラスにいます。)

授業におきましては、特に演習に力を注いでいただきますようお願いいたします。
(演習は前で解かせるという形式よりも、授業中に各自にやらせてその間に個別の質問に答える、という形式をメインにさせていただく方が、よい結果が出る
ことが多いようです。)

また、近年の学生は少しのことでやる気をなくす傾向にあります。「これは中学や
高校でやっただろう」とか、「これぐらいできないようではダメ」といったことを
言われたり、質問して「そんな簡単なことを聞くな」と言われると、気持の萎え
る学生も多くなりました。この辺りのことをご配慮いただきますようお願い致し
ます(質問については後でも触れます。)

シラバス Webシラバスが以下の要領で見られます。

本学HP トップ → キャンパスライフ → 授業関連:Webシラバス

必ずシラバスのとおりにやるということではなく、全体的な内容として大体この
あたりという目安とお考えください。シラバスと違う点については適宜授業内で
アナウンスしていただくといいかと思えます(シラバスと違うということまでは
言わなくていいと思えます。)

解析系の授業 寝屋川キャンパスでは、解析系の授業は3つのコースに分かれています。

2015年度からカリキュラムが変わりますが、学科のブロックが変わっただけで
ほとんど内容は変わりません(教科書については後でご説明します。)

Aコース：1年半かけて、

基礎解析・演習 → 基礎微積分1・演習 → 基礎微積分2・演習

と進む¹。

¹U,P学科は2年前期の「基礎微積分2・演習」は時間割には載りません。希望者は他学科履修することになります。現実には受けるのは難しいかと思えます。

Bコース：1年で基礎微積分1・演習 → 基礎微積分2・演習 と進む。

Cコース：1年で微分積分1・演習 → 微分積分2・演習 と進む。

Bコースは、教科書の [A] 付きの部分は原則としてやらない設定です。その他も負荷が大きいと思われるものは適宜省いてください。Cコースの学生は、Bコースよりややレベルを上げるとのことですが、あまり大きな負荷をかけないようお願いいたします。また、B・Cコースのクラスでも、微分積分の知識は全く仮定しない授業をお願いします。ラジアン・三角関数や指数・対数関数の復習なども、ご配慮をお願い致します。

四條畷キャンパスでは、2012年度から数学のカリキュラムが変わりました。

- L学科の解析系の授業は3つのコースに分かれています。

Aコース：2年かけて、

数学入門・演習 → 基礎解析・演習 → 微分積分1・演習 → 微分積分2・演習
と進む。

Bコース：2年かけて、

基礎解析・演習 → 微分積分1・演習 → 微分積分2・演習
と進む。

Cコース：1年で

微分積分1・演習 → 微分積分2・演習

と進む（但し、微積分はぜんぜんやっていなくてもよい、特に数学Ⅲの履修を前提としない）。

◇ 畷の「微分積分1・演習」「微分積分2・演習」は寝屋川の「基礎微積分1・演習」「基礎微積分2・演習」にあたります。

◇ 2年前期の「微分積分2・演習」は不開講です。Bコースの学生には、必要があれば後期に1年向けの「微分積分2・演習」を受講するよう指導します。Aコースの2年次科目も希望者は1年向けのを取りに行く形になります。

- S学科の解析系の授業は2つのコースに分かれています。

Aコース：1年生の間に

数学入門・演習 → 基礎解析・演習

と進む。

Bコース：1年前期に

基礎解析・演習

を履修する。

◇「基礎解析・演習」について：「基礎解析・演習」の授業は、後期の「基礎微積分1・演習」の授業につなげることを主目的とお考えください。したがって、教科書のすべてを尽くす必要はありません。第4章まで進んでいただければ結構です。

◇「基礎微積分1・演習」および「微分積分1・演習」は、教科書の第1章を適宜復習に使いながら、第2章から第4章まで、「基礎微積分2・演習」および「微分積分2・演習」は、その続き、1の内容を適宜復習しつつ §6.3 あたりまで、となります。

◇クラス指定については、よほどのこと（クラス分け作業のミスなど）がない限り変更はできません。相談に来た学生がいましたら、その旨お伝えいただき、指定クラスで頑張るよう励ましてやってください。納得のいかない学生については萬代のところ (R101) に行くように言ってください。

線形代数の授業 線形代数のクラスについては、証明を省略してできるだけ例の説明や問題をやらせるなど、工夫していただけるとありがたく存じます。「線形代数1」（U旧カリ,Sでは「線形代数学」）は教科書第4章まで。「線形代数2」はその続きで、§8.4 や補足の節は省いてくださって結構です。

寝屋川キャンパスはやはり、2015年度からカリキュラムが変わりますが、学科のブロックが変わっただけでほとんど内容は変わりません（教科書については後でご説明します。）

当然のことながら、教科書に書かれていることをすべて授業でやるということではありません。難しいと思われる部分や証明などは適宜省略してください。

上記以外の科目 に関しては、同じ科目を持っている常勤教員などと情報交換をして、打ち合わせていただくとありがたいです。

質問 全般的に、個別の質問をしやすい雰囲気を作り、丁寧な対応を下さるようお願いいたします。ただ、授業の時のみ来学される先生方には、十分な対応をする時間的余裕がありませんので、以下のようにしたいと思います。

- 「授業担当者以外の常勤教員の研究室へも、遠慮せず質問・相談に行ってよい」ことを、適宜学生にご指導ください。常勤教員の部屋は、事務室などで尋ねさせてもよいかと思いますが、最後に挙げておきます。なお、四條畷での質問対応については、個別にご相談²ください。（前期は水曜3，4限に坂

²寝屋川キャンパスからスクールパスで通っている学生については、寝屋川キャンパスにいる常勤教員のところへ質問・相談に行くようご指導ください。

田先生，後期は水曜3限に門田先生，4限に木村先生の授業がそれぞれあります。）

特に，以前の内容が理解できていないために，授業がちんぷんかんぷんになっている学生への対応は，常勤教員に振っていただいて結構です．積極的に質問・相談に行くようご指導ください．

また，基礎力のない学生に対応するコラボ・カフェ等のシステムが今年度も動くはず³です．適宜，学生に勧めていただくとありがたいです．さらに，2013年度から，「インテンシブ・リメディアル数学」が実施されています．これは，特に数学の基礎力が弱い学生を選び，4月～6月の期間少人数の授業を15回（週2回）行うものです．学力や学習意欲のアップにつながることを期待されています．

名簿管理 1年前期の「基礎解析・演習」，「基礎微積分1・演習」，「微分積分1・演習」については，前述のようにコース分けをしてクラス分けを行っております．また「線形代数1」も，習熟度別ではありませんが，クラス指定をしております．

すべての授業科目について，定期的に出席を取っていただき，名簿にない学生の発見にご協力⁴をお願いします．特に，名簿が出来上がった直後は，何度か続けて出席を取って下さるようお願いいたします．出席点がない場合などは，名簿のコピーを回して丸をつけさせる（代返は気にしない）などの簡便な方法もありうるかと思えます．なお，名簿にあるが出席していない学生については，学生の責任ですので，無視して下さって結構です．

以下の順で，名簿類が届きます．

[1] 新入生割り当て名簿⁵．これは，ASセンターで作成するもので，新入生(学生番号の3,4桁目が15の学生)のクラス割り当ての名簿です．この名簿にない新入生は受けることができません．もし出席していたら，指定されたクラスを受けるようご指導ください（留年生や2年生以上はこの名簿には載ってなくても受けられます．逆に新入生でこの名簿にあっても，本人が登録をしなければ受講できません．）

[2] 出席集計システム．遅くとも2週目からは稼働するはずですが，このシステムでは，学生の履修登録の結果が早く反映されますので，仮名簿が来る前に登録状況が分かります．事務からこのシステムへの出席状況入力をお願いが行くと思いますので，ご協力をお願いします．

³残念ながらコラボ・カフェもリメディアル数学も四條畷にはありません．

⁴発見した場合は，クラスが間違っていることを指摘してやってください（ややこしい学生は，教務課へ「先生にクラスが違うと言われた」と言いに行かせてください．）

⁵この名簿は，非常勤講師室にお届けし，メールでもお送りするつもりです．1年前期の「基礎解析・演習」，「基礎微積分1・演習」，「微分積分1・演習」，「線形代数1」以外の科目にはありません．

[3] 仮名簿．これは，教務課からのもので，履修登録（おそらく第1回のみ反映）をした学生の名簿です．この名簿にないのに出席している学生は，履修登録にミスがある可能性があります．可能なら「履修登録ができていない可能性がある」ので，確認して，追加・修正の手続きをする⁶よう促していただくと助かります．始めの割り当ての名簿にないのにこの名簿にある新入生はいないはずですが，万一おりましたら教務課に問い合わせるようご指導ください．

[4] 最終的な名簿．教務課からのもので，一番初めの割り当ての名簿から，履修登録をしなかった学生が消え，留年生や2年生以上の履修登録をした者が加わった名簿です．これに載っていない学生はすべて受講できません．万一そういう学生が出席していたら，事務室へ履修登録の確認に行くようご指導ください．⁶

「基礎解析・演習」，「基礎微積分1・演習」，「微分積分1・演習」，「線形代数1」以外のクラスについても，履修ミスなどに気づいていない学生がいる可能性があります．上で述べた「[1] 新入生割り当て名簿」はありませんが，仮名簿や最終名簿で適宜チェックをしていただくと助かります．

授業アンケート 学期末に，授業アンケートを行うことになっています．その時期が来たら，案内が届くと思います．原則として，すべての講義科目について実施する方針なので，ぜひ授業中にアンケートを取る時間を設けて学生に答えさせて下さるようお願いします．

試験 試験に関しては，2006年度から原則として最後の授業の際に担当者が行う⁷ことになりました⁸．普段の授業中の演習，小テスト・中間テストなどを積極的に行って，平常点も加味した総合的な成績をつけていただきたいと考えています．特に，演習つきの1年次の科目は，期末試験のみならず，試験を複数回行っていただくようお願いいたします．

成績 学生の成績評価につきましては，いろいろとご苦勞をおかけしていることと思いますが，授業内では，甘すぎて学生が勉学意欲を失わないよう，特に「勉強しなくても何とかなる」という考えを抱かせないように，また一方では，分からなくても途中であきらめてしまわないよう励ますなど，ご注意くださいようお願いいたします．また，平常点を積極的に加味していただきたいと思います．特に，演習つきの1年次の科目では，普段の出席・演習などの平常点を15～30%ほど加

⁶始めの割り当ての名簿にない新入生が万一この名簿に残っているときは，あとで削除される可能性もあります．その前に教務でチェックするのでそういうことはないはずですが．

⁷この場合，正式名は「定期試験」ではなく「最終到達度確認」です．

⁸授業時間中ではなく，試験期間中に試験を行うこともできます．授業期間が終わってから試験期間が設定され，試験用の独自の時間割（1コマ60分）が組まれます．ただし，希望すれば必ず可能というわけではなく，受講生が多いとか，同一問題の試験を違うクラスでやりたいなどの事情がない場合，可能でないこともあります．

味していただきますようお願いいたします。また、期末試験を休んだ学生はまず不合格でしょうが、他のテストや平常点で60点未満の点を付けることができる場合は、点数を付けて成績を出してください。シラバスにある評価基準は一応の目安程度です。個々の授業のより正確な評価方法は、可能な範囲で授業中に提示してください。

なお、同じ学科の同じ科目を複数の教員が担当している科目の場合、先生ごとの成績が大きく違くと、学生が不公平感を持ちますので、以下のような一応の基準を設けております。

1年次前期の科目については、正規生の期末試験受験者（単位取得の意思があるもの）のうち不合格となる者の割合について、以下の範囲を一応の目安（あくまでも目安です）として考えています。しかし、現実的にはこの範囲から出てしまうことも多く起こっています。また、実際には受験率がクラスによって違いますので、「正規生受験者のうちの不合格者の目安」という設定自体、あまり適切でない部分もあります。学科が違う場合は、同じ時間帯でも差がでるのはむしろ自然でもあります。絶対的な基準ではもちろんなく、

目安として全員が意識することで、担当者による基準の差をできるだけ少なくし、クラス指定の不公平（感）をなくしたい

というのが趣旨とお考えください。

前期	基礎解析・演習	10-25%
	基礎微積分1・演習	10-20%
	微分積分1・演習	5-15%
	線形代数1	10-25%

成績をつけていて、迷ったりストレスを感じる要素がある場合は、遠慮なく、同じ時間帯を担当している常勤教員などにご相談ください。メールアドレスは最後につけてあります。

1年次後期の科目については、このような基準は考えていませんが、前期より結果的に厳しい数値になるのが自然であろうと思います（迷った場合は、気軽にご相談ください。）

教科書 「基礎解析・演習」の教科書は2012年度から新しくなりました。もし以前のA5サイズの教科書を持っている学生がいたら、新しいものを買うようにご指導下さい。

「基礎微積分1・演習」、「基礎微積分2・演習」、「微分積分1・演習」、「微分積分2・演習」、「線形代数1, 2」の教科書は2012年度から新しくなり、「新基礎コー

ス」と「新」の字がついています。今回やや大きく改訂しました。

旧版を持っている学生がいたら、新しい教科書を買うようご指導ください。

「確率・統計」の教科書は2011年度から試用していて、今回改訂しました。

上記3冊は、今までは一応学内版という位置づけで、今回の改訂版から一般に市販します（ISBNも変わりました）。

なお、誤植や問題解答の間違い、記述の仕方など、お気づきの点がありましたらぜひ以下の担当者宛ご指摘ください（電子メールをご使用にならない方は、事務室にメモを言付けてくだされば結構です。）

基礎解析：「基礎解析 第2版」，学術図書出版

ISBN978-4-7806-0038-4（担当，門田： ██████████ ）

線形代数：「新基礎コース 線形代数」，学術図書出版

ISBN978-4-7806-0404-7（担当，浅倉： ██████████ ）

微分積分：「新基礎コース 微分積分」，学術図書出版

ISBN978-4-7806-0403-0（担当，萬代： ██████████ ）

確率・統計：「新基礎コース 確率・統計」，学術図書出版

ISBN978-4-7806-0405-4（担当，浅倉： ██████████ ）

なお、授業1回目は教科書を持っていない学生も多いと思います。1回目は教科書がないという前提で授業をしてください！次回からは必ず教科書を持ってくるように」と言っていただくといいかと思います。

部屋およびメールアドレス一覧

██████	██████	████████████████████
██████	██████	████████████████████
██████	██████	████████████████████
██████	██████	████████████████████
██████	██████	████████████████████
██████	██████	████████████████████
██████	██████	████████████████████
██████	██████	████████████████████
██████	██████	████████████████████

（メールアドレスについては一応関係者以外には公表しないということをお願いします。）

※墨消し部分は個人情報の為、非公開

以上，お手数をおかけして申し訳ありませんが，よろしくお願ひします．

ご質問・お問い合わせなどは，萬代（数学教務担当）または浅倉・萬代・門田（教科書責任者）までお気軽にどうぞ．

2015.03

大阪電気通信大学 数理科学研究センター（A S）

（萬代 武史
[Redacted]
[Redacted]）

附録：学科名称と略号

*の学科については，A Sセンターは数学を担当していません．ただし，最後のT学科は教職科目のみ関係します（ ）に入っている学科は，今はなくなった学科ですが，過年次生が来る可能性はあります．

- 工学部（寝屋川キャンパス）
 - ▷ 電気電子工学科（E学科）
 - ▷ 電子機械工学科（H学科）
 - ▷ 機械工学科（J学科）
 - ▷ 基礎理工学科（N学科）
 - ▷ 環境科学科（U学科）
 - ▷ （応用化学科（G学科））
 - ▷ （環境技術学科（Z学科））
- 情報通信工学部（寝屋川キャンパス）
 - ▷ 情報工学科（P学科）
 - ▷ 通信工学科（F学科）
 - ▷ （光・エレクトロニクス学科（K学科））
- 金融経済学部（寝屋川市駅前キャンパス）
 - * 資産運用学科（A学科）
- 医療福祉工学部（四條畷キャンパス）
 - ▷ 医療福祉工学科（L学科）
 - * 理学療法学科（Y学科）
 - ▷ 健康スポーツ科学科（S学科）
- 総合情報学部（四條畷キャンパス）
 - * （デジタルアート・アニメーション学科（Q学科））
 - * デジタルゲーム学科（W学科）
 - * 情報学科（T学科）

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 10日
工学部 電気電子工学科
2014年度主任 生田 孝

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

2009年度に改組して発足した電気電子工学科の新カリキュラムが2012年度に完成し、2014年度はその実施3年目となる。

学科のキーコンセプトである「環境と人にやさしいテクノロジー」に基づき、学生が卒業後に進むであろう、電子機器、電子デバイス、情報システム、電気制御、電気設備、エネルギーなどの分野の技術者として必須の基本知識・技術を確実に身に付けさせることが主たる教育目標である。これらに加え、コミュニケーション能力やチームで働く能力の向上、さらには正しく技術を使用する倫理観、責任感に関する教育を合わせ行うことで、よき社会人として世に送り出すことを第2の教育目標とする。学科カリキュラムはこのような教育目標を実現すべく編成されている。

新カリキュラムでの受講科目については、基礎科目、5専門科目群、卒業研究、連携講座などの位置付けを明確化したカリキュラムマップを作り、学生の進路別に4コースを想定して、それぞれのコースについて推奨する受講科目リストを学生に例示してきた。さらに2014年度にはシラバスの記載内容見直しが行われ、講義日ごとの講義内容と予習復習項目の明示、オフィスアワーの記入、評価基準の数値化、などが図られた。特に1年次生にとって、これらは履修申請のミスを防ぎ、系統立てた受講科目の選択に役立っていると判断される。

キャリア関連科目「キャリア入門」については、大学4年間および将来の人生を設計するための導入教育という観点から、「自分を知り、大学を知り、社会を知る」をコンセプトに内容を一新した(2013年度)。2014年度についても大学4年間のキャリア教育に使えるOECU-Eノート2014(添付資料1)を配布し、他大学の初年次導入教育で成果を上げている学外教員(非常勤講師)とE学科の教員全員で実施した。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

受講生からの授業アンケートについては各教員が真摯に受け止め、自身の授業点検、授業改善プランに反映させた。成績評価(平均値、成績分布、合格率など)については教員ごとに差がある。2014年度は残念ながら十分な全体的分析・考察が行えていない状況であるが、個々の教員において今後の成績評価にフィードバックさせている。

従来、受講生の多くは各授業科目の講義内容の「丸暗記」に力を注ぎ、「なぜそうなるのか?」をあまり考えていなかったように見受けられる。また、各授業科目をほとんど独立のものと考え、他の科目との関連性にあまり注目していなかったようにも見える。教育改善の目標とすべきことの一つは、受講生に「丸暗記」から「考え方の理解」へシフトさせる諸策をより一層講じることであり、各教員が授業・実験・演習を通じて積極的にこれを進めている。さらに2014年度よりシラバスに明記することになった、講義内容に対する予習復習項目を利用して「関連講義との関わり」を受講生に周知させ、受講意欲の改善(当該科目と関連科目)に努めた。

キャリア入門では大学卒業数年以内の若手OBによる講演を実施した。所属企業が難色を示すことが多い若手OBの講演ではあるが、受講生の評価は高く、身近な存在であり自分たちの具体的な目標として捉えることができたようである。また、受講生と若手OBとの質疑応答は活発で、OBのアドバイスなども肯定的に受け入れられている。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

先に述べたように受講科目については、基礎科目、5専門科目群、卒業研究、連携講座などの位置付けを明確化したカリキュラムマップを作り、学生の進路別に4コースを想定して、それぞれのコースについて推奨する受講科目リストを学生に例示している。さらに学業成績配布時には履修科目の指導を個別に実施している。

1 年次生の講義出席状況はその後の進級に深く関係する。学科教員が関係する 1 年次科目については従来から学科教員間にて出席状況を Eメールで共有してきたが、2014 年度はさらに徹底し、できるだけ早く（可能な限り講義日より 1 両日以内）共有できるように努めた。これによりグループ担任教員、もしくは 1 年次科目担当教員がただちにフォローできるようになり、出席率の改善に役立ったと判断される。

また 2014 年度よりシラバスに各授業科目のオフィスアワーが記入され、受講生にとって講義に関する質問が時間をかけて行えるようになった。このオフィスアワーを積極的に利用して、授業について行けない学生諸君には手厚い補習を行うとともに、理解力のある学生についてはより高度な勉学の機会となるように心がけた。

各年次学生（研究室配属生除く）に対する生活相談は主としてグループ担任が担当する。研究室配属生（卒研生、プレゼミ生）については卒研担当教員が生活相談を担当している。2014 年度、担当教員は出来る限り時間をかけて生活相談に対応するよう努力してきた。

就職支援としてはまず 3 年次前期科目の「キャリア設計」があり、2014 年度は SPI や就職専門模擬試験と、就職活動の流れ、職場のマナー、エントリーシート作成学習、模擬面接（集団、個人）などに加えて、企業トップの方の講話と、4 年次生の就職状況自主調査・報告および学外の企業見学（8 月）を実施した。これらにより、自己のキャリア意識を高め今後の就職活動に役立ったと思われる。

さらに、一部 3 年生は 3 年次後期配当「インターンシップ」（実質的に前期に準備、各企業にて 8-9 月にインターンシップ実施）により、短期間であるが企業活動を直接に体験した。インターンシップの実施状況は、実習生がパワーポイントにまとめ、学内のみ、及び参加企業の担当者を合わせた 2 度の報告会において報告している。

4 月末に新 1 年生の合宿を実施し、電通大学生としての帰属意識、早期の友達作りなどの機会を提供した。合宿後のアンケート結果を見ると、上記の目的はかなり達成出来ていると思われる。

加えて 2015 年度入学予定生に対して、入学前のガイダンスを実施した。その中では卒研発表の見学を取り入れている。4 年間のゴールである卒業研究の雰囲気を経験することで、2015 年度入学後の勉学意欲を少しでも高めていただくことを期待している。

学力不振者対象のインテンシブプリメディアル数学を実施した。我々教員にとって学力不振学生の数学知識の実態と、学生がどこで苦勞しているかを直接知る機会となった。出席率などの問題も多く、2015 年度のインテンシブプリメディアル数学の実施結果と合わせ、基本方針の再検討が必要と思われる。

4. 卒業研究指導について

卒業研究室配属については、配属先研究室の収容力に上限があることから、すべての学生の希望を満たすことは出来ない。以前より電気電子工学科では 3 年次後期のプレゼミナール時に 2 段階希望調査方式を採用、出来るかぎり希望研究室が集中しないように配慮してきた。2014 年度もほぼ同様の方式で研究室を選ばせた。その際、希望順位の低位に配属される学生について、感情的な不満が残らないように慎重に配属先を決めている。この方式にして以来、途中で学生が研究室変更を希望する状況は発生していない。今後もこの方式で研究室配属していきたい。

4 年次の卒業研究では担当教員によって取り組み方は異なるが、学生個人の個性を活かすように、本人と直接面談の上、適性や能力に応じて卒業研究課題を決めることが多い。2014 年度は出来るだけこの方針で卒業研究課題を決め、卒業研究課題に対する不満からの不登校（研究室に来なくなる）を無くすよう努力してきた。

卒業研究の実施においては従来と同様、研究室でのゼミ発表、中間発表会、全体での最終報告会まで時間をかけて発表資料（パワーポイント）を準備させ、十分な発表練習を行わせる。2014 年度も基本的には同じ方針ではあるが、発表者が「自分の研究を発表できてよかった」と感じる報告会になるように、担当教員一同、注意を払って指導したつもりである。

近年、学生は相当な時間を就職活動に割くことを強いられている。そのことが卒研に対する誤ったシグナルとなり、就職活動の終わった学生まで、卒研を軽視し研究室にあまり出席せずにアルバイトをしている状況が散見される。卒研と就職活動の位置付けを学生に理解させる必要がある。その一環として、卒研

発表において、内容が不十分な学生については不合格とし、再発表を義務付けてきた。2013年度は、再発表2名、指導教員の指導による追加研究3名の合計5名を卒研発表不合格とした(再発表者2名についてはその後、学科全教授の前で再発表させ、合格とした)。ところが2014年度に関しては、幸い不合格者0名で、再発表の必要が無い状況であった。卒研生全員が発表に向けて努力した結果と思われる。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

2014年度卒業生は、前述したように卒業研究発表会において、不合格者0名の状況であり、活発な学年であったといえる。

卒業生満足度調査[A]の「知識や能力の獲得」に関しては2012年度以来、3.4ポイントを維持しており、この数字は寝屋川キャンパス、および大学全体の数字とも等しい。「知識や能力の獲得」の各項目の数値も年度ごとに大幅な変動は無いが、一部やや大きな平均値増加がみられるのは「専門的な知識・技能」の項目である(2014年度4.0、2013年度3.7、2012年度3.8)。前述した、「卒研発表不合格者0」も専門的な知識・技能をよく獲得したことの結果かも知れない。全体的に(毎年)評価の低い項目は「国際的な視野3項目」と、「リーダーシップ」である。前者については抜本的な対策が必要と思われる。後者では講義(実験、演習含め)に対して、「より一層アクティブラーニング的要素を組み込むべき」と考える。

卒業生満足度調査[B]の「授業科目群、教育設備・機器」に関しては、2012年度以来3.5から3.6に微増の状況である。その中で「TAによる指導」の項目のみ2012、13年度から0.4ポイントの増加が見られる。TA制度が軌道に乗り、充実してきた結果と思われる。

[C]の総合評価については2013年度に+0.2ポイント増加であったのが、2014年度については逆に-0.1ポイント減である。総合評価についてはほぼ横ばいの状況と判断される。

卒業生満足度調査の自由記述は合わせて4ページであった。前年度より1ページ減っているが内容として真摯なものが目立つ。その中の一つに、「サークルが寝屋川キャンパスに集中し、学年上下間の交流が少ない。学年を越える関わりが欲しい」がある。サークル活動以外で「学年を越える関わり」を作るきっかけとしてはTA、さらにはSAが考えられる。TAについては「丁寧に教えていただける」との記述も多く、すでに修士学生と学部学生をつなぐ絆の一つになっている。さらにSAを充実させ、高学年・低学年の絆を確立させることを今後の課題としたい。

6. その他、特記事項(学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など)など

電気電子工学科には独自の企業連携講座がある。2014年度は、三菱電機、きんでん、日本電設工業の3社に継続して講義をしていただいている。一方、パナソニック社は社内事情で継続できなくなった。このため以前より知的財産の講義をお願いしている古谷特許事務所に、2014年度から企業連携講座として新たに参加頂くことになった。

電気電子工学科ではアクティブラーニングの一環として、電子基板自動加工機を用いた電子回路試作を行う集中授業「電気電子回路創成演習」を2014年度9月初めに実施した。上記加工機を用いてLED発光制御回路の製作を各自が行ったが、参加者には誠に好評であった。

1年生の必修科目の出席状況は、逐次メールで全教員に周知させている。欠席が増える兆候を早めに察知して本人にコンタクトを取り、問題点を解決して授業に出席するように促し、積極的に成績不振による離学の防止に努めた。2014年度以降も継続する心積もりである。

7. 添付資料

1. 資料1 OECU-E ノート 2014(別途提出)

OECU-E ノート 2014

工学部
電気電子工学科



4ステップの実学教育

4 Step Education for Practical Studies

ときめき
Opportunity

実践
Experience

感動
Capability

発展
Utility

大阪電気通信大学

O.E.C.U. Osaka Electro-Communication University

2014 年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015 年 6 月 19 日
工学部 環境科学科
2014 年度主任 西岡 昇

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

人類が直面している様々な地球上の環境問題を正しく理解し、解決していくためには多くの取り組み方がある。環境科学科は、これらの取り組み方の中から、人類に悪影響を及ぼさない新物質を創り出し人類の生活をより豊かなものにしていくための化学技術、または様々なエネルギーをより利用可能なエネルギーに効率よく変換するための技術やこれらのエネルギーを無駄なく貯蔵するための技術、さらにはエネルギー消費を削減するための省エネルギー技術などの機械系技術を教授することにより、優れた環境意識を有する人材、すなわち、機械系知識を有する化学系技術者または化学系知識を有する機械系技術者を育成することを目的としている。このように環境科学科の教育分野は化学系及び機械系分野の二つからなっているため、低学年では化学系と機械系の基礎科目を幅広く修得させ、高学年で学生の興味と適性に応じてコースを選択させるシステムを取り入れている。そのためにも、1 年次において少人数から構成される教育プログラムを準備し、きめ細かく各人の適性を判断できるよう試みている。

環境科学科では、3 つのコース（エコ化学コース・バイオ化学コース・エネルギー機械コース）を設置し、2 年次後期より学生の興味と適性に応じていずれかのコースを選択できるようにしている。コース分けまでは、化学系科目と機械系科目を共通科目として配当し、両系列の科目を修得することにより、学生の興味と適性を自らが判断できるようにしている。各コースの主たる人材育成目標は以下のとおりである。

エコ化学コース：環境問題を化学の観点から理解し、化学物質の環境への負荷や安全性等に配慮出来る幅広い視野を持って、化学物質の創製と物性の制御ができる人材を育成する。

バイオ化学コース：生化学を基礎とし、バイオマテリアルの開発やバイオマスエネルギーの有効利用、さらに化学物質の生体への影響の分析評価により医療・食品への応用技術を身に付け、かつ生態系環境への影響などを考察できる人材を育成する。

エネルギー機械コース：エネルギー変換、エネルギー貯蔵、省エネルギー技術などの環境技術を修得し、機械工学分野の知識と様々なエネルギー資源の特性に関する化学工学分野の知識を有する人材を育成する。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価（平均値, 成績分布, 合格率など）について

環境科学科教員の授業アンケート実施率は大学平均よりも高く、各教員は授業点検に努力している。また、学生からの改善要求に対しても真摯に対応している。環境科学科には化学系コースと機械系コースがあり、それぞれのコース志望学生の間には各教科に対する姿勢に若干の相違が見られるが、志望コース以外の教科目も勉学することにより、より幅広い知識を修得しているものと期待している。各教員は担当科目の講義内容や成績評価方法等のオリエンテーションを初回授業時に十分に行なっており、学生諸君も各自の進路を勘案しながら授業を選択しているようである。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

履修登録制限制度に起因すると思われるが、例年将来の進路選択の判断材料となるべき教科を履修しない学生が存在しているため、本年度も、年度初めの履修登録前の各学生への履修オリエンテーションをより十分に実施した。入学当初に実施した今後の進路に関するアンケートにおいては、エネルギー機械コースの志望者は約 25%程度であり、化学系コース志望者の方が多い結果であったが、2 年次後期のコース分けでは、約 30%程度とわずかに増加する傾向が認められた。化学系 2 コース、機械系 1 コースのカリキュラム構成から考えて、3 コースへの志望分布はおおむね順当と考えられる。1 年次と 2 年次の各種実験、講義科目等を経験することにより、学科の教育理念を理解し、2 年次後期からのコース分けに対処してくれたものと理解している。

例年通り全教員をグループ担任とし、学生を 10 名程度のグループに分割した。1 年次生に対しては、グループ毎に「基礎ゼミナール」を開講し、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力及び数学の基礎学力等を指導することにより個別指導を充実させるとともに、学生と教員間でのコミュニケーションの活性化を図った。本年度も前身の応用化学科より実施している学外教育研修として一泊二日の研修を実施した。友達作りの一助となったものと考えられる。本年度も環境科学科 2・3・4 年次生の研修ボランティアを募集したところ 22 名が応募してくれた。積極性のある学生たちに育ってくれているようである。

4. 卒業研究指導について

環境科学科として完成年度を迎え初の卒業研究指導を行なった。プレゼミナールの配属指導時において、化学系コース実験受講者が機械系コース教員のプレゼミナールを志望したり、また、逆の場合があったが、学生諸君は自分の選んだコースに固執することなく卒業研究テーマを選んだものと考えられる。本学科の教育目標は、機械系知識を有する化学系技術者及び化学系知識を有する機械系技術者の養成であるが、学生諸君は学科の教育目標をよく理解し卒業研究室を選択したと考えられる。卒業研究発表においても各研究室のテーマをよく理解し、発表も申し分なかった。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

環境科学科としては初の卒業生を送り出したことになるが、満足度は大学平均並みであり特に特徴的な点は認められなかった。しかし、この調査項目にはなかった点であるが、卒業生諸君は本学科の教育目標をよく理解し、幅広い分に就職してくれており、就職率は大学平均を上回ることが出来た。

6. その他、特記事項（学科独自の教育など）など

資格取得支援のために、通常の講義以外に公害防止管理者(水質)・第三種電気主任技術者・エネルギー管理士・気象予報士・環境社会検定・CAD 利用技術者等の支援講座を数名の教員がボランティアで開講している。これらの支援講座は前身の応用化学科や環境技術学科でも実施しており、多くの資格取得者を輩出しているが、環境科学科出身者からも数多くの資格取得者を輩出することが出来ている。

7. 添付資料

特になし。

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

平成 27 年 06 月 16 日
工学部 電子機械工学科
2014 年度主任 岸岡清

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

[1] カリキュラム改訂

(1) 学科の教育方針の明確化

新カリキュラムの策定に当たり、将来に向けた学科が目指す教育方針を纏め、それに基づいたカリキュラムの策定を行った。カリキュラム改訂の議論・作業が本格する 26 年 4 月を前に 3 月に、学科会議で陣容も含めた学科の将来像を議論し、それらの事も踏まえて将来を見据えた学科の教育方針の議論を行った。

議論の詳細は、[添付資料 1]

「新カリキュラムの特長(新カリキュラムの目指す教育)」(H26 年 3 月 10 日付け)を参照ください。

学科の教育方針(纏め):

- ① 「機械」と「電気・電子」の両方の分野の知識・技術を基礎からきっちりと学ばせる。
- ② 社会のニーズに応える“機械”も“電気・電子”解かる“メカトロのクス技術者”の育成を目指す。
- ③ 学生自身の特性に応じて、スペクトルの広い人材の育成を目指す。
- ④ モノづくりを実感させ、技術者としての素養を養う教育を目指す。

(2) 新カリキュラムの特長(纏め)

新カリキュラム策定のポリシー:

■従来の教え方:「基礎を教えるから、実際への応用の仕方を教える」という考えを捨て、「まず、“モノ”を見せて“実感”させ、疑問を持たせると同時に、設計方法や特性に興味を向けさせた後、詳しい仕組みや動作原理を教える」という教え方に切り替える。

■疑問を持たせる過程で思考を先に進める試行錯誤や逆問題の解法を学ばせる。

■本学の施設・システムを活かした「モノづくり」

特長:

① 学びやすいカリキュラム

「機械」、「電気・電子」、「情報・コンピュータ」、「計測・制御」、「メカトロニクス」の5つの分野の科目を低学年から並列に配置し、各人の進路に合った授業が選択できる。

② 各人の特性に合わせた幅広い学び方ができるカリキュラム。

③ 幅広い分野の受験生に対応でき、しかも、入学後に進路を考えることができるカリキュラム。

- ④ 本学科の広い分野の人材(教員)を活かしたダイナミックなカリキュラム
- ⑤ モノづくりを体験できるカリキュラム

[2] シラバスについて

受講生に学習意欲を起こさせるシラバスの作成を目指す目標を立てて、昨年度は実際に、各週毎の授業内容、事前学習の内容、事後学習の内容等を全科目について掲載し、一応のシラバスの内容の強化は達せられた。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

一昨年度に引き続いて、以下の各項目を実施した：

- ① 学生に対する授業アンケートや、期末（9月、3月）の成績配布時に実施している学修効果の測定によって、授業内容の点検と改善に努めた。
- ② 個々の授業では、学生の理解度の把握と授業内容の復習のために、時間ごとの小テスト、演習を取り入れた授業の実施に努めた。
- ③ 成績評価に関して、期末のテストのみではなく、複数回の中間テストや演習などで総合的に評価を行い、受講生の長所を可能な限り引き出すよう工夫した。
- ④ 教員へのフィードバックとして、基幹科目について成績度数分布表を成績配布時に作成・開示し、成績の評価の妥当性と問題点をチェックを継続して行った。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

以下の各項目の実施と内容の向上に努力を払った：

- ① 1～3年までの各学年において、各学年10名程度の学生をグループ担任が受け持ち、日常の教育相談、生活相談を始め、年2回の成績配布時の履修・学習指導を通して、学生の成長を見守った。また、年度末の教育懇談会では、保護者との面談を通して、グループ担任と保護者との連携による学生指導にも努めた。
- ② 1年次開講の「キャリア入門」の後半部（5週目以降）において、担当グループ毎に別れ、基礎学力向上を図るための授業をすると共に、少人数編成の授業の長所を活かし、担当教員と学生との意思の疎通をはかり、きめ細かな生活・学習指導を心がけた。さらに全教員がオフィス・アワーを設定し、授業内容、生活に対する相談に応じた。
- ③ 就職指導に関しては、3年次前期に開講されている「キャリア設計」と、3年次後期から各研究室に所属して行われる「プレゼミナール」および卒業研究を通じて、卒研指導教員による個別指導で対応した。昨年度（2014年度）の就職率は、工学部では最上位クラスの94%を超える高い数値を記録できた。

4. 卒業研究指導について

(1) プレゼミナールと卒研

3年次後期の「プレゼミナール」での卒業研究の動機付けを通して、スムーズな卒業研究への移行が行われた。プレゼミナールでは、各研究室での専門分野のゼミ、卒業研究を想定した演習問題等を通して、卒業研究への導入が行われた。

卒業研究では知識を得る事に加えて、問題解決能力を身につける事に重点を置いた指導を行っている。卒業研究室での教員との議論を通して、コミュニケーション能力を養うことも重視した指導を実施している。

卒研生は1年間の成果を卒業研究発表会で口頭発表するとともに卒業論文としてまとめることが義務付けられており、これらを通してプレゼンテーション能力と文章を書く能力の向上の指導を行っている。

(2) 卒研室配属の工夫

4月の時点(4年生への進級が決まった時点)で、各研究室にできる限り均等な人数が配属されるように、プレゼミナールの配属の際に、3年生前期までの取得単位数によって、人数に重みを付けた配属方法を実施し、特定の卒研室への人数の偏重を防いだ。その結果、各研究室の配属人数は、概ね平均化され、卒研生の配属に対する不満も軽減された。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

[1] 質問項目[A]:「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識をどの程度獲得したと思いますか」の項目では、2013年度に対して、いずれの項目についても0.1~0.2ポイントの上昇が確認され、満足度が高くなった。

国際的な視野」に関して；

(1)「国際的な視野」に関しては、全学的に獲得度が低い傾向にあるが、学科独自の改善策として、3年次に「工業英語」(電子機械工学科専門科目)の授業を配当(平成23年度開始)し、その向上を目指した。

(2)引き続き、本学同窓会(有電会)が主催しているカナダへの語学研修の参加を呼びかけることにも力を入れることとした。昨年度(2014年度)は、本学科の新関准教授が、語学研修の団長として参加したことも、学生諸君の国際的な視野の向上に貢献した。

「リーダーシップ」に関して；

(1)「プレインターンシップゼミナール」に於いて、グループ・ディスカッション等のリーダーシップを高める技術の指導を引き続き行った。

(2)大学、学科の行事(オープンキャンパス、新入生歓迎会・研究室見学、中学サマーセミナー等)に積極的な参加を促し、その企画・立案・実行課程に積極的に関与した。

[2] 質問項目[B]:「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」の項目;

各項目に関して、獲得度はすべての項目に対して、2013年度に対して0.4~0.2程度の上昇が見られ、授業科目等への満足度も増加した。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

- (1) 「モノづくり」を教育方針の一つに掲げ、実験・演習科目を重視した教育を実施している。3年生後期に開講している「電子機械実験2」では3D造形先端加工センターに設置されている金属3Dプリンターを用いて、各自のデザインしたバッチの製作を学生全員が体験した。
- (2) 学生が制作したバッチの品評会を、3月に実施した「入学前ガイダンス」に参加した入学予定者と教員によって行い、優秀な作品について表彰を行った。在學生と取っては、大きな励みとなり、また、入学予定者にとっては、勉学意欲の向上を促した。

【添付資料2】参照

- (3) 離学者対策としては、2013年度に引き続いて、以下の事を計画・実施した:

①資格取得の支援

授業以外の事にチャレンジさせて、自信を付けさせるという目的で、「電験3種」の受験講座に本学科から2名の教員（岸岡、森下）が参加した。

②新入生に対するアカデミック・スキル教育の充実

「キャリア入門」の授業（第一週目）において、①ノートの取り方、②レポート提出の重要性、その書き方・纏め方、③復習の重要性と、効果の上がるやり方等、大学での勉学を迫る上で不可欠なスキルを講述した。

(4) 学科独自の Help-Note の作成

新入生のスムーズな大学での生活・勉学のスタートを支援する目的で学科独自の内容の Help-Note を作成した。新入生が初年度に受講する重要科目である①「キャリア入門」と、②「メカトロニクス基礎演習（新カリ科目）」の内容の掲載に加え、大学での生活と勉学で新入生が深く関わり、支援を受けることができる「学生部・教務部」、「就職部」、「図書館」、「MC2」、「大学生協」の各部門に学生支援の観点から出筆を依頼し、その内容を掲載した。

[添付資料 1]

平成26年3月10日

文責：岸岡

新カリキュラムの特長（新カリキュラムの目指す教育）

学科が目指す教育方針を述べ、その実現に向けたカリキュラムの特長を以下に纏める：

[1] 学科が目指す教育

（１）「機械」と「電気・電子」の両方の分野の知識・技術を、幅広く基礎からきっちりと学ばせる。

（２）最近の“機械”は、構造を造る機械技術だけでは十分に働かすことができず、それに命を与える電気・電子技術が不可欠である。このような観点から、“機械”も“電気・電子”解かる“メカトロのクス技術者”が求められている。社会のニーズに応える“機械も電気も解かるメカトロニクス技術者”の育成を目指す。

（３）機械と電気・電子の両方の分野が学べる本学科の特長を活かして、学生自身の特性によってそのウエイトを各人に自由に設定させる事を可能にし、スペクトルの広い人材の育成を目指す。

（４）モノづくりを実感させ、技術者としての素養を養う教育を目指す。モノづくりを重視したカリキュラムを実施する事により、社会のニーズに応える技術者の育成を目指す。

キャッチフレーズ：

- 「機械も電気も解かるメカトロニクス技術者」の育成
- 「機械」と「電気・電子」の両方を学べるカリキュラム
- 機械と電気・電子の基礎から応用まで幅広く学べるカリキュラム
- 将来の進路が見えてくるカリキュラム
- 自分の特性に合わせて学べる“学び易い”カリキュラム構成
- 社会のニーズに応える実践的なモノづくりを重視したカリキュラム
- 幅広い範囲の基礎をしっかりと学び、将来の夢を実現させるカリキュラム

[2] 新カリキュラムの特長

(1) 学び易いカリキュラム

①機械、②電気・電子、③情報・コンピュータ、④計測・制御、⑤メカトロニクスとの5つの分野の科目を低学年から並列に配置する事によって、学生諸君は機械分野と電気・電子分野、並びに関連分野の科目を、学年の進行と共に自然に幅広く基礎から学ぶ事ができる。

(2) 各人の特性に合わせた幅広い学び方ができるカリキュラム

5つの分野の科目群から各人の特性に合った科目を選定して受講する事が可能で、卒業後の進路に合わせた勉学・授業履修計画を立てる事ができる。

(3) 幅広い分野の受験生に対応できるカリキュラム

受験時に将来の進路を決めて特定の学科を志望する受験生の数はそれほど多くはなく、大半は、漠然とした考えで入学してくるのが現状である。即ち、学科に入学してくる学生諸君の将来に対する考えのスペクトルは広いものとなっている。本学科のカリキュラムでは機械と電気・電子に関連した幅広い分野の科目が用意されているので、それらを学びながら、自身の特性を自覚し、将来の進路を決めることも可能となる。機械分野の技術者の道にも進めるし、電子分野、情報分野、メカトロニクス分野の技術者の道にも進めるということである。

(4) 本学科の広い分野の人材（教員）を活かしたダイナミックなカリキュラム

本学科には、「機械分野」を始めとして、「電気・電子」、「情報・コンピュータ」、「計測・制御」、「メカトロニクス」、「ロボットロニクス」の幅広い分野をカバーする豊富な人材が所属している。多彩な人材を活かして、幅の広い分野で社会のニーズに応える人材を育成する。

(5) モノづくりを体験できるカリキュラム

“モノづくり”の重視を謳ったカリキュラムは星の数ほど存在するが、問題は、如何に“モノづくり”を教えるかと言うことに尽きる。

<ポリシー> :

■ 新カリキュラムでは、従来の教え方；「基礎を教えてから、実際への応用の仕方を教える」と言う考えを捨て、「まず、“モノ”を見せて“実感”させ、疑問を持たせると同時に、設計方法や特性に興味を向けさせた後、詳しい仕組みや動作原理を教える」と言う教え方に切り替える。

■ 疑問を持たせる過程で思考を先に進める試行錯誤や逆問題の解法を学ばせる。

■ 本学の施設・システムを活かした「モノづくり」

本学科の新カリキュラムでは、3つのカテゴリーを通してモノづくりを体験させる事を目指している：

①新入生（1年生）

現行カリキュラムの「電子機械入門」では、新入生の“学びの動機付け”を目的に、本学科でこれから学ぶ内容や電子機械分野における社会のニーズについて、各教員やOBによるリレー形式の講義を行っている。しかし、講義だけでは新入生諸君に“モノづくり”を実感させることが困難であるという結論に達した。

上の反省に立って、現行の「電子機械入門」に代えて、「メカトロニクス基礎実習（仮称）」を開講する。

- ・ 前半（7回ほど）は、各教員によるメカトロニクス分野の紹介→勉学の動機付け
- ・ 後半部で、機械系実習と電気・電子系実習の両方を体験させる。

機械系実習→レゴの「マインドストローム」を用いた課題に挑戦させる。

電子系実習→完成した電子回路の動作を見せて、自らの知恵と試行錯誤で、製作に挑ませ、特性の評価をさせる。

②2年生

中学年生には講義に加えて、機械・電気分野の基礎事項（振動、共振、電圧波、位相差等）を可視化して理解させる。例えば、実験テーマの改良や新規テーマの導入を通して、授業では体験できない可視化して現象を体験させる。（現在検討中）

③3年生

（1）機械工学の中核をなす；①機械工作技術、②測定技術、③設計法は、コンピュータの活用により大きく変貌しつつある。最新の技術に触れさせ、将来、社会の中核となる技術者を育てるために、「電子機械実験1」、「電子機械実験2」のテーマを大幅に見直し、“高度なモノづくり教育”に対応できるようにする。

新規実験テーマの導入：3D造形加工センターに設置された①金属複合立体造形装置、②3次元測定機の原理を理解させると同時に3次元立体加工を体験させる。

（2）後期のプレゼミナールを通して、各研究室での“モノづくり”を自ら体験させる。

以上

【添付資料 2】

授業改善GP賞 推薦状

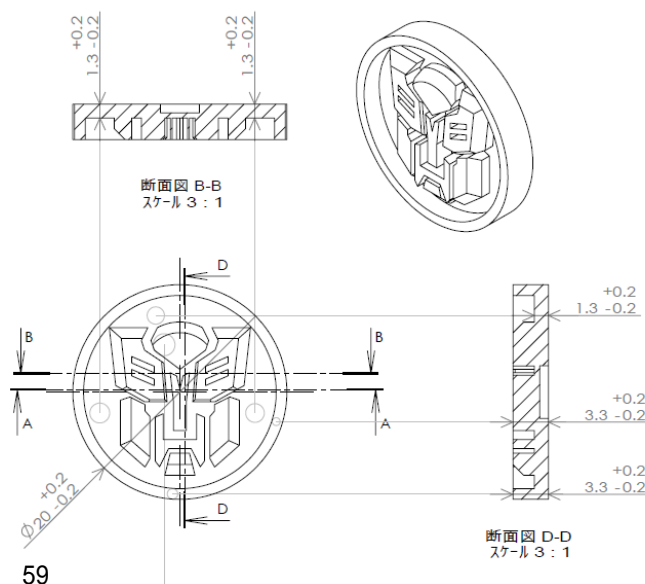
電子機械工学科 主任 岸岡 清

入部正継先生は、2013年度から電子機械工学科での必修科目である電子機械実験2のカリキュラム刷新に取り組んでおり、2014年度からはK号館内に設置された3D造形先端加工センターの設備を使用して、新テーマ「金属立体造型装置を使った部品製作とその形状精度測定」のカリキュラムを設計し、運用を始めている。

その内容は、(i) 設計：3D-CADソフト (Solid Works) を使用した部品設計、(ii) 製造：金属複合立体造型装置 (LUMEX Avance25) と高速・高性能ワイヤ放電加工機 (SL400G) を使用した機械加工、(iii) 測定：3次元測定機 (Crysta-Plus M544) を利用した定量測定、といった設計・製造・測定の一連の作業を経験するものである。(i)の設計では、学生独自でメダル状部品の形状をデザインし、3D-CADソフトを使用して設計・図面化を行う。さらに、出来上がった図面は教員により検図され、添削後にデータ形式で出図作業を行う。(ii)の製造では、金属複合立体造型による部品成形と、ワイヤ放電加工機での切削による製造の原理を学ぶ。(iii)の測定では、出来上がったメダル状部品の寸法を3次元測定器で測定し(i)で作図した図面を基に公差評価を行い、部品受け入れの可否を判断する検品作業を模した実習を行う。

このカリキュラムでは、カリキュラム開始時にこれから製作する部品のサンプルを学生に見せて出来上がりを想像させ、教員が学生に「ときめき」を与えるところから始まる。それを受けて(i)で学生が設計作業を「実践」し、ものをつくるための作業を体験する。そして(ii)で学生が実際に部品を製造する過程を見学し、自身が設計した部品が図面通りに出来上がるという「感動」とともに設計・製造のつながりを実感するようになっていく。最後に(iii)で製作した部品の寸法測定を行い、部品を製作するだけでなくその後どのように評価されるのかという製作後の「発展」を体験して終了する。この一連のカリキュラム内容は、企業における機械設計技術者の通常業務の模擬演習 (シミュレーション) となっており、学生の卒業後に非常に有用な経験となるものである。

以上のように、本カリキュラムは本学が目指す「4ステップの実学教育 (OECU)」の達成にマッチするものと確信し、ここに授業改善GP賞に推薦いたします。なお参考資料として、本カリキュラムで学生が設計・製造・測定した部品の図面と写真を以下に掲載します。



2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 6日
工学部 機械工学科
2014年度主任 森 幸治

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

機械工学科では、工学基礎知識の徹底教育、就職してすぐに役立つモノ作り教育および実務教育の充実を目標に掲げ、教育の充実化を図ってきた。2014年度においても、主要な科目に演習を設けて徹底した基礎力の教授に心掛けた。受講した学生に口頭でアンケートを行った結果、殆どの学生が演習科目の必要性を指摘しており、本学科の基礎科目教育は学生に高く評価されていると考える。

モノ作り教育については、機械工学入門と機械創成工学演習を開講し、多くの学生が創造力を発揮してモノ作りを行った。また、機械工学連携講座では企業から講師を招いて企業におけるモノ作りの紹介をしていただくとともに、複数回の工場見学を実施した。この科目は殆どの3年生が受講しており、学生の評判も良好であった。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

機械工学科ではすべての学生に機械工学の基礎をしっかりと教えるという方針から、演習科目の実施に力を入れている。各教員は演習内容が充実したものになるよう、常に努力を行っている。また、学科会議において学生の状況などを共有し、落ちこぼれる学生が出ないように努力してきた。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

各教員は、学生との相談を常時受け付けており、熱意を持って学生に対応してきた。特に留年を経験した学生に対して特定の教員が常に接触を持ち、履修面と生活面の指導を行ってきた。就職指導は卒研の指導教員と就職部の学科担当者が連携して指導を行った。その結果、2014年度も良好な就職状況を実現することができた。

4. 卒業研究指導について

機械工学科では各教員の専門分野が広範囲に渡っているため、学生の興味に応じて卒業研究分野を選択できる環境を整備している。したがって、自分のやりたい研究を扱う研究室が見当たらないという学生は殆どいない。また、卒業研究の行き詰り、あるいは何らかの理由から休みがちになった学生に対して熱意を持って連絡を取り、良い解決方法を提供するように努力してきた。2014年度は種々の深刻な問題を抱える学生が4年に多く在籍していたが、彼らの多くは教員の努力によって卒業あるいは卒業に目途を得ることができた。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

総合評価は、大学全体の中で比較的良好であった。授業面では、専門科目に比べて総合科目の評価が厳しいものになっており、当該センターと相談しながら授業改善を進めていきたい。また、学生が修得した知識や能力については、例年同様、国際的な視野の獲得が出来ていないという結果になった。特に異文化理解と国際交流の評価が低く、外国人との交流の無さがそのまま評価に現れていると考える。この問題は学科だけでは対応できない問題であり、大学全体で対応策を議論しなければならない。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

学科独自の教育として機械設計技術者試験とCAD利用技術者試験の対策講座を今年度も実施し、ほぼ例年と同数の合格者を出すことができた。ただし、機械設計技術者試験に関して参加希望者が以前よりも減少している。今後は学生のやる気を起こさせる努力を行う必要がある。

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

平成27年6月30日

工学部 基礎理工学科

平成26年度主任 山原 英男

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

- ・新カリキュラムの完成年度(4年目)にあたり、時間割の配置を工夫して学生が効果的に学べる環境づくりをさらにすすめると共に、学科教員の現状を踏まえながら科目担当者や開講形式などの工夫を行い、カリキュラムが円滑に運営されるように努めた。
- ・旧カリキュラムおよび新カリキュラムにおいて、4年間のフローチャートに基づき、各科目担当者間で連携しながらシラバスの作成を行い、学生が授業科目の流れを理解して履修ができるように努めた。
- ・各学年で、実験・ゼミを充実させ、きめ細かい指導ができるようにした。特に、2年生向けの「基礎理工学ゼミナール1」では、基礎的な数学と物理学について学生各自の習熟度と興味にあわせてクラスを編成し、基礎学力の強化と個性を伸ばす教育を試みた。
- ・3年生向け科目では、従来「応用サイエンス実験」として統合していたものを、数学系の「応用数学演習」と理科系の「応用サイエンス実験」に分けて、学生の志向性により合った教育を行った。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

- ・1年次向けの「キャリア入門」は、プレースメントテストや入試成績などによる習熟度に基づいて6クラスに分け、グループ担任が担当した。この科目の授業においては、学生の大学生活への適応と学力の向上を目標に、各グループの担当者による会議を開いて学生の状況を的確に把握しながら進めた。「基礎理工学入門」は、5グループに分け、担当5名が1週ずつ各グループを回る巡回ゼミを5週、全体講義を5週行い、残りは1教員が1グループを担当してプロジェクト学習ゼミを行った。
- ・2年次向けの「基礎理工学ゼミナール1」では、これまでの成績や履修状況に基づいて4クラスに分け、1年次および2年次前期までに学ぶ数学(基礎解析、線形代数、微分積分)、物理(力学、波動)から精選された話題について、少人数による問題演習をゼミナール形式で行った。成績の評価など担当者間で相談を行いながら運営した。特に、成績の芳しくない学生を少人数の基礎クラスとし、基礎学力をきちんとつけることを目指して、手厚く指導した。「基礎理工学ゼミ2」では、6グループに分けてプロジェクト学習に取り組み、発表会も行った(添付資料1参照)。自主的に考え調べること、およびグループで議論し理解を深めることについて、効果があったと考えられる。
- ・「基礎理工学特別講義1、2」等のリレー講義や、「応用サイエンス実験」等の専門的実験科目においては、担当者間の連絡を密にし、状況を把握しながら進めた。
- ・3年生向け科目において、数学系の応用数学演習では、中高レベルから大学1、2年までの証明問題で「数学の読み書き話す」をしっかりと学び、また、常微分方程式によるモデルの定式化、手計算で解く演習を行いながら、数学ソフト Mathematica による解法やシミュレーションの方法を学んだ。また理科系の「応用サイエンス実験」では、考えながら手を動かすパフォーマンス課題を導入した

実験を行った。物理学や化学を題材とした実験課題を設定し、学生が今までに学んだ知識や技術を総動員して実験課題にあたることで、学びを实らせる「実学」教育を実践している。キャリア系科目の改善のために、すでにE学科で用いられているものを参考に、「OECU-Nノート2014」を作成し、このノートをもとにして授業を行った(添付資料2参照)。次年度は、キャリア授業に精通している講師と共に「キャリア入門」をはじめキャリア授業をより充実させてゆく予定である。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

- ・学科会議では、欠席など気になる学生についての情報交換を行ってきた。必要なら担任・副担任などが学生に連絡を取るなど迅速に対応した。
- ・3月(新2、3年生)及び4月(新1年生)に、平成26年度に向けた学年別の学科ガイダンスを行い、カリキュラムの基本的な考え方を繰り返し説明するとともに、履修モデルや履修上の注意を知らせた(添付資料3参照)。また、基礎理工学科の1週間が分かり、教職科目との関連も分かるように、学科の時間割を作成して、学生に配布した。
- ・留年生や単位不足と思われる学生に対して、履修登録や就学上のアドバイスを適宜行った。
- ・教員免許取得希望の学生には、早い時期からサポートを行い、特に、数学の教職課程選考試験へ向けての勉強会・模擬試験及びその解説などを行った。最終的には、正規の教諭4名を初めとして、志望者全員が常勤講師として採用された。教職志望から就職希望に変更した者も多かったが、ほとんどは就職できた。
- ・企業への就職を望む学生に対しても、就職対策委員会を中心にきめ細かい指導を行い、適宜状況把握やアドバイスにつとめた。就職活動を早くから積極的に行っていた学生も多く、進路決定率の最終結果は昨年度を4ポイントほど上回った。2015年度も引き続き積極的な指導をする予定である。
- ・大学院進学者は2名であった。大学院進学を含む進路についても、入学当初から学生に働きかけを行うなど、進学志望者を増やしていく方策を考える必要がある。

4. 卒業研究指導について

- ・今年度5期目の4年次生を迎え、卒業研究が行われた。きめ細かな指導を行ない、学科内でも連携をとりながら卒業研究が円滑に進められた。また3年生のプレゼミ(卒研)配属は、新カリの新たな科目である「基礎理工学ゼミナール3」を活用する形で、配属方法を少し変更し、きめ細かな配属を目指した。
- ・本学科は数学・理科の教員養成を柱の一つとしており、教員志望の学生に対するサポートも毎年継続して行ってきた。平成26年度卒業生には教員志望の者が最終的に8名おり、全員教諭・常勤講師のいずれかに採用された。今後も志望学生には強いサポートを行っていく。一方、企業への就職を目指す学生に対しては、就職課と連携しながら進路やSPI対策、エントリーシート・面接などのアドバイスを行い就職活動の支援に努めたが、活動状況は学生によってばらつきが見られた。従来本学科は就活に関して出足が遅かったが、2013年度の3年生以降は積極的に就職活動を始める学生が増え、内定取得時期も早まっている。平成27年度に向けて、さらに多くの学生が積極的に3年次の早い時期から就職活動が行うよう、指導していく必要がある。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

・残念ながら多くの項目について、前年度より平均点のポイントが下がる結果であった。これは、獲得度の「3. どちらともいえない」を選択した学生が増えたためと思われるので、アンケート回答時における状況によるものかどうか注視したい。いずれにしても卒研生との日常的なコンタクトを密にして、これまで受けてきた教育や教育設備・事務サービスについての意見に対応してゆきたい。特に、「専門的な知識・技能の獲得」の低下は、「分かった気がしない、自信がない」などのあらわれとも思われ、より確実な理解を目指して指導していく必要がある。

・工学部全体との比較では、2013年度までは殆どの項目で同点以上のポイントを獲得していたが、多くの項目で下回る結果になった。項目[B]の教育設備・機器や事務サービスについても低いポイントになっていることから、大学生生活全般において消極的な傾向が読み取れる。単年度だけのものかどうか次年度の結果を注視したい。

・自由記述では、「わからない分野や苦手な分野に対して親身になって教えてくれる先生がいて勉強に取り組むことができた」や「先生方には教員採用試験の対策をしていただき本当に有り難うございました」など、きめ細かい指導が評価されているが、あいかわらず「授業中うるさくて集中することができなかった」などの意見もあり、より丁寧で集中しやすい授業を目指す必要がある。また、「情報伝達が不十分」、「掲示がわかりにくい」などに対しては、事務方との連携を含め改善してゆかなければならない。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

・西はりま天文台宿泊研修やエッグドロップコンテストなど、新入生に対して学科の特徴を生かした歓迎行事を行った。独創性やプレゼンテーション能力を向上させるよい機会として定着してきた。また2年生以上の学生も参加し、企画の運営・進行に携わるなど、先輩による新入生を歓迎する雰囲気も出てきている。

・オープンキャンパス、テクノフェアや体験授業等のアシスタントとして、学生ボランティアの参加を積極的に呼びかけた。参加した学生には、科学の楽しさを伝える技術をみがき、経験を深める機会となった。また、さまざまな企画を通じて、学年間の交流の場となるように努めた。これらの実績をもとに、27年度も在学生への教育的効果も重視して、オープンキャンパスやテクノフェアなどを行う予定である。

7. 添付資料

- 資料1:2014年度基礎理工学ゼミナール2成果発表会
- 資料2:OECU-Nノート2014-目次
- 資料3:学生向けガイダンス時の提示ファイル(3個)

以上

2014年度 基礎理工学ゼミナール2 成果発表会プログラム

日時 1月19日(月) 12:45~16:10 (集合時間:12:40)

場所 J515

A. 数学パズルプロジェクト(中村拓) 12:45~13:15

1. 「数当てゲーム(仮題)」 [REDACTED]
2. 「ビンゴをねらえ！」 [REDACTED]
3. 「推理パズル 捕まえろ」 [REDACTED]
4. 「ラストーン」 [REDACTED]
5. 「スプラウト」 [REDACTED]

B. 天気図プロジェクト(尾花) 13:16~13:49

1. 「天気図について(仮題)」 [REDACTED]
2. 「冬の天気図(仮題)」 [REDACTED]
3. 「梅雨の天気図(仮題)」 [REDACTED]
4. 「台風の天気図(仮題)」 [REDACTED]

C. 対称性の数学プロジェクト(木村) 13:50~14:20

1. 「平面における対称変換(仮題)」 [REDACTED]
2. 「平面におけるタイリング(仮題)」 [REDACTED]
3. 「多面体の対称性 その1(仮題)」 [REDACTED]
4. 「多面体の対称性 その2(仮題)」 [REDACTED]

休憩 14:20~14:30

D. マイクロスケール実験プロジェクト(溝井) 14:30~14:57

1. 「マイクロスケール実験について」 [REDACTED]
2. 「4qs シートについて」 [REDACTED]
3. 「水溶液の電気分解装置の説明」 [REDACTED]
4. 「水溶液の電気分解実験の例1」 [REDACTED]
5. 「水溶液の電気分解実験の例2」 [REDACTED]
6. 「水溶液の電気分解実験の例3」 [REDACTED]
7. 「液体の屈折率の測定1」 [REDACTED]
8. 「液体の屈折率の測定2」 [REDACTED]
9. 「液体の屈折率の測定3」 [REDACTED]

※墨消し部分は個人情報の為、非公開

E. 数学力向上プロジェクト (門田) 14:58~15:31

1. 「教員採用試験を用いた自己学力の分析と対策 その1 (仮題)」

■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■

2. 「教員採用試験を用いた自己学力の分析と対策 その2 (仮題)」

■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■

3. 「教員採用試験を用いた自己学力の分析と対策 その3 (仮題)」

■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■

F. 化学問題解決プロジェクト (中村敏) 15:32~16:08

1. 「地球温暖化 (仮題)」

■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■

2. 「オゾン層 (仮題)」

■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■

3. 「水質汚染 (仮題)」

■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■

4. 「淡水化 (仮題)」

■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■

5. 「燃料電池 (仮題)」

■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■ ■■■■■■■■■■

以上

※墨消し部分は個人情報の為、非公開

OECU-Nノート

目次

1. N学科で学ぶこと	P.1
2. 本学の歴史	P.2
3. ブランドイメージ	P.4
4. 本学の教育方針	P.6
5. 学科紹介	P.8
6. 学科専門分野の概要	P.10
7. カリキュラムマップ	P.11
8. 大学院への進学	P.12
9. キャリア入門（1年次前期）	P.13
10. キャリア概論（2年次前期）	P.35
11. キャリアデザイン演習（2年次後期）	P.41
12. キャリア設計（3年次前期）	P.47
13. 就職と教職免許	P.51
14. 教員紹介	P.69

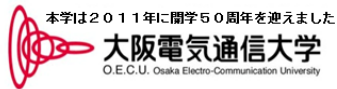
2014年度

工学部 基礎理工学科

科学の力をつかうなら
「根っこ」を知るのが肝心だ。

教育カリキュラムガイダンス

2014.04.09



<http://www.KisoRiko>



基礎理工学科のチカラとは....

物質の構造
(分子, 原子)や性質,
化学反応など

化学のチカラ

基礎科学のチカラ

数学のチカラ

解析(微分方程式), 幾何,
代数, 確率など

物理のチカラ

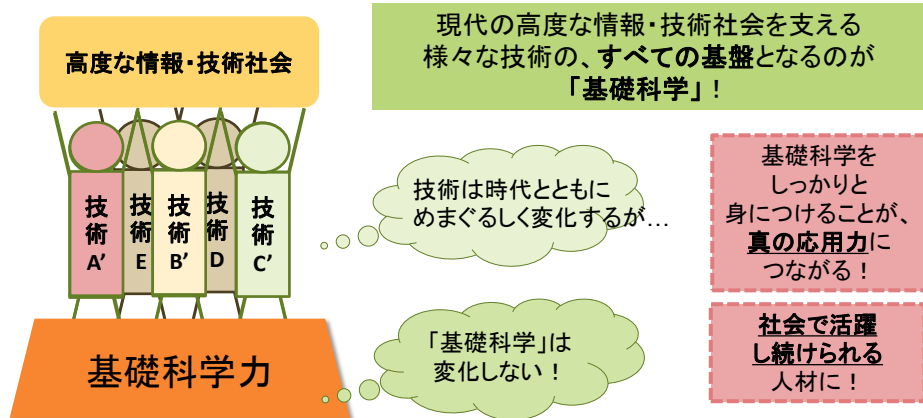
力学, 波動, 光,
電磁気, 熱など



基礎理工学科の教育理念

「数学・物理・化学系の基礎科学教育が 真の応用力を育てる」

という理念の下、社会の幅広いシーンで活躍する人材の育成を行っています。



基礎理工学科カリキュラムの特徴

入学者約70名に総勢18名のスタッフ
(サイエンス(数学)系教員9名・サイエンス(物理・化学)系教員9名)

・「遊学一致」=エデュテイメント

→ 「楽しく」学ぶことを大切にします

・徹底的に基礎力を身につけて磨きます

→ 少人数ゼミナールで基礎力をアップ

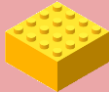
→ 習熟度別のクラスで無理なく学べる

→ 演習を中心にした授業科目

・科学の知識に基づいた論理的思考力・独創性

→ 豊富な実験科目・プロジェクト学習





グループ担任制度

グループ分け、担任、
副担任の発表は
4月24日(木) 2限

少人数グループに担任と副担任

(1年次から3年前期まで)

大学での学習と生活を支援し、学生として自立できる力を育てます。グループ担任と副担任は以下のことをします。

- 「学生生活の記録」の保管，更新.
- 個人面談などで，学習と生活についてのアドバイス
- 前期，後期の終了時に成績表の交付
- 「キャリア入門」を担当



基礎理工学科の4年間の流れ

4年

卒業研究による総まとめ

数学・物理・化学の様々なテーマから選び、深める

教職

3年

数学志向

物理志向

化学志向

工学の基盤としての高度な専門的知識と実践力

2年

徐々に専門的な「科学のチカラ」を学ぶ

豊富な実験・演習、少人数ゼミ

1年

大学で学ぶための「基礎力」を固める

数学・物理・化学，英語，情報，少人数ゼミ



基礎理工学科 進級・卒業要件

基礎理工学科 カリキュラム・フローチャート

		1年次		2年次		3年次		4年次	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合科目	人文・社会・自然								
	外国語								
	健康・スポーツ								
	キャリア形成								
基礎専門科目	数学								
	理科基礎								
	情報								
	工学入門								
専門科目	数学系								
	物理系								
	化学系								
	実験・演習								
	情報・計測・シミュレーション								
	融合・その他								

卒業要件単位数
128単位
以上
「卒業研究」を
含む



卒業

履修モデルの例

履修モデル：数学志向型Ⅱ

学年	学期	科目	単位数
1	前期	数学Ⅰ	3
1	後期	数学Ⅱ	3
2	前期	数学Ⅲ	3
2	後期	数学Ⅳ	3
3	前期	数学Ⅴ	3
3	後期	数学Ⅵ	3
4	前期	卒業研究	12
4	後期	卒業研究	12

履修モデル：物理志向型Ⅱ

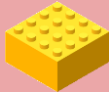
学年	学期	科目	単位数
1	前期	物理Ⅰ	3
1	後期	物理Ⅱ	3
2	前期	物理Ⅲ	3
2	後期	物理Ⅳ	3
3	前期	物理Ⅴ	3
3	後期	物理Ⅵ	3
4	前期	卒業研究	12
4	後期	卒業研究	12

履修モデル：化学志向型Ⅱ

学年	学期	科目	単位数
1	前期	化学Ⅰ	3
1	後期	化学Ⅱ	3
2	前期	化学Ⅲ	3
2	後期	化学Ⅳ	3
3	前期	化学Ⅴ	3
3	後期	化学Ⅵ	3
4	前期	卒業研究	12
4	後期	卒業研究	12

色分け

- 赤色：卒業要件単位
- 黄色：卒業要件単位以外
- 緑色：履修モデル科目
- 青色：履修モデル以外



GPA (Grade Point Average) について

GPA=単位あたりの「成績の平均値」
学業成績の順位、奨学金の選考、学業優秀賞、・・・などに利用

$$\text{GPA} = \frac{\text{科目の取得ポイントの総和}}{\text{履修登録単位数の総和(不合格・未受験を含む)}}$$

$$\text{累積GPA} = \frac{\text{各学期で得た科目の取得ポイントの総合計}}{\text{各学期で履修登録した単位数の総合計}}$$

Grade Point

100-90点: 5	89-80点: 4	79-70点: 3
69-60点: 2	59-50点: 1	29-0点: 0
未受験: 0		

*「合格・不合格」(G・D評価)の科目は除外する。

やみくもに履修登録せずに、計画的に科目を履修すること



基礎理工学科1年次のカリキュラムマップ

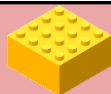
	前 期	後 期
総合	基礎英語1 英語リーディング1 総合科目	基礎英語2 英語リーディング2 総合科目
数学	基礎解析/基礎微積分1/微分積分1・演習 線型代数1	基礎微積分1/基礎微積分2/微分積分2・演習 線型代数2 複素数の数学
工学/物理	物理学1・演習 工学基礎実験	物理学2 一般力学 物理学・実験 基礎電気回路
化学/生物学	化学1 生物学	化学2
情報	コンピュータリテラシー1	コンピュータリテラシー2
キャリア	キャリア入門	基礎理工学入門

出席点 + (演習点) + 試験 = 評価 → 単位取得

1年次前期は最も大切な時期。
授業には必ず出席して、基礎力をじっくり固めましょう。

具体的な履修計画

- 履修登録の手引き
- 学修必携



履修登録について

履修登録の手引き(p3)参照

Webで履修登録する！

4月10日(木)

N学科 9:00~10:30 場所:J708

注:履修制限
1年間で最大50単位
履修可能(特例あり)

4月15日(火) 履修科目登録票 交付

4月16日(水)9:30~4月18日(金)10:00

履修登録修正日

(J号館の演習室自由解放時に各自で行う。)

4月23日(水) 履修科目登録票(結果) 交付

平成26年度入学者 履修モデル

工学部 基礎理工学科
1年次(平成23年度からの教育課程)

必修 **推奨** **推奨**

英語と体育:「履修登録の手引き」p.22~25

1N

	前 期				
	月	火	水	木	金
	科目名 担当教 教室	科目名 担当教 教室	科目名 担当教 教室	科目名 担当教 教室	科目名 担当教 教室
1	9:00 ~ 10:30 基礎数学1 (山田隆弘) J515 基礎数学2 (山田隆弘) J515 基礎数学3 (山田隆弘) J515	体育1 (西村純一) J307	「物理学1・演習」 NU合併 (原田 勲) J514 (小笠原久) J515 (林内真希) J312	「スポーツ実習1」NF合併 グラウンド(原田隆弘) ボウリング(原田隆弘) (1回目の授業はF管部小ホールで行う)	基礎英語1 (中東浩美) E252 (増田純一) J501
2	10:40 ~ 12:10	「物理学の世界」(坂本和昭) E252 「物理学の世界」(坂本和昭) J409 「物理学の世界」(中島孝敏) J407 「物理学の世界」(王 少偉) J413 「物理学の世界」(西村純一) J312		キャリア入門 中野敏夫、大野寛人、高代武史 中野敏夫、高代武史、増田純一 J403、J414、J501、 J502、J503、Y325	
3	13:00 14:00 ~ 14:50	「スポーツ実習2」NF合併 グラウンド(原田隆弘) ボウリング(原田隆弘) (1回目の授業はF管部小ホールで行う)	「生物1」NP合併 (高田直三) J510	化学1 (高田成敏) J408	コンピュータリテラシー1 (下飯健行) J708 (講)
4	14:40 ~ 16:10		「英語リーディング1」NU合併 (上野由紀) J504 (松原智子) J703a (増田純一) J503 (原田純一) J502		O工学基礎実習 (安江孝次、清水康夫) Y管部5階
5	16:20 ~ 17:50	「ドイツ語1」EJLN合併 (原田直三) J401 (高橋実典) J502	「フランス語2」EJLN合併 (原田直三) J503 (山口 勲) J502	「英文法セミナー-a」HJN合併 (松田正貴) J404 【平成26年度入学生のみ】	「韓国語2」EJLN合併 (原 崇典) J308
		「中国語1」EJLN合併 (王 少偉) J409	「韓国語1」EJLN合併 (原 崇典) J308	「中国語2」EJLN合併 (王 少偉) J413	
前期 集中授業					
備考 ①:必修科目 ():科目担当者 a, X, ②:クラス J305:教室番号 (高):再履修科目 (印):追加リキユラム					
クラス 表示 a...:ABGDEFクラス b...:GHIJKLクラス					

平成26年度入学者 履修モデル

工学部 基礎理工学科
1年次(平成23年度からの教育課程)

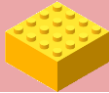
必修 **推奨** **推奨**

英語と体育:「履修登録の手引き」p.22~25

★余力のある者が履修すべき科目

1N

	後 期				
	月	火	水	木	金
	科目名 担当教 教室	科目名 担当教 教室	科目名 担当教 教室	科目名 担当教 教室	科目名 担当教 教室
1	9:00 ~ 10:30 基礎数学1 (山田隆弘) J515 基礎数学2 (山田隆弘) J515 基礎数学3 (山田隆弘) J515	体育2 (西村純一) J307		基礎英語2 (林内真希) J307	基礎英語2 (中東浩美) E252 (増田純一) J502
2	10:40 ~ 12:10	「物理学の世界」(坂本和昭) E252 「物理学の世界」(坂本和昭) J409 「物理学の世界」(中島孝敏) J407 「物理学の世界」(王 少偉) J413 「物理学の世界」(西村純一) J312		「物理学2」NU合併 (松田由紀) Y325 (林内真希) J409 (増田純一) J503	基礎理工学入門 (原田直三、木村和広、高代武史) 原田直三、高代武史 J501、J502、J503 J504、J402
3	13:00 14:00 ~ 14:50	「スポーツ実習3」NF合併 グラウンド(原田隆弘) ボウリング(原田隆弘) ボウリング(原田隆弘) (1回目の授業はF管部小ホールで行う)	「基礎数学の数学」 (高橋実典) J514	O物理学・実験 (原田直三、清水康夫) の授業は、中野敏夫 Y管部4階	コンピュータリテラシー2 (吉野英史) J704a (講)
4	14:40 ~ 16:10		「英語リーディング2」 NU合併 (上野由紀) J504 (松原智子) J703a (増田純一) J503 (原田純一) J502		
5	16:20 ~ 17:50	「ドイツ語3」EJLN合併 (原田直三) J401 (高橋実典) J502	「フランス語3」EJLN合併 (原田直三) J503 (山口 勲) J502	「英文法セミナー-b」 EJLN合併 (松田正貴) J503 【平成26年度入学生のみ】	※後期履修登録時のみ履修可
後期 集中授業					
備考 ①:必修科目 ():科目担当者 a, X, ②:クラス J305:教室番号 (高):再履修科目 (印):追加リキユラム					
クラス 表示 a...:ABGDEFクラス b...:GHIJKLクラス					



1年次の重要な科目

★総合科目キャリア形成群

前期： キャリア入門

後期： 基礎理工学入門

初回
4月17日2限は
J409教室に
全員集合！

宿泊研修
(4月11,12日)

**この2つの科目は必ず履修すること
必修に準ずる！
ホームルームに相当する！**

(学修必携 p194, 195参照)

★基礎専門科目

数学・物理科目は指定されたクラスへ履修登録すること！！

数学分野： 基礎解析・演習

微分積分1・演習， 微分積分2・演習

基礎微積分1・演習， 基礎微積分2・演習

線形代数1, 2

理科分野： 物理学1・演習， 物理学2， 物理学・実験

化学1, 2

生物学

必修！

情報分野： コンピュータリテラシー1, 2

必修！

工学入門： 工学基礎実験， 基礎電気回路

(学修必携 p204, 205参照)

★専門科目（後期に開講）

数学分野：複素数の数学

理科分野：一般力学

総合科目、基礎専門科目、専門科目などから必要な単位数をそれぞれ修得し、卒業へと向かう。（学修必携 p56, 57参照）

★教職課程について（1年次で履修できるもの）

- ・ 法律で定められた科目：
くらしと日本国憲法
スポーツ実習1, 2
コンピュータリテラシー1, 2

必修！

- ・ 教職に関する科目：
発達心理学
現代社会と青年の心理
人間形成と教育

注意：
「くらしと日本国憲法」と同じ時限

（学修必携 p119, 347参照）

★教職課程について（1年次で履修できるもの）

・教科に関する科目：

数学：基礎解析，（基礎）微積1,2，
線形1,2，
複素数の数学

理科：物理学1,2，化学1,2，
生物学，
物理学・実験

理科の免許
には必修

（学修必携 p131, 156, 157参照）

履修登録の手引き・学修必携

**を熟読して、明日までに自分の
時間割をきっちりと作ること！**

2014年度2年次

基礎理工学科の
講義
カリキュラム

基礎理工学科は
8年目を迎えます。

「根っこ」を知るのが肝心だ。

大阪電気通信大学
基礎理工学科
Department of Engineering Science
<http://www.kisariko.jp/>

2014年3月25日13:00~@J407

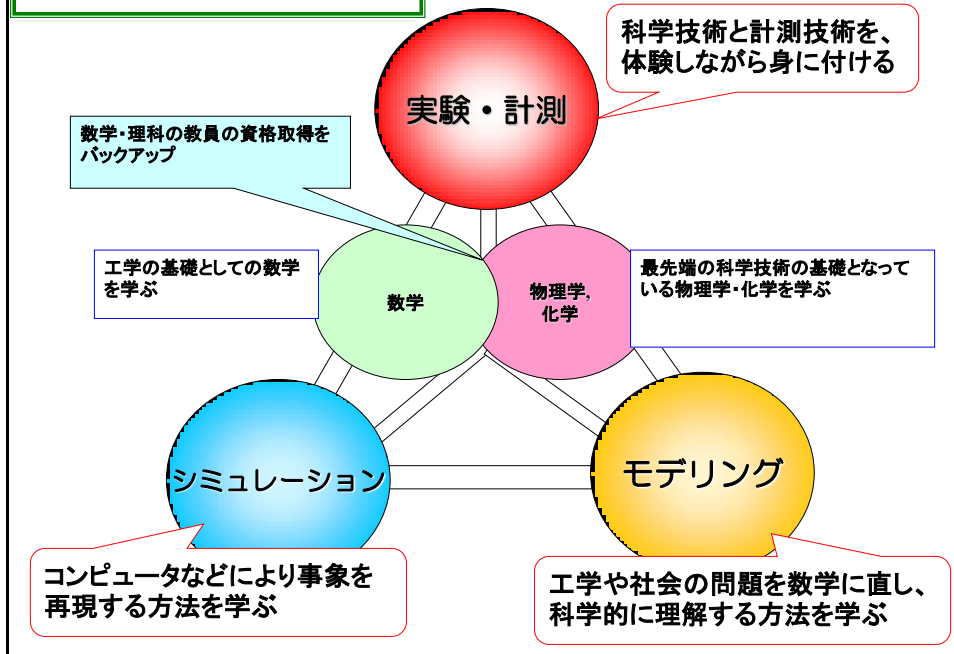
大阪電気通信大学/工学部
基礎理工学科

目次

新2年次のためのガイダンス

1. カリキュラムの特徴
2. 基礎理工学科の4年間
3. 進級・卒業要件
4. GPA(Grade Point Average)
5. 基礎理工学科の2年次カリキュラム
6. 志向型コースと履修モデル
数学/物理/化学/融合科学、教員(数学・理科)
7. 履修登録オリエンテーション

基礎理工学科の特徴



基礎理工学科教育カリキュラムの特徴

定員60名に総勢18名のスタッフ
(サイエンス(数学)系教員9名・サイエンス(物理・化学)系教員9名)

・「遊学一致」=エデュテイメント

→ 「楽しく」学ぶことを大切にします

・徹底的に基礎力を身につけて磨きます

→ 少人数ゼミナールで基礎力をアップ

→ 習熟度別のクラスで無理なく学べる

→ 演習を中心にした講義科目

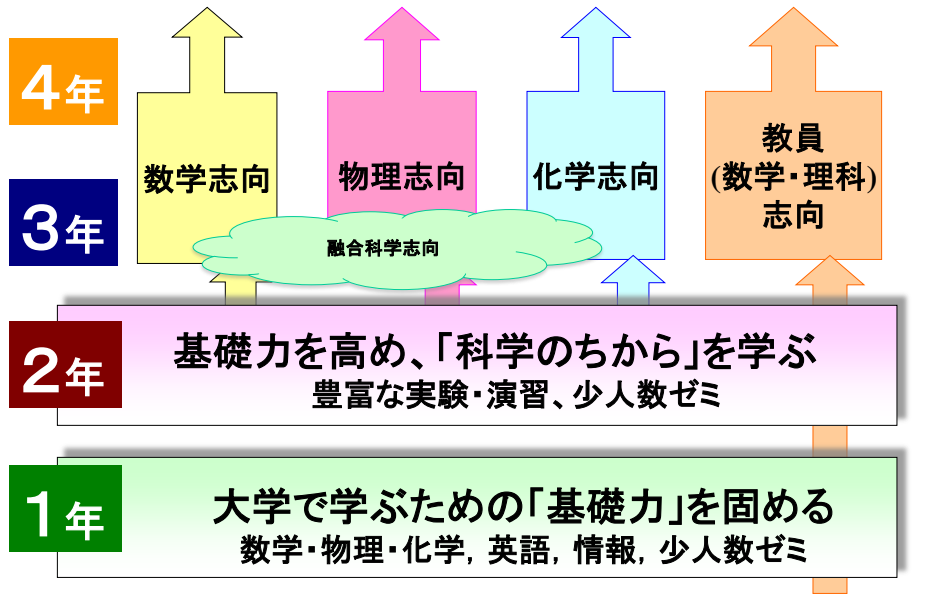
・科学の知識に基づいた論理的思考力・独創性

→ 豊富な実験科目・プロジェクト学習

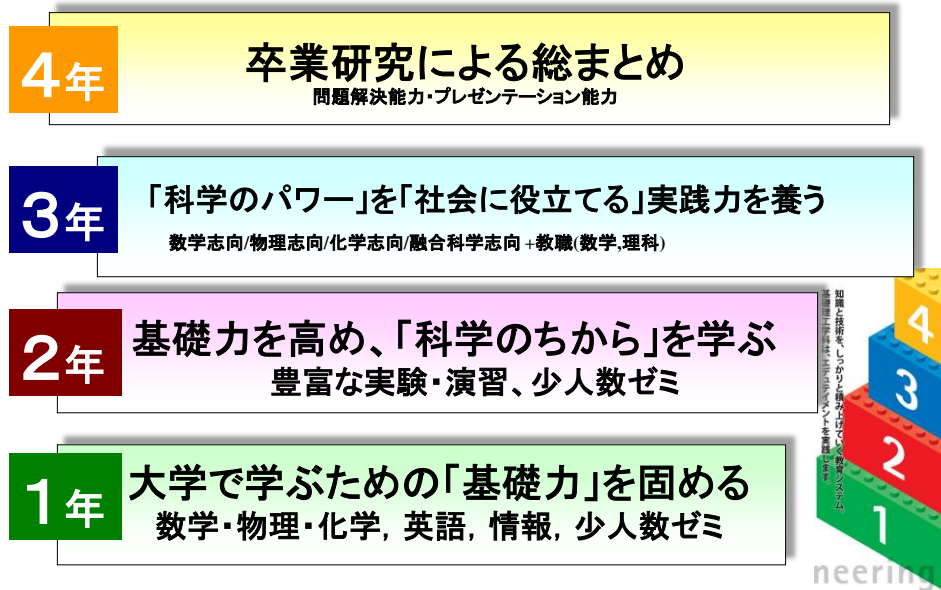


neering

基礎理工学科の流れ



基礎理工学科の4年間



基礎理工学科の進級・卒業要件

基礎理工学科 カリキュラム・フローチャート

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合科目	人文・社会・自然							
	外国語							
	健康・スポーツ							
	キャリア形成							
基礎専門科目	数学							
	理科基礎							
	情報							
	工学入門							
専門科目	数学系							
	物理系							
	化学系							
	実験・演習							
	情報・計測・シミュレーション							
	融合・その他							

卒業要件単位数
128単位
以上
「卒業研究」を
含む

卒業

1年 +25単位 → 2年 【合計25単位】
2年 +35単位 → 3年 【合計60単位】
3年 +40単位 → 4年 【合計100単位】

必要単位数が増える+履修の難度も上がる

GPA (Grade Point Average) について

GPA=単位あたりの「成績の平均値」

30単位必要

学業成績の順位、奨学金の選考、**学業優秀賞**、…などに利用

$$\text{GPA} = \frac{\text{科目の取得ポイントの総和}}{\text{履修登録単位数の総和(不合格・未受験を含む)}}$$

$$\text{累積GPA} = \frac{\text{各学期で得た科目の取得ポイントの総合計}}{\text{各学期で履修登録した単位数の総合計}}$$

Grade Point

100-90点: 5 89-80点: 4 79-70点: 3
69-60点: 2 59-50点: 1 49-40点: 0
未受験: 0

*「合格・不合格」(G・D評価)の科目は除外する。

やみくもに履修登録せずに、計画的に科目を履修すること

再履修して合格すれば、ポイントを再計算します。従って、累積GPAが上がります！
特に理由がない限りは再履修して単位取得することが望ましいです。

基礎理工学科 1 年次のカリキュラム

	前 期	後 期
総合	基礎英語1 英語リーディング1 総合科目	基礎英語2 英語リーディング2 総合科目
数学	基礎解析/基礎微積分1/微分積分1・演習 線型代数1	基礎微積分1/基礎微積分2/微分積分2・演習 線型代数2 複素数の数学
工学/物理	物理学1・演習 工学基礎実験	物理学2 物理学・実験 基礎電気回路
化学/生物学	化学1 生物学	化学2
情報	コンピュータリテラシー1	コンピュータリテラシー2
キャリア	キャリア入門	基礎理工学入門

1 年次には大切な基礎科目が配当されてました。
出席状況や基礎力など、自分の状況を振り返ってみましょう。

基礎理工学科 2 年次のカリキュラム

	前 期	後 期
数学	基礎微積分2・演習 離散数学 微分方程式	確率・統計 現代数学の基礎 ベクトル解析 電磁気学
物理	電気回路・演習 現代物理学入門 シミュレーション物理学	熱学 量子物理・化学
化学	化学と生活 無機化学	有機化学 物理化学
実験・演習・プロジェクト学習	プログラミング基礎演習 基礎サイエンス実験1 化学基礎実験 基礎理工学ゼミナール1	基礎サイエンス実験2 化学実験 基礎理工学ゼミナール2
総合	英語リーディング3 健康・スポーツ科学 英語コミュニ1 総合科目	英語リーディング4 英語コミュニ2 総合科目
キャリア	キャリア概論	キャリアデザイン演習
	特別ゼミナール1	特別ゼミナール2

2 年次は専門を学んでいくためのステップアップの時期。

2年次開講される科目について(その1)

■キャリア科目

「キャリア概論」(木曜4限)

「キャリアデザイン演習」(金曜1限、5限)

■特別ゼミナール1(2年前期)

■特別ゼミナール2(2年後期)

大学入学後に取得した資格を2単位認定。[資格を取得後に履修登録]
他学科の公開講義を受講して合格すると2単位認定。[時間割参照]

■特別選択科目

他学科の科目を履修できる。(10単位まで)

選択必修科目について

理科教職を志望するか否かにかかわらず

- 数学系・物理系志向の学生は
「基礎サイエンス実験1・2」を履修すること。
- 化学志向の学生は
「基礎化学実験・化学実験」を履修すること。

履修を希望する科目をこのガイダンス時間内に申告してください。
履修登録時には、今日申告した科目で履修登録してください。変更は不可です。
今回申告しなかった学生の受講科目は、以前のアンケートに基づいて判断します。

選択科目の履修ガイド

- 1年次の必修科目・コア科目の単位が取れていない！
→ 必ず再履修して2年生のうちに単位をそろえること。(特に留年生で飛び級を目指す者は要注意！)
- アドバンス科目の履修はよく考えて！
→ 3・4年生になってからでも遅くはない。

年度始めのオリエンテーションなど

※ 必ず参加する。

本日[3月25日(火)]

「学修必携」「履修登録の手引き」(時間割)の交付

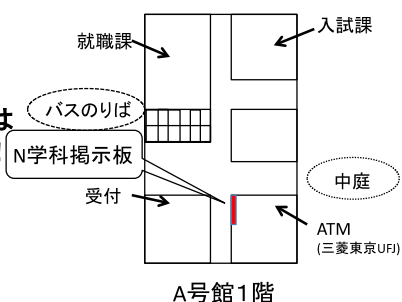
初回履修登録

3月31日 9:30～4月2日 17:30まで

学生必携で年間スケジュールの確認。

4月11日(金) 前期授業開始

基礎サイエンス実験・基礎化学実験はこの日に欠席すると履修できません！



おわり

もうすぐ新年度が始まります...
準備はいかがですか？

2年次開講される科目について(その2)

■特別選択科目

他学科の科目を履修できる。(10単位まで)

■教職生への注意

履修登録時の注意:「英語コミュニケーション1・2(英会話)」等。

履修モデル(別紙)を参考にして下さい。

2014年度3年次

基礎理工学科の 講義 カリキュラム

基礎理工学科は
2014年度3年次を迎えます。

わたしたちの未来につながる科学のハブに
じっくり、きっちり学びます。



2014年3月25日 10:40~ @J407

大阪電気通信大学/工学部
基礎理工学科

目次

新3年次のためのガイダンス

1. 進級・卒業要件の確認
2. 基礎理工学科の4年間とコース分け
数学、物理、化学、融合型 [教職(数学)、教職(理科)]
3. 3年次カリキュラム[時間割]と講義科目から
 - ・(必)「基礎理工学ゼミナール3」
 - ・(必)「プレゼミナール」(→4年次卒業研究への準備)
 - ・(必)「応用数学演習」or「応用サイエンス実験」
 - ・(必)「キャリア設計」(プレインターンシップ)→「インターンシップ」
 - ・「基礎理工学特別講義1」
 - ・「基礎理工学特別講義2」
 - ・「特別ゼミナール1」,「特別ゼミナール2」
4. 履修登録オリエンテーション

基礎理工学科の進級・卒業要件

基礎理工学科 カリキュラム・フローチャート

	1年次		2年次		3年次		4年次	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合科目	人文・社会・自然							
	外国語							
	健康・スポーツ							
	キャリア形成							
基礎専門科目	数学							
	理科基礎							
	情報							
	工学入門							
専門科目	数学系							
	物理系							
	化学系							
	実験・演習							
	情報・計測・シミュレーション							
	融合・その他							

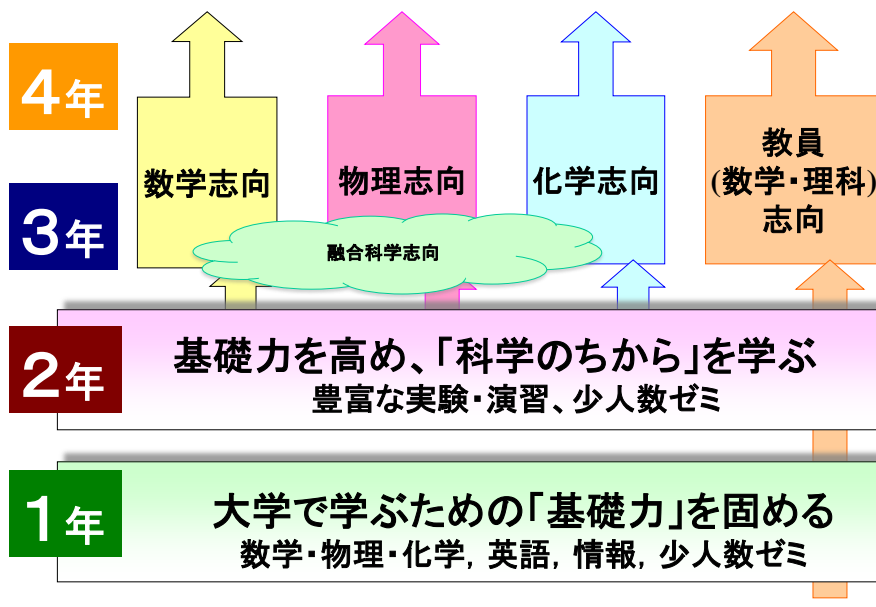
卒業要件単位数
128単位
以上
「卒業研究」を
含む

卒業

1年 +25単位 → 2年 【合計25単位】
2年 +35単位 → 3年 【合計60単位】
3年 +40単位 → 4年 【合計100単位】

必要単位数が増える+履修の難度も上がる

基礎理工学科の流れ



基礎理工学科の4年間

4年

卒業研究による総まとめ

問題解決能力・プレゼンテーション能力

3年

「科学のパワー」を「社会に役立てる」実践力を養う

数学志向/物理志向/化学志向/融合科学志向+教職(数学,理科)

2年

基礎力を高め、「科学のちから」を学ぶ

豊富な実験・演習、少人数ゼミ

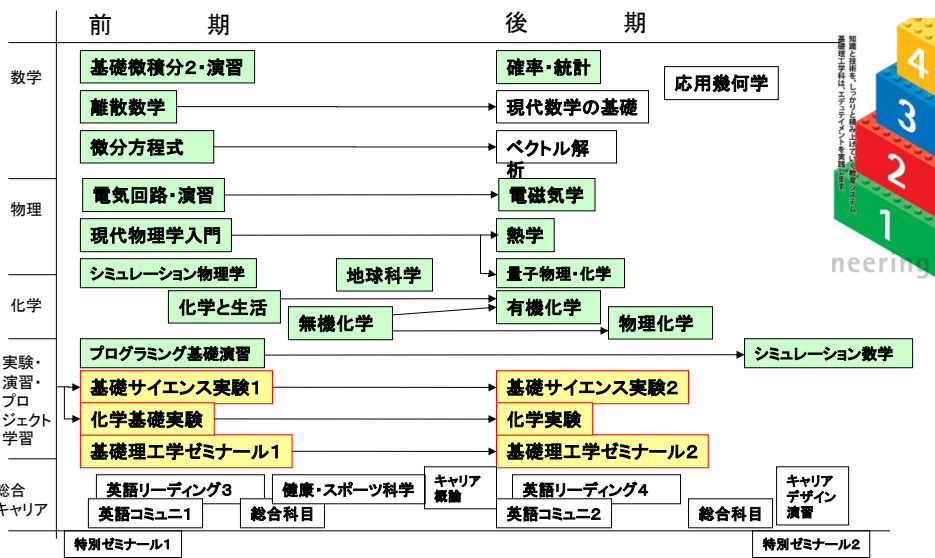
1年

大学で学ぶための「基礎力」を固める

数学・物理・化学, 英語, 情報, 少人数ゼミ

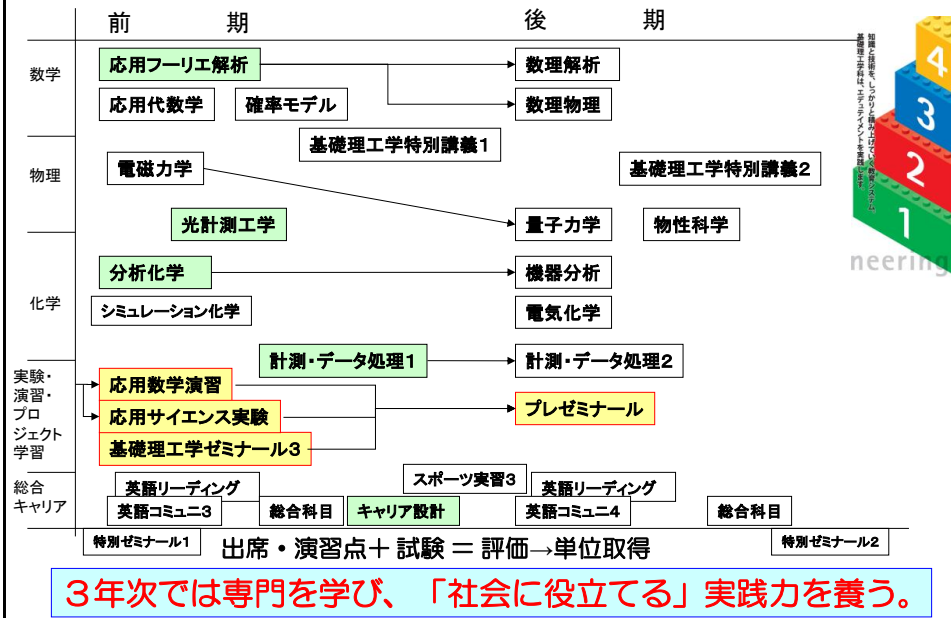


基礎理工学科2年次のカリキュラム



2年次は専門を学んでいくためのステップアップの時期でした。
自分を振り返ってみましょう！

基礎理工学科3年次のカリキュラム



GPA (Grade Point Average) について

GPA=単位あたりの「成績の平均値」 **3Nでは20単位以上が必要**
 学業成績の順位、奨学金の選考、**学業優秀賞**、…などに利用

$$\text{GPA} = \frac{\text{科目の取得ポイントの総和}}{\text{履修登録単位数の総和(不合格・未受験を含む)}}$$

$$\text{累積GPA} = \frac{\text{各学期で得た科目の取得ポイントの総合計}}{\text{各学期で履修登録した単位数の総合計}}$$

Grade Point

100-90点: 5	89-80点: 4	79-70点: 3
69-60点: 2	59-50点: 1	29-0点: 0
未受験: 0		

*「合格・不合格」(G・D評価)の科目は除外する。

やみくもに履修登録せずに、計画的に科目を履修すること

**再履修して合格すれば、ポイントを再計算します。従って、累積GPAが上がります！
 特に理由がない限りは再履修して単位取得することが望ましいです。**

学業優秀賞について

3年生の学業優秀賞は、
20単位(GD評価含む)修得した者の中から、
GPAなどを参考に選考する。
(教職科目専用は除く)

3年次 前・後期開講される科目について

■基礎理工学ゼミナール3[前期・月5](必修)

リレー講義、就職ガイダンス、プレゼミ・卒研配属

■プレゼミナール[後期・月5](必修:4年次進級の要件)

4年次卒業研究の準備と就職活動に向けて、卒業研究の担当教員のゼミナールに所属する。(2014年度に4年次進級を目指すものは必ず履修すること。)

サイエンス(数学):

浅倉、木村、中村拓、西村、萬代、柳田、門田

※4年次卒業研究は、プレゼミの研究室で行う。

サイエンス(物理・化学):

大野、尾花、中村敏、原田、林内、福田、溝井、安江

※ゼミが行われる時間帯は、所属したゼミで調整・変更されるが、
後期月曜5限は必ず確保しておくこと。

3年次 開講される科目について

■キャリア設計[前期・月2](必修に準じる)3年生のみ履修可

社会人として身につけておきたい対人コミュニケーションや文書の書き方等を学ぶ。また、実際の就職選考において会社が大切にしている観点を知り、自分のよさや考えを自信をもって伝えられるよう練習する。

「挨拶、言葉づかいと敬語」「エントリーシートの書き方」「面接対策」...

企業への就職だけでなく、教員を目指すためにも必要な科目です。

インターンシップ参加希望者は必ず単位を取ること。

■基礎理工学特別講義1・2 (選択)

学内外から講師を招き、多彩な話題による講義をリレー形式で行います。

■特別ゼミナール1(2年前期)

■特別ゼミナール2(2年後期)

大学入学後に取得した資格を2単位認定。[資格を取得後に履修登録]
他学科の公開講義を受講して合格すると2単位認定。[時間割参照]

3年次 開講される科目について

■教職生への注意

履修登録時の注意あり:「英語コミュニケーション3・4(英会話)」など。

☆理科教職生:前期「化学基礎実験」履修制限あり。後期「化学実験」か、どちらを履修するか、教員に相談してください。

このあと、教職生へのガイダンスを行いますのでこのまま教室に残っておいてください。

■特別選択科目

他学科の科目を履修できる。(10単位まで)

選択必修科目について

- 数学系志向の学生は「応用数学演習」を履修すること。
- 理科系(物理・化学)志向の学生は「応用サイエンス実験」を履修すること。

履修を希望する科目をこのガイダンス時間内に申告してください。
履修登録時には、今日申告した科目で履修登録してください。変更は不可です。
今回申告しなかった学生の受講科目は、以前のアンケートに基づいて判断します。

選択科目の履修ガイド

- 1・2年次の必修科目・コア科目の単位が
取れていない！
→ 必ず再履修して3年生のうちに単位をそろえること。
- アドバンス科目の履修はよく考えて！
→ 4年生になってからでも遅くはない。

年度始めのオリエンテーションなど

※ 必ず参加するようにしてください。

本日[3月25日(火)]

新3年次生対象ガイダンス「履修および就職に向けて」

「学修必携」「履修登録の手引」(時間割)の交付

初回履修登録

3月31日 9:30～4月2日 17:30まで

学生必携で年間スケジュールの確認。

4月11日(金) 前期授業開始

おわり

もうすぐ新年度が始まります...
準備はいかがですか？

H22年度以前の入学生(旧カリ)対応 (新カリ)代替科目について

■「微分積分1・演習」:「微分積分1・演習」or「**基礎微積分1・演習**」

推奨

■「微分積分2・演習」,「多変数の微積分」:

推奨

「微分積分2・演習」or「**基礎微積分2・演習**」

■「力学1・演習」:「**物理学1・演習**」or 後期「(再)力学1・演習」

■「力学2」⇒「一般力学」で代替

■「基礎物理学」⇒「物理学2」で代替

■「基礎ゼミナール1」⇒「キャリア入門」で代替

■「基礎理工学入門」⇒「基礎理工学入門」(後期)で代替

■「数理モデリング」⇒2N 前期「**微分方程式**」で代替

■「統計モデル入門」⇒2N 後期「**確率・統計**」で代替

他学科不可

■「離散モデル入門」⇒「離散数学」で代替

■「電磁気学・演習」⇒2N「**電磁気学**」+3N「**電磁力学**」で代替

他学科不可

■「数理モデリングゼミナール」・「科学計測ゼミナール」⇒3N前期「**基礎理工学ゼミナール3**」で代替

* 代替科目無し:「基礎ゼミナール2」,「物理学と先端技術」,「数学と工学」,
「電子回路」,「コンピュータ・プレゼンテーション演習」,「微分積分3」

(他の科目についても、「学修必携」にて確認すること。)

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 6日
情報通信工学部 情報工学科
2014年度主任 小森 政嗣

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

「情報」は、「物質」や「エネルギー」と同じく現代社会の中で大変重要な役割を果たしている。「情報工学」とは「情報」を扱うための知識と技術を体系付けた学問分野である。情報工学科のカリキュラムの骨子は以下の通りである。

- (1) 1・2年次においては、数学・システム論・プログラミングを中心とする基礎科目を学修し、工学全体にわたる横断的・基盤的な知識と技術を身に付ける。
- (2) 3・4年次においては、情報基盤技術系・情報メディア系・人間科学系の多様な分野にまたがる専門科目を学修し、情報工学の豊かな応用力を体得するとともに、キャリアの土台形成を促す。
- (3) 4年次においては、卒業研究の履修により、実践的な問題解決能力、および知的生産活動に不可欠な口頭発表・文章構成の能力を身に付ける。

以上の取り組みを通して、多様化する社会からのニーズに対して柔軟にキャリア形成していく能力を総合的に体得させることを目標としている。具体的には、卒業後も先進的な技術に対して自律的学習を継続できるような応用力、情報収集能力、問題分析能力を獲得させることを目指している。本学科はいくつかの実験・演習科目等を除いて大半が選択科目である「完全自由選択制」を採用しており、学生は自分の興味に従って履修計画を立てることができる点を高く評価している。シラバスにおいては、上記の骨子の下で科目ごとに履修目標を明確に位置付けるとともに、科目間の連携を明確化するように心掛け、学生が履修計画を立てやすいように努めている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

授業内容は科目ごとに適宜見直している。特に初年次教育においては、授業内容を極度に難しくあるいは易くなり過ぎないように工夫し、成績分布を適度な範囲に収めるとともに、学生の意欲や達成感を損なわないように努めている。また、学生が自分の理解度を把握し勉強する動機付けとなることを目的として、小テストや中間考査を実施している科目も多い。また、知識を実学に結び付ける学生の能力を強化するため、講義科目において学科指定ノートPCを積極的に活用した課題（プログラミング、データ処理、フリーソフトウェアを用いたシステム設計など）を導入する事例も多く見られる。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

昨年度から、OECU MyPage の利用を促すためのガイダンスの時間を各学年で設けたことにより、OECU MyPage の活用が徐々に学生に浸透し、科目担当教員と学生のコミュニケーションの円滑化を促したといえる。

1～3年生の履修や就職関係の指導は、前期開始時に教務委員や就職対策委員などの担当教員が学年ごとにガイダンスとして行っているほか、ほぼ全員が履修する実験・演習科目の一部の時間を利用して適宜行っている。その他は教育・生活相談も含め、成績配布時などに各グループ担任が個別に学生と

面談したり、出席状況の悪い学生には個別に電話連絡したりするなどの指導を行っている。また、近年は学業不振などの理由で休学を希望する学生が増加傾向にあるが、学生課とグループ担任、主任が中心となり各科目担当者らと連携しながら、学業を続けられるよう丁寧な指導を行っている。

4年生の指導は、指導教員が卒業研究と並行して日常的に実施している。就職活動の長期化のため、学生が卒業研究に割く労力と時間が従来に比べ減る傾向にある。そこで各指導教員が履歴書やエントリーシートの書き方、面接の心構えなど就職活動に関する指導を行い、それが卒業研究への取り組みの促進につながるよう努力している。また、就職対策委員が就職課と連携しながら積極的に学生の就職活動を支援し、このような取り組みが近年の本学科の就職状況改善に繋がっているといえる。

4. 卒業研究指導について

卒業研究においては、実践的な問題解決能力、および知的生産活動に不可欠な口頭発表・文章構成の能力が身に付くように指導を心掛けている。各研究室においては、指導教員が4年生に研究の進捗状況を週単位などで定期的に報告させつつ適切な助言を与えるほか、研究発表の訓練の場を前期・後期の終わりに中間発表会などの形で設けている。また、学科全体の発表会の予稿や論文の添削指導も複数回にわたって綿密に実施している。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

本学科のカリキュラムの核であるCプログラミング、情報工学実験、卒業研究については評価が高く、特に卒業研究では学力だけでなく思考力、コミュニケーション能力、協調性など社会人としての基礎的な能力が身に付いたという意見が多かった。また、本学科のカリキュラムが展開する幅広い専門科目を学んだことを評価する声も多数あった。これらの意見は本学科の目指すカリキュラムや教育方法が実効的に機能していることを示している。

一方、履修や成績などに関する連絡方法の多さや複雑さに対する不満も多く挙げられた。現在、学生に対する連絡の方法は、2箇所の掲示板、OECU MyPage、OECU メールなどに分かれており、これを統合する希望が多かった。長期的な視点に立って、情報伝達の方法を改善していく必要はあると考えられる。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

学業不振・学習意欲低下などの問題の多くが、学生が入学前に思い描いていた情報工学のイメージと実際の情報工学のミスマッチに起因することがこれまでにわかっている。このようなミスマッチを解消するため、初年次科目の担当教員が頻繁に集まり、授業の様子や進捗などについて緊密に連携を取りながら対処した。

7. 添付資料(あれば)

特になし。

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015 年 7 月 6 日
情報通信工学部 通信工学科
2014 年度主任 柴垣 佳明

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

通信工学科では、「情報通信社会を支える幅広い分野で活躍できる技術者を育成すること」を教育目標として、学科カリキュラムポリシーに基づいて教育・学習指導を行ってきた。

学科カリキュラムの位置づけの特徴としては、通信工学の基礎となる「通信方式・ネットワーク・プログラミング」の 3 要素をバランスよく教えることと、主な 2 分野として「ハードウェア技術(Hコース)とソフトウェア技術(Sコース)」を扱う 2 コースを設けていることである。さらに、これらの系統立った分かりやすいカリキュラムマップを作成し、総合科目との関連や位置づけを明確にした上で、学生たちに科目履修の的確な指針を与えている。

また、シラバスでは、多くの授業科目で他科目との関連性や講義内容が将来の専門科目でどのように活かされるのか等を記述し、その他に到達目標や授業前後における毎回の予習・復習を含む内容を示している。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

(1) 教育改善や授業点検

平成 26 年度の授業アンケートの総合評価は、前期が 7.0、後期が 7.7 ポイントであった。しかし、今年度からアンケートの取り方が変更され、学生からの回答率が大幅に低下したため、正確な授業満足度データが得られなかった。今年度の反省を踏まえ、次年度は授業の中でアンケートを取る時間を設ける等、回答率の改善に努めたい。

また、前年度には一部の非常勤講師の授業の満足度の低い科目があったため、担当教員や学生の双方からヒアリングを行いとともに、担当教員には授業改善を促した。

(2) 成績評価(平均点、成績分布、合格率など)

前年度に引き続き、1 年次の基礎専門科目である「基礎電磁気学演習 1・2」、「基礎電気回路演習 1・2」、「プログラミング基礎演習」に対して学習効果測定を行った。基礎電磁気学演習 1・2 の合格率は、前年度とほぼ同じ約 80%であり、基礎電気回路演習 1・2 とプログラミング演習の合格率はそれぞれ 91% と 83%で、両科目ともに前年度よりも 10%近く向上した。

また、2 年次以降ではカリキュラムマップを利用し、通信方式・ネットワーク・コンピュータ科目(通信工学 3 要素)の各系統でバランスよく取得しているか成績配布時に調査し、個別指導を行った。2 年次では、3 年次への進級率は 78%で前年度とそれほど変わらないが、すでに 90 単位以上を取得し進級する学生が全体の 4 割を占めていた。これは、進級や就職に対する学生の意識が増加し、3 年次の授業で余裕を持った分を資格勉強の時間に費やしたいと考える学生が増えていることを意味している。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

(1) 履修指導

1 年生には、入学直後の学科オリエンテーションやその後のグループ担当との面談の際に、通信工学科で必要な基礎専門科目やキャリア授業（情報通信工学概論、通信キャリア入門）の履修を指導した。2～4 年生には、OECU MyPage によるポートフォリオ入力が電子化されたことにより、「カリキュラムマップ」による取得科目一覧が図示によつて的確に可視化できるようになり、例えば 1 年次や 2 年次の基幹となる基礎専門科目や専門科目の重要性を具体的に学生に認識させることが出来るようになった。つまり、これらの数学や電気回路、あるいは電磁気等の基礎的な科目が十分理解できていないと、それに続く 2 年次と 3 年次の専門科目の単位が著しく取得しにくくなるのが、いわば論より証拠で一目瞭然に示せるようになったことの意義は大きい。

(2) 教育・生活相談

各学年を 10 名程度のグループに分け、各グループの担当教員が修学指導、生活全般の指導を行った。また、各教員は週 1 コマをオフィスアワーに充て、これまで思い切って訪ねてくるような勇気のある特定の学生だけでなく、多くの学生に直接指導できる機会が増えたと言えるが、それでもまだまだ積極的に訪ねてくる学生は少なく、さらにオフィスアワーのアナウンス等に努めるべきと思われる。

(3) 就職指導

1～3 年生のキャリア授業を通して、将来働くイメージ作りや就職活動に向けての心構えなどについて教育を行った。特に 3 年次には、「キャリア設計」の授業において情報通信業界で活躍する卒業生 2 名や企業の採用担当者を招いた講演会を実施し、社会で求められる人材像について講義した。また、3 年次のインターンを希望する学生が 14 名であり、就職委員に加えて、各学生の担任教員やプリゼминаールの教員も就職指導に大きく関わった。

就職指導に関しては、学科教員と就職部が連携をして学生指導に当たった結果、進路決定率は 91%に達し、前年度の 76%から大幅に上回った。

4. 卒業研究指導について

平成 26 年度も前年度に引き続き、2 月末の卒業判定時において、内容や提出期限等のチェックが厳しく行われたが、幸い普段の出席状況や提出期限等で問題とされる学生は存在しなかった。ただ、適切なテーマの選定や普段の取り組み方、あるいは発表での態度や方法（メモを読み上げるだけ）等で注意された学生はいたが、概ね判定は良好であった。また、前年度は卒業研究を途中で挫折する学生が 8 名いたが、今年度は 4 名に減少した。さらに各研究室できめ細やかな個別指導を行っていききたい。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

平成 26 年度(2014 年度)の「卒業生満足度調査」では、[C]総合評価においては 7.3 ポイントと前年度の 6.7 ポイントをトータルではかなり上回る結果を得ている。そして、[A]の知識能力および[B]の教育設備・機器等の評価ではほぼすべての項目で前年度を上回っていた。その中でも目に付くのが「3.物事を論理的に考える力」、「8.コミュニケーション能力」、「9.リーダーシップ」が前年度よりも 0.4～0.5 ポイント増

加しており、キャリア教育や卒業研究を通して、これらの能力が身に付いたものと考えられ、進路決定率の大幅アップに繋がっている。

[B]の「6.卒業研究やゼミにより指導」が4点台を示しており、このことは同調査の個々のコメントでも現にいくつか見られるように、学生は教員からの卒研等の個別指導には、大きな満足を感じてくれる様である。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブ・ラーニング、離学者対策など）など

(1) 資格取得の支援

授業や資格支援講座を通して、通信技術者として必要とされる以下の資格取得をサポートしてきた。これまでに、学科教員によって、「無線従事者」、「電気工事士」、「電気通信の工事担任者」資格講座を放課後に開講すること等で、今年度は以下のような資格取得の実績が得られ、特に無線分野の指導の効果が大きく現れた結果が得られた。

- 第一級・二級陸上無線技術士 7名（前年度:4名）
- 第一級陸上特殊無線技士(卒業時の試験免除による) 44名（前年度: 30名）
- 電気通信の工事担任者 2名（前年度: 実績なし）
- 第二種電気工事士 3名（前年度: 6名）

(2) アクティブ・ラーニングへの取り組み

通信工学科の多くの授業では、講義で学んだ内容を授業時間内に小テストやレポート等で報告させ、学生の授業への理解や知識が定着するように工夫を行っている。また、キャリア授業等を通して、コミュニケーションスキル、グループディスカッション・プレゼンテーション力を高められるよう指導を行ってきた。その結果は、これまでに報告を行ったとおり、単位取得率、進路決定率、卒業生満足度調査結果の向上に繋がっている。

(3) 離学者対策

1・2年生で欠席が目立つ学生に対しては、グループ担任から該当学生あるいは保護者に連絡を取り、授業への出席を促すとともに欠席理由について聞き取りを行った。これらの欠席者の状況については、学科のみならず学生課とも情報を共有し、離学者対策に取り組んだ。その結果、離学者率は前年度の8.6%から6.0%まで改善した。ただし、依然として1年留年生の離学者が多いため、さらに学生への細やかなケアが必要である。

7. 添付資料(あれば)

特になし。

以上

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 8日
金融経済学部 資産運用学科
2014年度主任 松尾 邦子

1. **教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて**
 - 2013年度より大幅な変更を加えた新カリキュラムも定着し、コミュニケーション能力の強化や大学生生活への順応に重きを置いた新入生向け授業も一定の成果を上げ始めた。
 - ソーシャルスキル、マインドマップの導入など、コミュニケーション能力涵養を目指して導入した科目は、学生も強い関心をもって活発に授業に参加した。
 - 1、2年生を対象とした基礎ゼミの導入は、学生の実生活・学修指導面で所期の成果を上げた。また、C言語ゼミも新設し、情報学習に強い興味をもつ学生の育成にも注力した。
 - 中国人留学生につき、金融時事演習Ⅰ・Ⅱの新設等、日本語でニュースを読む習慣をつけるよう指導、更に専門ゼミにおいて基本的に日本人学生と均等に混ぜ合わせる形で配属、イクォール・フットイングを志向すると同時に、日本語能力に不安をもつ学生に対しては個別にきめ細やかに対応した。その結果、個人間のばらつきはあるものの語学面、知識面で総じて日本語の授業に対応できるレベルに到達した学生が見受けられた。
 - Bloomberg 端末の活用につき、熱心にデータ検索、分析を行う学生が増加、上下級生間でも知識・ノウハウの共有が進んでいる。1年生からID、パスワードを取得し、データ収集・分析に抵抗無く馴染み、取得データをもとに論理的思考が可能になるよう指導した。上級生が下級生に Bloomberg の活用方法を指導するシステムも定着しつつある。
 - 金融界を代表するビッグデータである Bloomberg を活用した教育、ビッグデータ実践フォーラムなどを通じ、学生の間にも情報とその分析の重要性が浸透しつつある。
2. **教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について**
 - 定期試験前後のきめ細かい指導により、「落ちこぼれ」学生の発生を極力防止、一方でモラルハザードとならないよう、適宜複線的な課題の提出をさせるなどの工夫を続けた。
 - 毎週行う学科会議で学生の授業出席状況、期末試験への対応状況等の情報交換を活発に行い、ゼミ担当教員を軸に教員間の情報共有を進めた
3. **学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について**
 - 1年生から基本的に全員がゼミを履修、生活指導、就職指導は原則ゼミ単位で行うことで、多様な学生の状況に対応した。併せて学科会議で教務、就職委員が軸となって進捗状況のチェック、情報交換を行い、資格取得、就職活動についても高い成果を維持することができた。
 - ゼミ担当教員は出席状況の思わしくない学生については本人・保護者と連絡をとり、学生の漂流をできるだけ防ぐ対応を続けた。
4. **卒業研究指導について**
 - 専門ゼミでは個人ごとにテーマを選ばせ、成果物を残す指導を行っている。また、ゼミによってはグループで外部プロジェクト・コンテストや株式投資分析コンテスト等に応募するなどした。その結果、対外的にも高い評価を得る学生が生まれた。
5. **卒業・修了生満足度調査結果について**
 - 平均的に昨年度と同レベルの数値となっている。
 - 大学全体の数値との比較でも、ほぼ同等レベルの数値となっている。
 - 「他人と協調して物事に取り組む力」について満足度が高いのは、2013年度開始新カリキュラムから強化されたコミュニケーション能力の向上を目指すプログラムに対する評価であると捉える。
 - 1年生からのゼミ制によるきめ細かい指導・教育により、「卒業研究やゼミによる指導」に対する満足度が高いと理解する。
 - 知識・能力・設備・機器については比較的満足度が高い傾向が続いている。
6. **その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など**
 - 上記 1-4 参照
7. **添付資料(あれば) 特になし**

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年6月25日
医療福祉工学部医療福祉工学科
2014年度主任 新川拓也

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標は、カリキュラム・ポリシーの通り、臨床医工学・生命情報・健康福祉の分野について教授研究し、医療・福祉機器の開発や医療現場において活躍できるエキスパートの育成するために理工学と医工学の基礎を十分に学習させることにある。具体的には、医用工学系についてME1種および2種実力検定試験、臨床工学技士国家試験に合格させる。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

- 1) 専門科目の授業改善プランを提示し、学習環境改善を図った。
- 2) 1, 2 学年に対して計 5 回(うち、1 回は予備試験)統一問題による実力試験を行い、成績優秀者を表彰して学生のモチベーション向上を図った。その結果、基礎工学分野ではのべ 91 名、医用工学分野ではのべ 91 名、基礎医学分野ではのべ 178 名の 60%以上得点者を出し、昨年度と比較して大幅に増加した。これは、e-learning の学習時間も大きく関連しており、その後の学習過程にも影響するものと考えている。この結果は、後の卒業研究室配属等に利用する予定である。
- 3) 第 2 種 ME 技術実力検定試験合格者は 3 年次 7 名、4 年次 9 名であった。
- 4) 臨床工学技士国家試験合格率は 95.5%で、42 名の合格者を輩出した。これは、開設以来最大の合格者数となる。なお、合格率は学科開設以来全国平均を上回っている。
- 5) 第 1 種 ME 技術実力検定試験 1 名が合格した(4 年生)。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

昨年度以来、教務委員および臨床実習担当教員を中心とした履修指導につとめ、「履修の取りこぼし」防止を行い、学生自身が国家試験受験資格に必要な科目の履修状況が確認できるような資料を用いて学生自らが学修状態を把握、管理できるように務めている。また、本学科独自で展開している学生証を用いた来学確認システムにより、離学に至るプロセスを解析できるデータを収集した。このシステムは、連続 5 日間の欠席を抽出して、該当学生をグループ担任に報告することで要注意学生の早期ピックアップを可能にし、事務局との密な連携によって離学率減少のツールとして成立する。来学しない学生は減少傾向に有り、現在のところ運用も順調で、今後も活用する予定である。

4. 卒業研究指導について

本学科では、研究室配属の前に「キャリアデザイン」の科目を設け、卒業研究や技術系社会人として必要な基本的スキルを身につけさせている。これによって、視野を広くさせ、学生自身の将来について選択肢を多くさせる工夫を行っている。卒業研究については、3 年生前期における研究室配属→プレゼミによる事前指導→中間報告→研究概要提出および口頭発表会→論文提出のプロセスを経る。内容は、生

体医工学, 福祉工学各関連分野における調査系, 実験系の研究である. 2014 年度は学科会議で進行状況のチェックを行い, スムーズな運営に務めた. 本学科所属教員の研究室における卒業研究不合格者は4名であった. これらの学生については休学中あるいは担当教員との話し合いで研究活動休止中の者であり, 今後もケアを怠らないよう務める.

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

専門知識・能力獲得度について, 従来と比較して同様の結果を得た. 教養や知識, 技能の教授は概ね成功している. 依然, 知識を利用して応用する能力, リーダーシップに関しては課題が多いが, 学生それぞれの個性を見極めて対応する必要があると考えている. 国際的な視野の養成について, それを可能にする環境の構築を引き続き学科で検討する.

授業科目および教育設備において, 専門教育のおよび卒業研究の満足度は極めて高かった. 自由記述においても印象深いこととして専任教員がそれぞれ良い評価を受けており, 学生との信頼関係が構築できたと考えている. 一方で, 総合科目については, 課題が残る結果となっている. 学生の将来に結び付けられるよう, カリキュラムの再構成が必要であると考え.

四條畷キャンパス全体の問題と考えられるが, いわゆるアメニティ施設, 行事が寝屋川キャンパスと比較して乏しい. 学生の不満を解消させるハードウェアの整備が必要であると考えられる.

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

技術者としてのドキュメンテーション基礎能力を教授するために, 「アカデミックライティング」を開講しており, 図表の記述, 参考文献の提示などの基本的な知識を低学年のおりから徹底させる試みを行ない, 卒業論文の執筆で完成させる予定である.

「医療治療機器学実習」では, 学生自身が興味のある部分を中心に事前に調査(グループワーク)し, その結果をプレゼンすることで積極性を獲得させるとともに, 外部講師がその結果から学生の知識レベル情報を得て, 実習に役立てる, 教える側, 教わる側に双方メリットが有るアクティブラーニングを行っている. 学生諸君自ら興味がある部分に積極的に関わることで, 授業への意欲が飛躍的に向上する結果となり, 極めて有効であった. また, 「ヒト型ロボット製作実習」では, 金属加工から部品を作成し, 学生の集団が自ら発案した形態の人型ロボットを構築させるなど, 実習, 演習科目群は学生の自主性を重んじるよう心がけている.

さらに, 学生中心で心電図読図の勉強会を開催し, 高学年の学生が低学年に教える指導を行っている. これについては, 病院において即戦力として機能する能力であると期待されている. 同時に, 先輩・後輩の関係を学ぶ人間形成にも役立っている. 企業、病院に就職した卒業生が実習補助員として授業に参加し, 学生(後輩)に授業内容はもちろん, 社会人としての心構えや実体験なども伝え, 学生から大変好評を得ている.

7. 添付資料

特になし.

2014(平成 26)年度

学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 3日

医療福祉工学部 理学療法学科

2014年度主任 小田 邦彦

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

カリキュラムポリシーを明確に提示し、日ごろから徹底して周知に努め、国家試験合格レベルを目標とし各科目構成も準拠していることも、学生は理解できていると思われる。シラバスについても、ポリシーの基本的概念を一貫して

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

最終目標である理学療法士国家試験の成績は昨年とほぼ同様の結果となっており、全国平均の合格率は大幅に上回っており、一貫して、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに準拠した到達目標は達成できていると考える。しかし、さらに、合格率の向上につとめ、全員合格を目標としたい。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

本学科の場合、オフィスアワーズばかりでなく、保護者を交えた面談を頻繁におこなっており、教育相談や、生活相談は、問題が起これば、早めの対応に努めている。今後も、この面談指導を重点的に行っていきたい。

4. 卒業研究指導について

本学科は、2回生前半から研究室配属をおこない、上級学年の卒業研究の進捗を見ながら進級しており、円滑な導入が行われており、上級学年の学生からのピアの指導も自然におこなわれている。今後もこの方針は継続していきたい。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

過去の総合評価は8.4程度で比較的高かったが、今年度に関しては、7.7と低下している。教育改善において、評価の低下している項目は、幅広い分野にわたる教養、国際的な視野、(専門分野)(異文化理解)(国際交流)などである。IT機器の充実度、講義室の環境、TAによる指導なども低下している。これらについては、教室の運用などで他学科との協力も必要となるが、より良い環境を提供する努力をしたい。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

実習に向けた臨床的基本技術の修得については、従来から、客観的臨床能力評価試験(以下、OSCE)を積極的に導入しており、多くの教員の目で、学生の技術をチェックする体制が整った。今後も、この領域の改善を目指して、評価方法、提示される模擬患者のタイプなど改善に努力する。

7. 添付資料(あれば)

特にありません。

2014(平成26)年度
学科教育点検・評価(FD)報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年 6月 30日
医療福祉工学部 健康スポーツ科学科
2014年度主任 大石 利光

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

健康スポーツ科学科では科学的な視点を持ち、基礎医学やスポーツ医学の知識を備え、スポーツ実践能力及び情報処理技術を駆使して健康指導や健康機器開発のできる人材を育成し、実社会で必要とされる能力を身につけること、また勉強のみならず、豊かな人間性を育み個性を大切にしながら協調性や対人コミュニケーション能力を有し、礼儀を重んじる良識ある社会人として送り出すという事を教育目標としている。それらを達成するために健康スポーツ科学科の教育課程は、「総合科目」「基礎専門科目」「専門科目」に大別され、1年生から4年生まで系統的に学習できるように編成をしている。

2012年度から始まったカリキュラムでは、基礎学力のばらつきを解消するため、学力差の大きい数学に関し、学力に応じて数学入門・演習、基礎解析、線形代数に分かれてクラスを振り分け指導するようになっている。数学入門・演習では学科教員が4年間の学習で必要でかつ高校時代に身につけられなかった基礎的な分野の学力を強化し、基礎専門科目、専門科目に配当されている他の科目で必要になる数学力を涵養するように指導を行った。同時に基礎生体数学を必修として科学的視点でデータ解析ができるような学力の養成を行った。また、生理学や解剖学を必修化しこの分野でも必要な知識を全員がもれなく学ぶような指導を行った。更に昨年度より実施している2年生を対象とした生体計測学実習(必修)、全教員が健康スポーツ科学を学ぶために必要な生体計測技術について個別のテーマを設定し指導した。

具体的には、全員共通のガイダンス後、10人の小グループに分かれて実験、レポート作成、評価を各教員が実施する事で、きめ細かい指導ができ、基礎を統計的に学習する機会となった。さらにスポーツや健康指導の実技においても、自らが参加するだけでなくスポーツ指導実習や健康運動指導実技等の指導者として実技力や指導力を涵養する科目も充実させた。これらの科目もほとんどが実習形式をとっておりアクティブラーニングとして機能している。同時にキャリア教育を導入し、全教員のリレー講義を行い社会に巣立っていくための教育を充実させた。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

2014年度も2013年度に実施して好評を得た学科説明会および教員との懇談会を開催し、学生および父兄の入学前の不安を払拭した。例年通り1年次において配当されている「健康スポーツ科学と医学概論」の中で、各教員が自身の経験や将来についての話をして、学習意欲を持たせるようにした。各学年でも学力レベルを考慮した授業内容展開を科目担当者に依頼するとともに専任教員担当科目では学生のレベルを確認しながら中学・高校での学習内容についても指導を行った。

また1年生の大学生活の不安を払拭するため、新入生歓迎会を実施し、友達作りの促進や、教員と学生間の距離を縮める事を目的に懇親会を実施した。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

1年生から3年生前期まではグループ担任が個別面談や成績配布を行い、生活面、学習面の指導を行った。オフィスアワーも継続的に実施し、学生が気軽に相談できるような仕組みを継続的に機能させている。さらに部活動、教職指導、卒業研究指導、その他日常生活の各場面において、授業やオフィスアワーなどの制約なしに学生と積極的に触れ合うことで学生の悩みや進路の希望などを受け止め綿密な指導につなげている。

就職指導については昨年同様就職課と連携し情報を共有しながら学生の進路指導に務めた。具体的には以下の3つの施策を中心に進路指導を行った。

- ① 研究室単位で個別に各学生の状況確認と進路指導(エントリーシートの添削、面接の個別指導、内定先の把握)を行い、その情報を学科会議で共有した。
- ② 学内での企業説明会、学外での合同企業説明会、教員採用に関する説明会への積極的な動員を

行った。

- ③ 公務員、教職希望の学生で試験に不合格となった学生に対して企業の情報を提供し就職活動への再チャレンジを奨励した。

以上の結果、就職率で見るとは93%であったが学科の特徴として教職希望者が多く、卒業と同時に正規採用は1名で他の人は正規採用ではない事から進路決定率で見ると、78,3%の結果となった。

4. 卒業研究指導について

卒業研究指導は3年生前期修了時点の7月に研究室配属を行った。この配属により4年次から本格的に取り組む卒業研究テーマの選定及び研究に関する調査・学習を行う。

4年次卒業研究は基本的に研究室毎に研究が進められ、その進捗は指導教員が個別に確認する。その情報は学科会議で報告され学科全体で共有が図られる。そして、中間報告会→卒業研究発表会・口頭試問を経て卒業論文の提出→審査と進み最終的に卒業論文の可否で単位認定となる。

本年度も2014年12月に中間発表、2015年2月に卒業研究発表会・口頭試問が開催された。結果研究室毎、学生毎に到達目標や、研究内容、レベルにばらつきがあるものの、研究室ごとの特徴が発揮され、全体としてスポーツ動作や「健康」をテーマに取り組む研究が増え、学科の特徴に沿った研究発表となった。尚最終評価で1名進捗不備で口頭試問が不合格となったが他は全員合格となった。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

2013年度と比較すると、[A]本学での大学生活を通してあなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか、については0.1ポイント悪化している。中身を分析すると昨年度より大きく下がった部分はないが全体の項目で若干評価を落としている。なかでも学科が目指す豊かな人間性を育み個性を大切にしながら協調性や対人コミュニケーション能力を有しコミュニケーション能力が4.1から3.8に下がっている。この事については、その原因の深堀と共に、この評価を真摯に受け止め、コミュニケーション能力向上に努めていく。

[B]本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してくださいとの問に対して、専門科目および卒業研究やゼミにおける指導が3.6-4.1と高い点数となっている。これは教員と学生の距離を縮めきめ細やかな指導を行ってきた結果であると考え。一方、A項同様、英語以外の外国語、留学制度などで比較的低い点が付けられたので、来年度の新カリキュラムでの方針決定の一助とする。こちらも平均が3.6と昨年の3.6と同じ評価を継続している。

[C]総合評価では、6.8と学部平均よりは低い点数となってしまったが、昨年比で0.4ポイント低下している。これは[A],[B]の評価と比較しても大きく低下しているので、学科内でも本件取り上げ、検討を重ね全体の教育方針(カリキュラム)も含め検討を行い次年度のカリキュラムに反映すると共に、更に学生目線に立ったきめ細やかな指導を継続していき改善に努めていく。

6. その他、特記事項(学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など)など

スポーツクラブでの現場実習

例年同様、健康運動指導実習を3年生22名が、大阪府下のコナミススポーツクラブ9店舗で現場実習を実施した。学生には毎日レポートを記入させ、学生の評価は各店舗の責任者が記入し回収した。学生の反応は挨拶の大切さなど、直接お客様と接することで良い勉強になったとのコメントが多くあり、現場で学ぶ技術的要素以外にも得る部分が多くあることが確認された。

今後は資格取得者数の増加などを推進しこの実習に参加する学生を更に増やす努力を行う。

キャリア教育

キャリア教育の一環として、全教員によるキャリア指導を行った。特に健康スポーツ科学科は大学教員以外の職務経験がある教員が複数在籍することから、社会人としての経験、社会人としての心構えなどについての講話を行った。また外部より講師(自衛隊)を招いて講演を実施した。

7. 添付資料

なし

2014(平成 26)年度

学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年 6月29日

総合情報学部 デジタルアート・アニメーション学科

2014年度主任 寺山直哉

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

学科の教育目標は自立的にものごとを考える力があり、コンテンツ制作のための創造力と技術力を備え、それを発信するコミュニケーション能力と社会性を身に付けた人物を育てる事にある。

この意味するところは、学科の教育目標が単にデジタルクリエイターを育てるということではなく、職種を問わず幅広い分野において社会で活躍できる人物を育てるということでもある。2009(平成21)年度より学科内に設けたWG「カリキュラム改訂委員会」を中心に学科会議で検討してきた新カリキュラムを昨2011(平成23)年度より施行し、「思い描く」「創造する」「発信する」というコンセプトをもとにしたコンテンツ制作のコア科目とその関連科目を順次開講している。2014年度は新カリキュラムの4年目に当たり新カリでは最初の卒業生となった。

本カリキュラムでは、学生の職業意識の向上と就職対策を目的として、1年次に「キャリアデザイン1」、2年次に「キャリアデザイン2」、3年次に「キャリアプランニング論」を設置しており、2年次配当の「キャリアデザイン2」までを開講した結果、本学科で独自に開講する「ポートフォリオ講座」などへの自主的参加が多くみられ学生の就業意識も高まり、結果就職率の向上へと繋がったと思われる。

また、卒業研究・制作が必修となったことで、より自立的な研究活動への取り組みや自己管理が身に付いていったのではないかと感じられると共に、その準備段階としての3年次配当必修科目であるプレ卒業ゼミの効果についても実感している。

シラバスについては、授業内容がよりわかりやすく、学生が主体的かつ自主的に学習できる内容となるように、詳細な内容を記載することを徹底している。特に事前・事後学習の表記内容をより具体的にすることで、授業時間以外の自主的な学びを促進できるよう配慮している。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

学修効果の測定方法として、本学科のカリキュラム・ポリシーに準拠したループリック(学習到達状況の評価するための評価基準)を導入し、全教員・学生への周知徹底の為「学修効果測定マニュアル」を作成し運用した。このマニュアルは、学修成果を強く意識した教育改革の実現を目指すものであり、学生が主体となって自身が獲得した能力や成果を測定し、4年間の学習を継続的・安定的に目標達成に向け進捗管理していく指針となりうる。また、受講科目の学習成果の測定と自己評価を通じ本学科教員との間で学習の指導・支援を受けるツールとなるものである。今後はこうした成果目標をOECUマイページの活用を中心に実現してゆきたい。

教育改善・授業点検の観点からは、学科教員間だけでなく非常勤講師の方々との意見交換にも注力し、学科としての全体的な教育改善を目指した。

また、学生に対し授業に関連することや、学外での学びになる場の紹介などを目的とした教員からの情報発信を活発に行い、学生の学ぶ姿勢の向上につながることを授業内外で試みている。

また、演習科目においては単なる技能・技術の習得だけではなく、コミュニケーション力やプレゼンテーション力をつけるための方略としてグループワークを多く取り入れている。商業芸術コンテンツ制作の現場はもちろん、一般企業でも共同作業は必須であり、学科の方針として今後もコンテンツ制作作業を通じたコミュニケーション力の育成を重視していきたい。

成績評価については教員間のバラツキを少なくし学生間に不公平感が起きない様に注意した。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

学生の生活面については学科主任や厚生補導委員と学内の各種機関が連携し、グループ担任やゼミ担当の各教員との間で情報が共有されるよう努めている。

また、学生の休学や退学といった問題があった場合には、本人だけではなく、可能な限り保護者とも直接話をするを学科の共通意識としている。精神的な問題を抱えている学生も多く、情報共有を全教員が強く意識し、学科会議では学生の状況等について常に相互確認している。

就職については、入口科目・出口科目を設定しているが、それにとどまらず日頃から学生の職業意識を育むように努めている。また、昨年同様に進路支援室の有効利用についても強く指導してきた。また、履歴書やエントリーシートの作成といった技術的な指導については、就職課に加え各教員でも指導し対応している。学生の文章力の低さが問題となっているため、様々な授業にて語彙力や文章作力の機会を多くするなど、文章を書く習慣作りに努めている。

更に、多様な学生の質に対応できる様な、きめ細かな教育の実現を目指している。

4. 卒業研究指導について

卒業研究・制作の発表会である「なわてん」については、2014年度もW 学科とT 学科と共同開催し、成功裏に終わることができた。教員の熱心な指導もあり作品レベルは年々向上している。これまで、3 学科とも1・2 年次生の参加が多くないことが問題点であったが、わずかながら下級生の参加意識も向上してきたと思われる。3 年生のプレ卒業ゼミ生は基本的に全員が参加必須であるが、1・2 先生についても参加を促していく。

そして、例年の「なわてん」開催時期に合わせ、多くの卒業生も来校しているので、この次期にホームカミングで一を実施している。現役の学生達にとって社会人である卒業生と直接話をし、職業のことや学生時代の卒業研究・卒業制作の話聞くことも刺激になると考え、今後も卒業生と現役学生が交流できる場を少しでも多く提供していきたい。昨年度同様に学外での「OB/OG 会」も積極的に開催した。また、卒業生アンケートにも見られるように、学外から多様な経歴をもった特別講師を迎えた特別公開講義も積極的に開催し、幅広いキャリアマインドの醸成にも務めた。

そうした甲斐もあってか、就職率については前年度よりも少し向上したが、各学生における希望職種への就職実現など、改善し向上すべき点も多い。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

項目「A」の知識や能力の獲得程度については、昨年度にからの課題であった「7 abc. 国際的な視野」の確実なポイントアップがみられた。またさ、昨年度も伸び悩んでいた「9. リーダーシップ」の評価も着実なポイント増がみられた。これらの項目については例年低めの傾向にあった為、これまで卒業研究/制作での指導や授業、そして様々な国際交流プログラムにて改善を図って来た成果ではないかと思われる。

具体的には、昨年度と比べ「7 a. 国際的な視野（専門分野）」項目が0.1 ポイント、「7b（異文化理解）」項目が0.3ポイント、「7c（国際交流）」項目も0.3ポイント増加している。

アートやアニメーションの世界では、国際的な視野は必要不可欠である。自国のアートやアニメーションの位置づけを理解するにも、また、国外へ向けて作品を発表する為にも、国際的な視野を持たなければいけない。今年度も各種授業やプロジェクトにおいて、各教員が更に高い意識を持って指導に当たってきたい。

「9. リーダーシップ」の0.2ポイント増については、演習授業でのグループワークや電ch!、JIAMSを始めとした産学連携プロジェクトのOJTやPBLでの活動を通じた自主的な実学体験の効果があつたものと推測される。

今後も更なるプロジェクト系教育の充実や強化を図りつつ、多様な学生を受入れ、それぞれの特質にあつた成長が望めるようなプロジェクトの企画も視野に入れていきたい。

また、それらのアクティビティをSNSやHP等のWeb 媒体を積極的に活用し、積極的な情報発信を行なうことで、多様で活発な学生生活の広報にも注力していきたい。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など

(1) 「電ch! (でんちゃん)」企画

学生と教員、そして学外のプロスタッフとの連携プロジェクトである「電ch!」を通じたOJT、PBLでは、人気声優の水瀬いのりをパーソナリティに起用したゲーム音楽に特化したラジオ番組『水瀬いのりのゲ〜ミュ♪研究所!』をラジオ大阪にて約半年間放送した。また、同ラジオ番組から派生したゲーム制作企画として『コトノハノキセキ』も制作し、iOS版を全世界に向けて配信している。更に学内外のイベントを学生自身が撮影しインターネットを介して中継する「電chu! (でんチュウ)」による様々な情報発信や「京都マンガアニメフェア（京マフ）」や「東京ゲームショー（TGS）」にもブース参加し、本学科様々なアクティビティの広報に務めた。こうした活動を通じて学生は作品を社会へ向けて発信していく事の重要性を認識し、学習に対する意識も前向きに変わっていき、学科としては今後もこうした主体性ある学生の受け皿となるOJTやPBL活動を活発化させていきたい。

以下、電ch! (でんちゃん) 公式ホームページ
<http://denchan.tv>

(2) 全教員実施によるオフィスアワーの徹底

全教員が通年において必ず毎週オフィスアワーの枠を設け、グループ担任やプレ卒ゼミや卒研ゼミ生はもちろんのこと、他研究室の学生であっても自由且つ気軽に任意の教員にコミュニケーションが取れる様な体制を整えている。更にメールやSNS を活用し、学生との効果的な情報交換の機会を持つ事で、事前相談や些細な疑問や質問を始め、直接的なコミュニケーションを敬遠しがちな学生との繋がりも継続出来る様に務めている。

(3) 北京科技大学との交換留学プログラム

昨年度より中国北京科学技術大学からの留学生を受け入れている。留学生への事前指導として、Q・W・A学科の各教員が現地へ赴いて講義や演習を行った。
以下は北京科技大学へ講義に出向いた本学科の教員数と渡航期間である。 _

- ◇期間：2014 年9月8日～13日
- ◇教員数：1 名

(4) インターンシップ、産学協同コンテンツ制作

学部主催やオープンインターンシップ、JIAMSとの産学連携コンテンツ制作によりや学内OJTシステム、更に研究室単位での独自のOJTプロジェクト等により、参加学生における社会性を伴ったコンテンツ企画・制作力が向上した結果、就職率向上へと繋がった可能性も大きいと考える。

(5) SNS を使った学科情報の発信、在学生、卒業生との交流

SNS (Social Networking Service) であるTwitterやFacebookを活用し、学科ブログの更新情報や学科のイベント情報、教員の活動のお知らせや展覧会情報などを学内外に向けて発信している。在学生だけでなく、卒業生やその他のユーザからも多くのフォローがあり、SNS の特徴を活かした相互の情報交換も行われている。昨年度同様、今年度の卒業制作展「なわてん」では、SNSでの呼びかけによって多くのOB・OG が四條畷キャンパスを訪れてくれた。

以下にURLを示す。

Q 学科Twitter アカウントhttp://twitter.com/ddaa_jp/

Q 学科Facebook ページ<http://www.facebook.com/ddaa.jp/>

また、ゼミによっては自主的にSNSを利用してアクティビティを発信しているところもある。

以下に倉地ゼミのSNS のURL を示す。

倉地ゼミtwitter アカウントhttp://twitter.com/kuralab_project/

倉地ゼミ色彩検定対策twitter アカウント<http://twitter.com/kuralabot/>
倉地ゼミFacebook ページ<http://www.facebook.com/kuralab>
寺山ゼミ Facebook ページ <http://www.facebook.com/terayamalab>

7. 添付資料(あれば)

特に無し。

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年7月6日
デジタルゲーム学科
2014年度主任 藤田 高弘

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

§ 教育目標・カリキュラム

2012年度にスタートした新しいカリキュラムでは、学生の興味関心と学科の人材育成目標との最適化を図ることを目的に、学際領域を横断的によりダイナミックに学べる自由度の高いカリキュラムに編成している。キャリア教育および必修の基礎ユニットとしてのCareerユニット、情報工学系科目群としてDevelopment・Systemの2つのユニット、芸術デザイン系科目群としてArt & Design・Graphicsの2つのユニット、企画プロデュース系科目群をProduceユニットとして計6ユニットである。

選択肢の増加は学びの自由度が上がる一方で、学生各自のカリキュラム設計を複雑にする要素も併せ持つ。その点を解決するツールとして、履修をサポートするための4年間のカリキュラムリストを制作し各年次で開催する進級ガイダンス時に配布し、学生各自の履修状況の確認に活用している。

2012年度の最も大きな改訂は、2008年度からのユニット群からScienceユニットに含まれた科目を他のユニットに配置し直し、キャリア意識を醸成するためにCareerユニットを新設し、Entertainmentユニットに代わってよりデジタル文化の創成を意識させるためにProduceユニットとして再編成した事である。

中でもCareerユニットにおける1年次後期の「プロジェクト実習1」(週2時限)、2年次前期の「プロジェクト実習2」(週4時限)、2年次後期の「プロジェクト上級実習」(週2時限)という1年半に渡るグループワークによるモノづくりプロジェクトが最も顕著な違いであり、デジタルゲーム学科における挑戦でもある。このプロジェクト実習シリーズは全員必修(「プロジェクト上級実習」は選択科目)で、学年全員を8つ程度のグループに分けて、その少人数グループ単位で教員一人がプロジェクト推進を指導する。1、2年の企画・演習系授業の応用や発展の役割も狙っているが、何より実際のモノづくりプロジェクトを通して、実践的な技術応用、チームワークでの環境適応性・自主性・協調性を育み、基礎的な理論や入門的な技術の学習に対して実践的なセンスを経験から学ばせる。人間関係も含めた広い意味での実践的能力を具体性のある形で伸ばそうという意図である。

また以前からのカリキュラムと同様に、1年次生を対象の「大学入門」(前期金曜日・前半集中開講)では大学での学びのシステムやスタイル、またその活用方法について理解を促している。1年次前期開講の「アクティブシンキング論・演習」においても、環境適応性・自主性・協調性を、自然に身に付けさせることを目的として、自己分析と自分表現を出発点に、グループワークでの企画立案・コンテンツ制作を段階的に体験させ、最終的に全員が表現者としてプレゼンテーションを実施し、学科における学生各自の立ち位置を相互に理解し合う場としても機能している。これらの科目は、学生相互の人間関係の形成に大きく影響するものであり、初期段階でのドロップアウトを防ぐ効果もあると考えている。

4年間を通して、カリキュラム全体にグループ単位で能動的活動を実践的に学ぶ授業を多く配置し、社会から期待されるコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力をはじめとした人間力の育成を意図している。

§ シラバス

シラバスの記載に際しては、学科教員全体として以下の配慮がなされている。

- 各科目の目的の項目では、その科目を学んで身につけられるスキル(知識、能力)を具体的に記述している。
- 授業計画は、授業形式の分類と15回に分けた実施内容を明記し、学修課題として第1回目から事前学修・事後学修の内容も具体的に記述している。
- 到達目標として、最終的に達成する目標を具体的に記述している。
- 成績評価については評価方法に沿った評価観点を設け、その観点に対する比率を明記して科目ごとの傾向や違いを明確に記述している。
- 特に第1回目の授業ガイダンスにおいて、シラバスの内容を詳細に説明し、シラバスの内容が意味するところ、教員の授業観・学生観、授業方法について解説している。また、この科目での学習方法もアドバイスしている。
- シラバスに記載した科目の目標や内容に対応する形で、科目において課す課題を明示し、学生の科目に対する理解をより促すよう配慮している。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

§ 教育改善・授業点検

教育改善や授業点検について、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- 毎回到授業終了10分前には、その回のまとめを行ない、受講生にラーニングアウトカム(学んだこと)を、各自で整理するよう促している。
- 学生の志向と資質、技術の進展に合わせて、同一科目であっても、毎年、教授内容を柔軟に変更させている。
- 授業アンケートを積極的に取り入れ、授業改善レポートについても、真摯に回答するよう努めている。
- 授業への積極的な参加を促すとともに知識の定着を図るため、授業内容に関連したミニレポート作成をおこなっている。提出物については授業内でフォローするよう配慮している。

§ 成績評価

成績評価について、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- シラバスに記載した評価方法・評価観点を、第1回目の授業ガイダンスで説明するとともに、中間テストや、定期試験の前に、それらを再度説明している。また、教育的配慮において、その評価基準を変更する必要がある時は、受講生にあらかじめ授業中に説明し、受講生

が不利にならないような、変更にとどめている。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

1、2、3年次の終わりに、学修効果測定として OECU MyPage に専用アンケート項目を設定し各学年・ユニット別の必修2科目の成績から平均値を出し、学生毎に目指しているユニットの確認と達成度の目安として、指導の基礎材料の一つとしている。

2年次前期では上述の「プロジェクト実習2」において総合的に個々の学生の指導にあたり、プロジェクトに必要とされる基礎学力・知識の引き上げも行うが、2年次終了時には1年次と同様の基礎的項目の確認を行う。3年次では前期にプレゼミ、後期にゼミナールで少人数対象の個別指導の機会を利用して4年次の卒業研究・制作に必要とされる知識と学力を確認し、補足的な教育を施す。

また前期のプレゼミでは、模擬SPI試験の他に今年度から「社会人基礎力を測るPROGテスト」を実施した。PROGテストは知識を活用して問題解決する力(リテラシー)と経験を積むことで身についた行動特性(コンピテンシー)という2つの観点から、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を測定するものである。テスト結果は個別の診断レポートとして返却するとともに、キャリアカウンセラーによるレポート内容の解説セミナーも実施し、学生が自分の特性を理解した上で、スムーズに就職活動が行えるよう、指導教員からもアドバイスを与えている。

新年度を迎える前に各年次に対して、それぞれ学科教育内容に関するガイダンスを実施し、各年次での教育内容の主要なポイントを解説するとともに、教育目標を再確認することで学科教育に対するモチベーションの維持向上を促している。

また、編入生・転科生などに対しては入学時に個別の履修指導を実施し、各自の入学以前の学修状況を鑑み、学科教育にスムーズに浸透していける履修プログラムの設計について指導している。

学生指導について、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- 質問や相談に訪れやすいように、授業で適宜アナウンスをしている。また教員ごとにオフィスアワーを定めており、質問や相談ができる時間を設けている。
- プログラミング技術について教える際、できるだけその技術が現場で使われている例を最初に示し、なぜその技術が必要なかを理解させてから、詳細の説明に移っている。
- プログラミング技術の習得は常に新しい情報の獲得と実際的な応用経験が重要であるため、プログラミング言語や開発環境についての最新情報へのアクセス方法や読み取り方などについても説明をしており、演習方法についても学生のモチベーションを高めるために、個々のニーズを重視した課題設定を行い、課題発表を一つの目標においた方法を用いる科目もある。
- デザイン系科目においては、デザイン思考の開発と表現技術の獲得の両面から教育指導にあたり、特に多様な表現形態について見る眼を養うことを意識し、課題作品の講評の際には学生作品1点ずつにコメントを付している。
- デザイン系志望学生に対しては、就職活動をおこなう上で重要なアイテムとなるポートフォリオに

については具体的な制作指導を複数回実施している。

- 心理的・精神的な問題を抱える学生については、カウンセラーとの密な連携を取って指導にあたっている。
- 就職活動に対するサポート(模擬SPI試験、エントリーシート添削や会社見学の引率など)を実施している。
- 礼節の大切さと実践する気持ちよさを、毎回の授業で体感させることを徹底している。具体的には、授業開始時と終了時に、大きな声で元気よく挨拶する事を習慣付けている。
- 協働の精神、個人の社会性の向上、社会への寄与の研究姿勢を持たせ、生の声を直接聞き、変化する社会を表と裏から見る事で、現場意識と政治への関心、実践力をつけることを強く意識している。フィールドで生の実態を掴むと同時に、学術的態度として俯瞰的、普遍的、根源的なものの見方をさせるようにしている。
- 編入生および留学生については、それぞれを対象とした履修指導を実施している。また、履修登録時においても事務職員による説明会に学科教員を配置し、個別の質問などに対応できるよう配慮している。
- 就職活動に対するサポートとして、言語能力の向上を目指し、小論文の課題や社説の音読・要約に取り組みさせている。最初は教員が各自の小論文や要約の添削をおこない、学生が慣れた時点で相互添削をさせている。評価者になることで、より意識的に文章を読む・書くという習慣づけを図っている。

4. 卒業研究指導について

4年次へ進級する段階でガイダンスを実施し、卒業研究・卒業制作の要件について明確に説明している。また、卒業研究および制作に関する各種イベントのスケジュールについても、この時点で発表し、学生の自主的な取り組みの立ち上がりを促している。

2013年度から本格始動しているが、グランフロント大阪ナレッジキャピタルで、他大学や研究機関と定期的に研究交流を行い、センサーネットワークやビッグデータプラットフォームにおけるデータ処理と可視化等の共同研究や連携プロジェクトを行っている。世界的にも例を見ない先進的な大型裸眼立体ディスプレイで3DCG作品の展示と特殊な技術を要する作品制作実習を行っている。この研究活動では一般の来場者(来街者)や関連研究者に学生本人が説明員として対応する事が要求されるため、展示ブースがコミュニケーション能力向上の実践の場ともなっている。本件と上記項目は本学科や学部に関じる事無く、全学的に開かれた連携活動を目指している。

卒業研究・制作指導については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- 研究室でのゼミ以外に、毎月、学外者(他学科、他大学、企業関係者)との研究会を開催し、視点・視座・価値観の多様さが重要であることを意識させている。さらに議事録を書かせ、ドキュメンテーション力を高めている。また、その場で3ヶ月に1回は研究報告もさせ、プレゼンテーション・コミュニケーション力の実践的能力の育成をしている。

- 定期的に学外者(OB、他大学教員、企業関係者)と合宿ゼミを開催し、集中的な討議の経験をさせている。そこでは、新入社員としてのマナーや基礎知識の訓練もおこなっている。
- 外部の研究機関と共同でフィールドワークを実施し、学んだことを実際に活用できる場を設けている。またそうした活動のメディア取材などにおいても、学生にも出演する機会をもうけ、日頃の自分たちの活動の様子を伝えることの大切さや、わかりやすくデモをすることの必要性などを実感できるようにしている。
- 他大学の研究室を訪問して、研究に対する取り組みの姿勢やレベルの参考にさせている。
- 3年次前期の研究室配属決定後、ゼミ所属学生個々が講師となって、各自の興味領域について講演をおこなう課題を課している。ゼミ生相互の個性を理解する一助とするとともに、講演のための資料準備やプレゼンテーションを通して、その後の研究・制作発表への導入としている。
- 3年次前期の研究室配属決定後、4年次生が3年次生を指導する勉強会を集中して実施し、卒業研究・制作に必要な専門的な技術や知識を早い段階で習得できるようにしている。これによって就職活動が本格化する時期に、学業と就職活動が両立しやすいようにしている。
- 3年次後期から積極的に学会発表(ゲーム学会、電子情報通信学会、情報処理学会、芸術科学会など)をおこなっている。
- 学外での作品発表(グランフロント大阪The Lab、同NICT200inch裸眼立体ディスプレイでの連携、大正区ものづくりフェスタ、なわてふれあい商工まつり)を行っている。
- 自治体や地域との連携として、寝屋川市まちづくりに関する市民意識調査をゼミで実施するなど制作・研究テーマとして地域貢献(寝屋川市の防犯、防災、経済活性化策など)を主題にしている。
- 英語文献、学会誌なども含め、多様な情報源を活用して知識の習得に努めさせている。本研究室の特徴となる技術については、テーマに関係なく全員に習得させるため、集中的に課題に取り組ませている。
- PCを教材としているため、本学図書館の豊富な電子ジャーナルを活用し、英語論文からの最新動向の獲得にも取り組ませている。
- 専門科目「エディトリアルデザイン・演習」において、四條畷市との連携授業課題として、四條畷市の財政情報を伝える広報誌のデザインに取り組んだ。採用されたデザインは、印刷されて冊子として活用されると同時に、四條畷市ウェブサイトからダウンロードができるようになっている。
- Knowledge Innovation Award 2nd. 優秀賞受賞
「Knowledge Innovation Award 2nd. コト部門」において、デジタルゲーム学科の「プロジェクト実習1・上級実習」で制作した「クリスマスのメディアアート展」が、3月27日の最終選考会において優秀賞を受賞しました。[http://www.osakac.ac.jp/project_now/dg/](2015.6/3参照)
この「クリスマスのメディアアート展」は、門林理恵子教授と陳維錚講師の指導のもと、大学院生や学部学生と企業との連携によって、エアフローティングメディアやプロジェクションマッピングを利用したインタラクティブアートに満ちた空間を創造しました。

●INTERNATIONAL STUDENTS CREATIVE AWARD 2014. 佳作受賞

日本のみならず、海外の芸術系・情報メディア系の大学や大学院、また専門学校の学生のクリエイティブなオリジナルコンテンツを対象にした国際的なアワードで、上善恒雄教授指導の大学院生がモバイルアプリ部門で「佳作」を受賞しました。[<http://kc-i.jp/award/isca/2014/> 参照]

●U25 Ruby プログラミングコンテスト in 島根 最優秀賞受賞

25歳以下のプログラマを対象にした「U25 Ruby“ネ申”プログラミングコンテスト in 島根」の最終審査会が、10月11日（土）島根大学にて開催され、デジタルゲーム学科 伊藤伸さんの「MotionTool」が最優秀賞を受賞しました。伊藤さんの受賞作「MotionTool」は、DXRubyで作るゲーム用に開発したモーションエディタです。[http://www.osakac.ac.jp/project_now/dg/36 参照]

● ゲーム学会ポスターコンペ 2014 への作品応募を授業外課題として学生有志が取り組み、その指導をおこなう。その結果、本学科学生の作品が採用され、ゲーム学会第13回全国大会ポスターのデザインも担当した。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

今年度の教育の総合評価は7.0ポイントで、昨年の6.9から0.1ポイントアップしている。しかし、以前からの課題である「A-7.a.b.c 国際的な視野」のポイントが、他の部分と比較すると低い傾向が続いている。この項目を昨年度と比較すると、今年度の評価は国際的な視野(専門分野)が3.0から2.8に、国際的な視野(異文化理解)は2.8から2.6に、国際的な視野(国際交流)も2.8から2.6と、合計0.6ポイントもダウンしている。考えられる理由として、学科内に在籍する留学生の人数が、ここ数年減少傾向である事と、日本から海外への留学希望の意思を持つ学生が減少している事があげられる。また、外国語が不得意なために留学を敬遠しているという学生の声もある。Q 学科とW 学科の統合により、両学科合わせた留学生全体の人数は多くなっているため、今後は日本の学生達との交流の場を授業内だけにとどまらず、イベントやプロジェクトへの積極的な参加を促し、日常的に国際的な視野を体感させる仕組み作りを推進するべきである。

全体的には、昨年度と大きな変化は無かったが、今後、満足度を上げるためには、自由記述に於ける「改善すべきと思う点」の記述内容を真摯に受け止め、その内容を分析し確実に改善・解決していく努力が急務である。

6. その他、特記事項（学科独自の教育など）など

学科独自の教育としては、以下の取り組みがあげられる。

- 入学後早期に学生の把握をおこなうことを目的に、新入生の顔写真撮影を実施している。
- ノートパソコン導入教育(5～7コマ)を実施している。学科教材としてのノートパソコンを学生生活に中で有効活用するために、初期段階で集中的なリテラシー教育を実施している。
- 4月から5月の期間は、特に新入学生の動向についての情報交換を、学科会議および学科メーリングリストを通じて頻繁におこなっている。

- 年度当初には学科教育に参画いただいている非常勤講師の方との懇談会を実施し、学科教育目標や科目連携の確認をおこなうとともに、幅広い専門領域を持った教員相互の親睦を深める機会としている。
- 5月中旬に新入生歓迎会を実施している。単なる懇親の場としてだけでなく、「アクティブシンキング論・演習」の授業内で形成されたグループごとに、ショートプログラムを企画・実施し、授業との連動による教育的な側面も加味したイベントとなっている。
- Tokyo Game Showへの出展を、学内コンペ形式で展示作品の選考をおこない実施している。授業内でのコンテンツ制作指導を端緒として、授業外においても学生の自主的なグループ編成によるコンテンツ制作に取り組む体制が形成され、授業の枠を超えて学科専門教育の見地から教育効果が非常に高いプログラムであると判断している。
- 総合情報学部としてカナダ・シェリダンカレッジとの短期交換留学制度を実施している。国際コミュニケーション能力の養成という観点で、参加学生の成長は著しいものがあると感じている。
- 北京科技大学(中国)との国際交流協定のもと、デジタルアート・アニメーション学科、デジタルゲーム学科両学科教員の現地での出張講義を実施している。日本語能力を研鑽中の学生が対象であるため、チームティーチングの実施や教材の検証・開発など授業運営の工夫が必要であり、本来の設定目的とは別に教員研修としての機能も併せ持っている。また短期留学プログラムも実施している。
- ユトレヒト芸術大学(オランダ)中長期交換留学プログラムにより、後期に2名の学生を受け入れている。
- アムステルダム応用科学大学(オランダ)中長期交換留学プログラムにより、前期に2名の学生を受け入れている。
- 3年次前期開講の「プレゼミ」においては、専任教員の各研究室の研究・制作テーマや指導内容などについて、理解を促すためのプレゼンテーションを実施し、卒業研究・制作への導入として位置付けるとともに、SPI模擬試験の実施など進路選択の端緒としても捉えて授業運営をおこなっている。
- インターンシッププログラムは、学科設立後3年次を迎えた段階で実施し、これまで継続的に展開している。教員のコネクションを通じた企業開拓や四條畷学務課・進路支援室の協力を得て、一定の企業数を確保して実施している。プログラムを修めた学生は、就業体験を通して協働の精神とコミュニケーション能力の重要性を強く認識し、その後の学生生活を送っている様子が見えがえる。
- オープンキャンパスにおいて、学科学生主導のイベントを企画運営している。在学中に自分の所属する学科を客観的に分析し、学生の目線で学科広報の方向性を具体的に企画するイベントプロデュースを通じて、来訪者に対する学科のイメージ向上と同時に、学生の専門分野の見地からの教育効果も併せて意図したものである。
- 卒業研究・制作発表会および「なわてん」の実施に際しては、4年次生の研究・作品発表の場として、その準備運営にはゼミに配属された3年次生が、教員の指導のもとあたっている。

●学科設立当初から、教員相互また学外からの来訪者による授業参観は頻繁におこなわれていたため、授業参観については自由に受け入れる学科の雰囲気形成されている。

7. 添付資料（あれば）

なし

2014(平成 26)年度
学科教育点検・評価 (FD) 報告及び卒業生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 6日
総合情報学部 情報学科
2014年度主任 北嶋 暁

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標

本学科では、以下の教育目標で理工系の情報教育を行っている。

- 情報技術(IT)の基盤となる専門知識の獲得
- 即戦力となり得る実践力の育成
- コミュニケーション能力などを中心とした社会性の向上

カリキュラム

本学科のカリキュラムは、ACM(世界最大のコンピュータサイエンスの学会)が策定した標準カリキュラム CC2001 に対応している。2005 年のメディアコンピュータシステム学科開設から、上述の教育目標に基づいてカリキュラムを設計し、2009 年度にカリキュラム改定をへて、2014 年度から、情報学科として更に改善したカリキュラムの実施を開始した。そのカリキュラムでは、特に IT キャリア科目の充実を図っている。

JABEE

コンピュータサイエンス教育プログラム (略称 CS コース) を設け、外部第三者評価である JABEE (日本技術者教育認定制度) の認定を継続することを目指し、教育の質やサービスの向上に努めている。なお、JABEE 認定を受けないコース (デジタルメディアコース, 略称 DM コース) の学生に対しても、各科目における合格基準は同一にしている。2013 年度に JABEE の認定継続のための審査を受け、前年度からの継続が認められている。

シラバス

本学科の専門科目のシラバスにおいては、「授業目標」「授業スケジュール」「合格基準」「評価項目」を必ず明示するようにしている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価 (平均値、成績分布、合格率など) について

教育改善・授業点検

JABEE の認定を目指すべく、各教員が統一された方針で授業の質を高めることを心がけてきた。2009 年度から学科内に FD 担当教員を定め、FD 会議を開き、内容の点検を行っている。

2009 年 10 月に JABEE の審査を受け、2010 年 5 月 13 日付で本学科の「コンピュータサイエンス教育プログラム」が「情報および情報関連分野」の JABEE 適合プログラムとして認定された。認定期間が切れるため、2011 年 11 月に再度 JABEE の審査を受け、2012 年 4 月に継続の認定がなされた。そこで受けた改善勧告に対する対応を行い、さらなる教育改善を加えた 2013 年度からのカリキュラムを前年度策定した。このカリキュラムに対し、2014 年 10 月に再度 JABEE の審査を受けた。今後、そこで受けた改善勧告に対する対応を行い、学科としての教育改善を継続的に進める。

成績評価

本学科の方針として、成績の相対評価は行わず、シラバスに明示した合格基準と評価項目に基づき絶対評価を行っている。その結果として、科目によっては合格率がかなり低いものもあり、学科の平均としても他学科に比べると低い。また、半期の授業で 4 回以上欠席すると未受験扱いにするというルールを設けている (シラバスに明記) ため、受験率は低くなりがちである。これらの傾向は、合格者のレベルを保証するためにある程度はやむを得ないが、一方で授業の改善も行い受験率低下の対策を行っている授業もある。

昨年度から、学科の目標として主要科目 (JABEE 必修科目) の合格率を 60%以上にすることを定め、各教員がそれを目指して取り組んでいる。結果は FD 会議で確認している。今年度も達成で

きなかった科目もあるが、それらについては今後の FD 会議等でも対策を検討する。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

履修指導

年度末や年度初めに設けられた学科オリエンテーションの時間以外に、1年生向けには「スタディスキル」、2年生向けには「プレゼミ」の中で、学科の教育の方針や JABEE や履修のポイントについて説明を行っている。

教育相談・生活相談

グループ担任の方法にはこれまでに試行錯誤があったが、2014年度からは、新入生を8グループに分けて、1グループにつき主担任1名、副担任1名の教員が担当している。2グループを2人の教員が担当し、グループにより主担任と副担任の役割を入れ替えている。

入学式直後の新入生オリエンテーションでは、2009年度からアイスブレイキングを導入している。また、2013年度から、5月に新入生に対し学外研修を実施し、その中で学生全員とグループ担任との個人面談をしたり、学生同士や学生と教員が打ち解けるようなイベントをしたりした。

1年次の必修科目である「スタディスキル」においては、欠席が多い学生に対しては、担任から本人や家庭へ電話連絡するようにしている。

就職指導

情報学科では1年生向けにキャリア形成科目の役割を持っている「スタディスキル」を実施した。2年生向けには「テクニカルプレゼンテーション」など、キャリア形成の基礎となる授業を実施した。

3年生向けに、毎年恒例となっている学科独自の進路ガイダンスを7月17日と1月5日に開催した。7月17日には、4年生で内定を既に得た学生の経験談、1月5日にはこれからの就活についての説明に重点を置いている。また、後期科目「キャリアプランニング」の中で筆記試験対策、模擬試験を行っている。

3年生の1月からは、学科独自に定めた「就職活動進捗管理票」を毎月指導教員に提出させ、その際に面談をして一人ずつに指導をおこなっている。

学務課が発行する欠席証明書は、選考試験を伴わないと発行されないため、授業の欠席を気にして就職活動が鈍る学生がいたので、学科独自の「就活欠席証明書」を制定している。説明会だけでも指導教員が承認することによって証明書を発行し、学科教員の担当の授業であれば、正規の欠席証明書と同等に考慮するように申し合わせがなされている。

4. 卒業研究指導について

本学科では、3年次で「卒業研究」を行っている。2年次の7月に配属の研究室を決定し、2年次の後期にプレゼミを行い、3年次の年度初めから卒業研究を開始し、3年次の年度末に終了する。また、3年次の月～金曜日の3,4時限に卒業研究を割り当てており、原則としてこの時限に他の科目を受講することはできない。

上述のような制度によって、学生に十分な時間をかけて能動的な学習を行わせ、問題解決能力、プログラミング能力、プレゼンテーション能力などを修得させる。これを3年次の年度末までに終えることによって、身に付けた能力を就職活動に役立てることも狙っている。

学科の方針として、研究テーマは一人ずつ異なり、複数人で1テーマは認めていない。合格の基準として、学習・教育目標の達成に加えて、450時間以上の従事、中間報告(口頭発表)2回、20ページ以上の論文、最終発表(口頭発表)、1000行以上のプログラム(CSコースのみ)を定めている。論文と最終発表は複数の教員で評価を行い、可否を判定する。

最終発表会では、各研究室から選抜された学生による優秀研究セッションを設けている。これらの学生は全教員で評価し、最優秀研究を選定する。上位の学生は、当該年度の学業優秀賞に推薦している。

世間では、就職活動が年々早期化しており、3年生の後半で開始しなければならないのが現状である。本学科では、その時期に卒業研究が佳境であり、学生の就職活動の開始が遅くなるのが問題になりつつあった。そこで、2010年度から、卒業研究の終了を論文の1ヶ月以上早めたスケジュールにしている。今年度は論文提出期限を12月15日、最終発表会を12月24、25日に実施した。これによってこの問

題はある程度緩和されている。

本学科では、以上のように独自の方法で卒業研究を実施しており、学生の能力向上に効果を上げていると思われる。卒業生の満足度調査においても、好意的なコメントが多く得られている。一方、途中で脱落する学生が少なからず存在する。また、指導にかかるコストの割には、就職の実績につながっていないのではないかという意見もあり、実施方法については、さらなる検討が必要である。

なお、研究をさらに続けたい学生や大学院進学予定者のために、4年次配当の選択科目として「特別研究」を設けている（CSコースでは必修）。

5. 卒業・修了生満足度調査結果について

数値による評価については、学科の教育に関する項目はほぼ昨年度と同等であり、また、自由記述の良かった点に関する記述からも、全体的には好意的な評価が得られていると考えている。今後もより多くの学生から良い評価が得られるよう改善していきたい。

コメントの中で、連絡等が不十分といった内容の意見が複数あったので、今後、改善可能な部分を検討したい。

6. その他、特記事項（学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など）など 学科独自の教育

学科開設の2005年度から毎年新入生に学科指定のノートPCを購入させている。このノートPCには、学科の授業に必要な各種のソフトウェアがあらかじめインストールされている。このPCを活用して、プログラミング能力やコンピュータ運用能力を向上させることを狙っている。また、後述のe-Learningを利用して、一般の授業にも役立っている。

MC2の協力を得て、ウェブベースのe-LearningのMoodleを学科として積極的に活用している。例年約70のコースが設けられており、一般の授業以外に、研究室単位のプレゼミや卒業研究の運用にも利用されている。

授業とは離れているが、「ACM国際大学対抗プログラミングコンテスト」に出場する有志学生の課外活動を学科として支援している。

アクティブラーニング

必修科目として卒業研究、コンピュータシステム演習を行っているのに加え、エンジニアリングデザイン演習や特別研究やグループプログラミング演習など、選択科目にもアクティブラーニングを行う科目がある。

これらの科目は、卒業生満足度調査でも良かった科目として挙げられており、学生に有意義に受け入れられていると判断できる。

離学者対策

学科の学生全員を対象に、各自が記入した学生生活自己評価シートをもとに、年2回の面談を行っている。これにより、どの学年においても、グループ担任や卒研指導教員が面談する機会がある。

また、離学者対策の一環として、先述のとおり、学外研修を実施している。新入生にインタビューしたところ、楽しかったという意見がほとんどであり、学生同士や教員との関係が深められたと考えられる。

7. 添付資料(あれば)

1. 資料1 情報学科パンフレット（下記に公開しているため非添付）
<http://cs-oecu.jp/wp-content/uploads/2012/07/cs-oecu-leaflet-2012.pdf>
2. 資料2 情報学科ウェブページ（下記に公開しているため非添付）
<http://www.cs-oecu.jp/>
3. 資料3 新入生宿泊研修のしおり（非公開）

大学院

2014（H26）年度
「修了生満足度調査結果の検討」

2014 (H26) 年度 修了生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 6日

大学院工学研究科先端理工学専攻

2014年度専攻主任 浅倉 史興

2014年度の先端理工学専攻の修了生は14名であった。満足度調査の回答を見ると、総合評価(平均点)は前年度より上昇して(2013年度:7.5→2014年度:7.9)、2012年度と同等の評価となった。これは、満足度が非常に低い学生が、2013年度に1名存在したことに起因すると思われる。

本専攻では、昨年度より副指導教員制を試行した。副指導教員が当該院生の院ゼミ発表に出席し質疑応答に加わることにより、発表する学生が自身の研究目的・内容・意義などについて、より深い理解と認識を得ることができ、さらに、分野間のコミュニケーションが促進された。また、副指導教員が学位審査の副査となることにより、他分野の副査教員が読んで分かるように学位論文をまとめることが必要となり、研究指導においても一定の効果があったと思われる。今後も、この副指導教員制を生かして、学生の満足度を高めるように努力する。

前年度にやや上昇した[A]:知識や能力の獲得に関する設問については、平均点がやや下降して(2013年度:3.6→2014年度:3.5)2012年度のレベルに戻った、とくに、大学院で身につけて欲しいと考えている能力:[A]2. 専門的な知識・技能 [A]5. 自ら課題を見つけそれに取り組む力の平均点が下降したことは残念である。自由記述欄においても、「授業が専門分野外が多く、専門知識が身につかない」、「私が研究を行っていた分野の講義が少なく…」という記述があるので、今後も専門分野の講義をより充実させる必要があるが、[B] 授業科目群, 設備・機器の評価(平均点)については、講義, 演習, 実習, ゼミ指導すべてについて平均点は上がっているので、教員の努力は評価されていると見るべきであろう。他方で、[A1]. 幅広い分野にわたる教養について平均点が大きく上昇し、昨年上昇した[A]3. 物事を論理的に考える力, [A]7. 国際的な視野(専門分野)は今年も上昇または同様であった。本専攻は、相異なる4専攻分野から構成されているので、他分野の知識や方法を学ぶには好適である。また、昨年度より始まった「先端理工英語 1,2,3,4」も一定の効果があったと考えられる。

[B] 授業科目群, 設備・機器の評価(平均点)については、前年度より大幅に上昇している(2013年度:3.3→2014年度:3.9)。2012年度の平均は3.5であったので確かな上昇と言える。また、すべての項目について上昇しているので、教員と事務方の双方により努力がなされた結果であろう。また、[B]7: パソコン等のIT機器の充実度・使いやすさについても、各研究室単位で工夫が行われたと考えられる。今後も、現状に満足せずに授業科目, 設備・機器について充実させる。

自由記述欄によると、本年度は院生と学部生、他大学の院生、他学部・他専攻、研究室同士の交流や学内の研究室単位で共同研究を望む記述が多かった。これは、今後の大学院運営についての大きな示唆であろう。今後も、アンケートの結果と自由記述欄の要望をもとに、学生の満足度を高めるように努力する。

また、自由記述欄の記載にもあったが、大学院への進学者数を増やす必要がある。今後も、大学院の教育活動と進学の特長を宣伝し、進学者数増加の更なる工夫を重ねる。

2014 (H26) 年度 修了生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 6日

大学院工学研究科電子通信工学専攻

2014年度専攻主任 小見山 彰

全項目の平均は2013年度の3.6から4.0へ0.4ポイント上昇している。しかし、毎年ある程度の変動をしているので、前年度との比較ではなく、2011年-2013年の3か年平均との差と変動幅から見ることにした。

設問[A]

表1に、知識・能力の獲得に関する2014年度の評価と過去3年の平均からの増減および過去3年の変動幅を示す。この中で、過去3年の変動幅に比べ、増減が顕著であった項目としては、3物事を論理的に考える力(+0.6)、4的確な判断力(+0.5)、6困難に直面しても対処していく力(+0.5)、8コミュニケーション能力(+0.8)、9リーダーシップなどが挙げられる。これらの評価が改善された原因としては、

- (1) 就職決定率が100%であったことに象徴されるように、就職環境がよく、自分の志望する就職先を見つけた学生が多かったために、満足度や、達成感が高かった。
- (2) 新カリキュラムは2014年度からであり、今回の修了生に影響するわけではないが、共通開講科目はM2生も受講できるので一定程度の効果があった。

などのことが考えられる。

表1 知識能力の獲得

項目	2014	過去3年平均からの増減	過去3年の変動幅
1幅広い分野にわたる教養	4.0	0.2	0.1
2専門的な知識・技能	4.6	0.4	0.5
3物事を論理的に考える力	4.7	0.6	0.2
4的確な判断力	4.3	0.6	0.3
5自ら課題を見つけそれに取り組む力	4.4	0.3	0.2
6困難に直面してもそれに対処していく力	4.4	0.5	0.2
7A 国際的な視野(専門分野)	3.1	▲ 0.4	0.7
7B 国際的な視野(異文化理解)	2.4	▲ 0.5	0.5
7C 国際的な視野(国際交流)	2.4	▲ 0.5	0.5
8コミュニケーション能力	4.6	0.8	0.0
9リーダーシップ	4.3	0.7	0.1
10 他人と協調して物事に取り組む力	4.6	0.5	0.4
平均	4.0	0.2	0.3

しかし、このように大きく改善された項目は、過去3年間の平均が3.5~3.7と評価自体が低かったものが多い。2014年の結果に油断することなく、今後もこれらの項目を改善していきたい。

一方、国際的な視野に関する3項目は(-0.4~-0.5)と大きく低下している。元々年度による変動幅が大きい項目であり、この低下が年ごとのばらつきで説明できるのか、何らかの要因があつて低下したのか判断は難しい。しかし、この3項目は、何らかの対策が必要である。国際会議への参加を奨励するだけでなく、例えば、ゼミナールの発表の一部を英語で発表することを義務付ける。授業の一部を英語で実施するなど、ブロークンで低レベルでもよいので、英語を身近に使うような状況を大学院の教育・研究の中で増やしていく必要がある。

設問[B]

次に、授業科目、設備、事務サービスの結果を表2に示す。教員が行う教育は全体に評価は高いが、その中で講義形式の授業は評価の変動幅が大きく、評価の平均が相対的に低い。一方で、演習形式の授業や研究やゼミは高い評価を得ている。ゼミは、ピアレビューの結果の整理を学生に義務付けており、整理を通して、自分の発表に関する外部評価を自然にかつ深く理解するように工夫している。これらのことが高い評価になったものと考えられる。過去の変動幅に比較して大きく改善したのは、2発表や質疑応答を伴う演習形式の授業である。今後も改善していきたい。

一方で、教育環境に関する評価は、低くはないもののまだ改善の余地がある。例えば、7パソコン等のIT機器の充実度・利用しやすさは大きく改善したものの評価の絶対値としては依然低い。また、研究用実験室の設備・機器の充実度も低い評価であり、今後も改善が必要である。事務サービスに関しては、専攻が判断する項目でないのでコメントは差し控える。

表2 授業科目、設備、事務サービス

項目	2014	過去3年 平均から の増減	過去3年 の変動幅
1 講義形式の授業	4.1	0.3	0.8
2 発表や質疑応答を伴う演習形式の授業	4.4	0.4	0.1
3 1,2以外の授業(学外講師による講演形式、実習形式など)	4.2	0.2	0.4
4 研究やゼミにおける指導	4.9	0.1	0.4
5 図書館の図書・雑誌等の充実度	3.9	▲ 0.0	1.0
6 図書館の利用しやすさ	4.0	0.1	0.1
7 パソコン等のIT機器の充実度・利用しやすさ	3.9	0.4	0.2
8 講義室等のビデオ・教材提示装置等の充実度	3.8	0.3	0.3
9 研究用実験室の設備・機器の充実度	3.3	▲ 0.5	0.6
10 TA 制度(担当者の立場から)	4.7	0.5	0.5
11 大学院履修要覧等の諸資料	4.1	0.7	0.5
12 教務課・学生課/四條畷学務課 事務サービス	3.4	0.3	0.6
13 寝屋川就職課/四條畷就職課 事務サービス	4.4	0.6	0.9
平均	4.1	0.3	0.3

2014 (H26) 年度 修了生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 6日

大学院 工学研究科制御機械工学専攻
2014年度専攻主任 宇田 豊

2014年度修了生満足度調査結果の検討を設問項目に沿って、以下に記します。

【A】 本学での大学院生活をとらえて、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか。

2013年度と比較して、個人的な知識、能力(設問1~6)について向上しましたが、対人的な能力(設問9, 10)については低下しており、総合的には平均が3.6と同じ結果になりました。前者は、評価の高い「専門的な知識・技能」をより一層の高い評価が得られるように、基礎学力の向上、カリキュラムの体系化、研究組織を2014年度より改訂した効果が徐々に表れた結果と考えられ、引き続き根気よく継続していきます。後者は、特に設問10で12人中、獲得度4以上が11人で、1名だけが獲得度1であることより、院生の資質に依存する問題と考えられますが、指導により改善できるように努めることが重要と思います。

例年のことですが、「国際的な視野」に関する評価が低い結果となりました。留学生の受け入れ、院生への国際交流支援などの対策が考えられるが、現状では高い評価は得られないと考えます。

【B】 本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください。

2013年度と比較して、教員に対する設問(設問1~4)について向上しましたが、それ以外の設問(設問5~13)については低下しており、総合的には平均が4.0と同じ結果になりました。特に「講義形式の授業」は4.1から4.7と飛躍的に評価が向上し、【A】に記載した2014年度改訂の効果が現れてきたと思います。昨年度と同様に、「研究やゼミにおける指導」と「TA制度(担当者の立場から)」の評価は高く、前者については研究を通しての各教員からの直接指導の効果は大きく、後者については“教えることは学ぶことである”につながると考えています。

引き続き、根気よく指導を継続していくことが重要と思います。

【C】 あなたが本学の大学院で経験した教育について全体として考えて、総合評価を1~10の10段階で評価してください。

総合評価は昨年度7.9から8.6へと飛躍的に向上しました。昨年度は35人中、1点の1人、4点2人と低い満足度で修了した結果に対し、本年度は6点以下と評価した学生が一人もいませんでした。【A】で回答しましたように、カリキュラム改定により一層充実した教育内容を目指した結果と考えている。

【D】 あなたが本学の大学院で良かったと思う点をお書きください。

「学会発表できた」、「自分で考える力がついた」、「広い視野を持つことができた」など、研究を通じた各教員の直接指導や企業の技術者の講義などが大きな意味をもつと考えられます。

【E】 あなたが本学の大学院で改善すべきと思う点をお書きください。

昨年度まで複数の回答があった「隔年講義での機械と電気のバランスが悪い」という意見は、本年度は無くなり、カリキュラムを改訂で、3分野に分類し、各分野のバランスの良い隔年講義の配当にしたことにより、改善できました。

【F】 あなたにとってとくに役に立った、あるいは印象に残っている科目名と、どういう教育内容が役に立った、あるいは印象に残ったこと、あるいは後輩へのお勧めの理由などをご記入ください。

印象に残っている科目で多いのは、「産学連携機械工学特論」、「先端技術工学特論」、「国際工学技術特論」などの企業からの外部講師による講義で、企業現場からの生の声が聞けることが良かったのではと思われれます。また、専攻教員担当の授業についても好評であり、【B】における授業に関する設問で高評価となりました。

【G】 あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学大学院への要望、提案などを自由に記入してください。

「大学院進学者数の減少」という意見が複数あり、対策として大学院生が自ら大学院の魅力を学部生に紹介する機会を設ける建設的な提案がありました。彼らの提案を真摯に受け止める必要があると思います。

2014 (H26) 年度 修了生満足度調査結果の検討結果

2015年 7月 7日

大学院工学研究科情報工学専攻

2014年度専攻主任 越後 富夫

2014 (H26)年 度 修了生 満足度調査結果の検討

情報工学専攻会議において、満足度総査の結果に基づき教育の改善方を議論しましたので、以下に報告します。

修了生は7人で、近年進学者数の減少が顕著になっており、満足度調査の統計的数値の信頼性は低いが、傾向は読み取ることができる。

修了生の自由記述にも『入学者数の改善』『少なすぎて寂しい』の意見があり、同学年で活発な競争をしながら切磋琢磨する環境になっていないことが、情報工学専攻だけでなく工学研究科の喫緊の重要課題である。ただし、少人数であったため、教員と接する機会が増え、研究設備を潤沢に使用できたことが満足度からも窺える。その結果、総合評価は平均 9.2 と非常に高い数値となった。特に研究指導においては平均 4.6 の高い数値を示し、教員とマンツーマンの個別指導が満足度を得たものと推察できる。前年度の修了生は、学会活動が非常に活発で、上位 3 名は 2 年間で 5 回以上の外部発表を行い、外部研究者との意見交換によるコミュニケーション能力向上、幅広い知識獲得によって、高い満足度と自信を得て修了したと考えられる。

また、修了生が学部生を指導することで、自らの研究におけるスケジュール立案、先行研究調査法等を学んでおり、教えることの大切さを実感できたものと考えられる。TA を行うことで学部下級生との交流機会が生まれ、より多くの交流が双方にとって有益になったと思われる。今後もより一層交流機会を増やすことが大学全体を活性化させると考えられる。

アンケートから、大学院教育においては、教養・専門性・論理的展開・自主性・困難回避能力は獲得できたと考えており、当面のカリキュラムに問題はないと思われる。一方、講義室の教材等の充実度には不満が見られ、少人数教室の設備の不備がアンケートに反映されている。また、図書館に対しても高い満足度ではなく、インターネットで得られない情報は、図書館でも得られない場合が多くあることが結果に反映されている。

アンケートにおいて、特に低い数値となったのは、[国際的な視野]に関する項目である。本学の学生の弱点として、語学が挙げられるが、アンケート結果は弱点を明確に表している。情報工学演習において、昨年度も海外から講師を招き、講演を行ったが、英語で質問するのも困難で、弱点を自覚したものと考えられる。国内発表は数多く行っても、国際会議の投稿が十分でなく、英語の読み書きと会話力の向上が課題として挙げられる。

情報工学専攻では、学生のプレゼンテーション能力向上、研究に対する指導教員以外からの助言、計画的に研究を促進するための重要な演習科目として情報工学演習を必修科目としてきた。2012 年度から、より一層プレゼンテーション能力を高めるため、前期・後期の研究成果発表を従来の 2 回から 4 回に増やした。一昨年度までは過渡期における学生が居たため、発表回数の増加が不満となっていたが、昨年度の修了生からは年 4 回の発表が定着し、2 回の研究報告と 2 回の論文紹介が研究を促進し、関連分野の位置づけを明確化することに役立ち、学生にとってプレゼンテーションの練習にもなっていると思われる。今年度からは、紹介論文を英語に限定し、数多くの英語論文を読むことで、英語の弱点克服のための切掛けにする予定である。

卒研内容の早期把握については、学部との兼ね合いもあり、研究室訪問期間を時期的に移動するのではなく、プレゼミ時間で卒研内容を早期に指導することを、学科教員に依頼している。

2014 (H26) 年度 修了生満足度調査結果の検討結果

2015年7月6日

大学院 医療福祉工学研究科 医療福祉工学専攻

2014年度専攻主任 吉田 正樹

まず全体の平均は、昨年の3.5から3.4に低下したが、傾向としては大きな傾向に変化はなかった。個別に項目で見ると、昨年に比べて上昇した項目は、「6 困難に直面してもそれに対処していく力」、「7C 国際的な視野(国際交流)」であった。昨年後期より留学生が入学したことによると思われる。また、昨年に比べて低下した項目は、「2 専門的な知識・技能」、「4 的確な判断力」、「7A 国際的な視野(専門分野)」、「7B 国際的な視野(異文化理解)」、「8 コミュニケーション能力」、「9 リーダーシップ」、「10 他人と協調して物事に取り組む力」であった。「1 幅広い分野にわたる教養」については、昨年と同じであるが、一昨年に比べて低下している。過去には、幅広い分野の特別講演会を開催してきたが、昨年度は開催の回数が少なく、分野が偏ったことによると思われる。対策として、2015年度よりカリキュラム改訂を行い、学生の研究分野以外の科目を選択必修として履修するようにした。さらに幅広い分野にわたる教養を身に付けさせるため、必修科目として、医療経済や高齢社会の問題、研究倫理に関する科目を新設した。また、座学だけではなく、学生に対する研究指導においても幅広い分野の意見を吸収できるように、集団指導体制を確立した。今までは、修士論文作成時に副査から指導を受けていたが、修士1年生の段階から、研究経過報告会では異なる分野の教員の指導を受けるように変更した。2015年度には、これらの変更によって満足度が向上することを期待する。

また、「7 国際的な視野」は以前から2点台の低い結果が続いている。2013年度は、大阪で開催された生体医工学分野の国際学会で発表する学生が多かったことによる上昇したが、2014年度はもとに戻っている。今後、国際学会での発表を推し進めるとともに、海外の著名な研究者を招聘し特別講演会を開催する予定である。

自由記述において、他大学との交流を希望する意見があった。今後大阪地区で開催される学生が多く参加する生体医工学分野の研究交流会に参加し、他大学の学生との交流の機会を設けるようする。

2014 (H26) 年度 修了生満足度調査結果の検討結果

2015 年 7 月 6 日

大学院総合情報学研究科デジタルアート・アニメーション学専攻

2015 年度専攻主任 上田 和浩

2013 年度と比較して、2014 年度では、項目[A]において 4.2 から 4.6、項目[B]においては 4.7 から 4.9、項目[C]では 8.5 から 9.0 へと評価が上昇している。調査対象人数が2名と少数ではあるが、全般的な教育効果があったものと判断できる。

項目[A]において、2013 年度に続いて 7B「国際的な視野(異文化理解)」と 7C「国際的な視野(国際交流)」の評価が 5.0 となっていることは、この問題に専攻が継続的に取り組んでいる成果であると判断できる。また、1「幅広い分野にわたる教養」、2「専門的な知識・技能の獲得」といった点においても 13 年度からの上昇がみられることは、カリキュラムおよび授業内容の教育効果があったものと考えられる。その他の項目に関してもおおむね上昇している。

一方、3「物事を論理的に考える力」、5「自ら課題を見つけそれに取り組む力」、7C「国際的な視野(国際交流)」の評価が昨年度より低くなっており、学生指導上の課題と考える。

項目[B]は 4.0～5.0 と高い評価であった。特に 4「研究やゼミにおける指導」が昨年に続いて 5.0 であったことは、M1 から主査、副査による複数指導体制においていることと、専攻として定期的に関いた合同ゼミナールによって指導教員以外の教員のアドバイスを得られたことがよかったのではないかと考える。

一方 5「図書館の図書・雑誌の充実度」、6「図書館の利用のしやすさ」に関して評価が低いのは、留学生が多いこと、キャンパス間で施設が分散していること等の要因が考える。専攻として取り組めることは、学生の希望する分野の図書を学生用図書予算で充実させること、図書館の利用を促す指導などが考えられる。

専攻全体として今後より教育効果を高めるためには、教員個々の姿勢だけではなく、充実した教育環境とシステムの構築が欠かせない。これまで、全大学院生および教員が参加する合同ゼミナールを定期的に関いており、2015 年度においてもすでに 2 回行っている。これは学生の作品制作上、大いに役立っていると思われる。また、M2 生には作品を学外で発表することを義務にしており、2014 年度はグランフロント大阪のナレッジキャピタルにおいて 2 月 14 に展示発表を行った。これなども作品の質的向上に役立っている。しかしながら、学生が自主的に学外での交流をする姿勢があまり見られず、今後の指導上の課題と考える。

学生との密接なコミュニケーションをベースとした指導とより充実した教育環境の構築を目指して、専攻内での議論を引き続き行なっていきたい。

2014 (H26) 年度 修了生満足度調査結果の検討結果

2015年7月31日

大学院 総合情報学研究科 デジタルゲーム学専攻

2014年度専攻主任 高見友幸

総合評価は、2013年度の調査結果よりも高く(+0.4)、2012年度から2年連続の上昇(2年間で+0.6)となり、悪くない結果である。これと連動して、項目A、項目Bの平均スコアでも、2013年度の調査結果から、それぞれ、+0.2、+0.3の上昇となっている。ただし、項目A、Bの各項目ごとに比較した場合、項目によっては、大きな増減が見られる。項目Aでスコアが大きく上昇した項目は、困難に直面してもそれに対処していく力(+0.5)、国際的な視野(+0.4)、自ら課題を見つけそれに取り組む力(+0.4)であり、大きく減少した項目は、専門的な知識・技能(-0.7)となっている。項目Bでは、発表や質疑応答を伴う演習形式の授業(+0.9)、研究用実験室の設備・機器の充実度(+0.8)が目立った増加である。

授業科目や設備については、ほぼ変わらないことを考えると、総合評価の上昇は、大学院生の在籍数の減少を反映している可能性がある。少人数での授業形態となることから、必然的によりきめ細かな教育環境が実現することになるからである。また、研究やゼミにおける指導においても、ひとりの大学院生により多くの時間をかけることができる。総合評価の絶対値も8.0と高評価であるが、それとともに、項目Bで高いスコアだった項目は、発表や質疑応答を伴う演習形式の授業(4.7)、研究やゼミにおける指導(4.5)だったという点とも矛盾しない。大学院進学へのアピール点として、少人数でのきめ細かな授業、密着した研究指導という点を強調すべきかも知れない。

項目Aで特徴的な点は、専門的な知識・技能をあまり獲得できなかった(獲得度2)という回答が2件あった点である。総回答数が6件と少ないため、有意な結果とは言えないが、例年には見られなかった傾向である。自由記述の回答も考慮すると、第一には実用的な技術面の獲得に不満が残ったものと思われる。個別対応で学部の授業への聴講を進めるのが妥当であるが、今後このような回答が増える場合、学部と大学院の合併または合同授業のような形態も検討すべきであろう。大学院生の実力低下の現れと考える。

2014 (H26) 年度 修了生満足度調査結果の検討結果

2015年7月6日

大学院総合情報学研究科コンピュータサイエンス専攻

2014年度専攻主任 鴻巣 敏之

個人の知識, 能力の獲得については, 4.0 強から, 4.0 弱に少し数値が減少した. 専攻としての教育運営について, 前年度と変更した部分はないので, 2014 年度修了生個々の特性によるところが大きいと思われる. 大学院教育における授業の評価において同様の現象が見られた. しかしながら, 研究やゼミの指導は上昇している. 修士論文に直接関係があり, 興味を持って行えることに関する評価が高いが, 直接研究と関係のない授業に関しての興味の低下がそのまま評価に表れているように思える. 授業の工夫も必要であるが, 自分の興味のないことや研究に直接関係ないことについても学び, そこから知見を得て, 場合によっては自分の研究に生かすことを考えるよう指導する必要があるように思える.

自由記述についても, 特に目立った否定的な記述は見られなかった. 授業について上述したことと関連する記述もあり, 指導が必要と思われる. 他学科や他団体との交流を求める記述が毎年みられるが, 専攻においてそのような機会を設けるレベルではないと考える. ただし, 研究室レベルでの対応や, 学生個人が学会, 研究会に参加して交流をする機会, 情報を指導教員は提供し, 導いていく必要があるかもしれない.

事務部門

2014（H26）年度
「卒業生・修了生満足度調査結果の検討」

※事務部門については非公開

■参考

当報告書と合わせ下記の資料が参考となることを、添えておきます。

『教育基本3方針（ポリシー）』

<http://www.osakac.ac.jp/about/policy/>

2015年8月
教育開発推進センター（CED）事務室
寝屋川キャンパスF号館2F
〒572-8530 寝屋川市初町18-8・内線：3129
ced-office@mc2.osakac.ac.jp